

鹿児島県史料

薩摩藩法令史料集二

解題

本『薩摩藩法令史料集』二（以下、『法令集』）では、「歴代制度」巻之十五より巻之三十一までを所収する。なお、『法令集』は最初の計画では全八冊で刊行する予定であったが、編集上の都合により全七冊に収めることになったことを断っておく。

本冊に含まれる史料は、その内容から次の六つに大きく分けることができよう。すなわち、一道之島・琉球（巻之十五・廿二）、二藩財政（巻之十六・十七）、三交通・運輸（巻之十八・廿一）、四神社（巻之廿三）、五儀式・儀礼（巻之廿四・廿九）、六身分・格式（巻之三十・三十一）、である。

一道之島・琉球（進貢・接貢）

鹿児島港を南に航路を採り、種子島・屋久島を中心とする大隅諸島を過ぎ、口之島・中之島・諏訪之瀬島・悪石島・宝島と飛び石のように位置する吐噶喇列島を経て奄美諸島の奄美大島に到着する。大島の東側には喜界島が位置し、南へは徳之島・沖永良部島・与論島と連なり沖縄へ達する。奄美諸島の南端にある与論島が鹿児島県と沖縄県とを画する島であり、江戸時代には薩摩藩と琉球国の境となる。江戸時代、奄美諸島は琉球へ至る道筋にある島ということから「道之島」と称された。

慶長十四年、薩摩藩は大将樺山久高、副将平田増宗とする軍勢によって道之島・琉球を征圧し、道之島は薩摩藩の直支配、琉球は対外的には琉球国と独立国の体をとながらも、幕府の承認の下に薩摩藩が実質支配し、道之島の特産物、琉球国の朝貢貿易による輸入品を藩益の源としていたことは周知の通りである。そのため、ここで採録されている史料

は、道之島に関しては一部分地誌を含むが、琉球関係が「進貢・接貢」であることに象徴されるように、基本的には薩摩藩の経済的利益に関係するものとなっている。

1、「道之島」の項には、元和九年から文化七年までの期間の史料が含まれる。元和九年の「大島置目之条々」(868)は特別に年次が離れているが、その他の史料は元禄・享保期の史料に偏っている。そのため、薩摩藩の財政と道之島との関係を見る時に特に重視される黒糖の生産、収奪一つをとっても、その画期に当たる年の史料はすっぽりと抜けており、『法令集』一の解題で指摘したように、編纂が中途で打ち切られたことによる欠点と言うことよりも、黒糖政策に関することは意図的に採録しなかったことによると考えられる。

薩摩藩の黒糖支配は、第一次定式買入制(定額買上制)：正徳期～安永六年、第一次惣買入制(専売制)：安永六年～天明七年、第二次定式買入制：天明七年～天保元年、第二次惣買入制：天保元年～明治五年、と変化するとされる(『鹿児島県の地名』総論)。第二次惣買入制以降は『法令集』の史料所収時期の範囲外であるが、当然所収されるべき範囲にあるそれ以前の画期の史料も所収されていない。そのため『大島代官記』など他の史料によらざるをえないが、それらも編纂物であるとの欠点を持っていた。原史料の収集が必要になる所以である。

幸いにして、鹿児島県歴史資料センター黎明館の事業として平成十四年より三ヶ年間にわたり奄美諸島の全市町村を対象にした史料所在の確認調査が網羅的に行われ、凡そ九千点におよぶ史料所在確認が予定され、目録が作られつつある。地道な調査に当たられた多くの人の労を多としたい。現在の財政事情を考えると困難であることは十分理解するが、できるならばこの事業をさらに拡大発展させ、史料の収集・研究など奄美諸島の総合的研究に繋げてゆく態勢ができることを切に願っている。

さて、先に述べたような欠点がありながらも、この項には人・土地・産物の支配や通行・運輸など道之島の基本史料

を所収する。興味ある事柄について若干紹介する。

① 宗教・習俗・風体に対する制限または強制：元禄七年、喜界島代官衆への「覚」には、「田島ヲ荒並作障ニ神ノ山ケンモンタマカリ所ノ由候テ竹木ヲ相立置候事」・「病人有之候時分致祈念、牛馬其外生類ヲ殺並衣類家財等取候事」が禁止され、島中のよた共へ堅く守るよう申し渡された。また、この書付は後の代官へ継ぎ渡すものとされた(856)。喜界島におけるこれらの規制・禁止は、安永七年、代官高橋武右衛門により発布された六〇ヶ条の法令「島中へ伝渡」の中にもあるが(『鹿児島県の地名』総論)、この法令はその前駆をなすものと位置づけられる。

逆に道之島の風俗が強制される事例として、享保二十年の「道ノ嶋方御用人」宛の申渡(857)に注目したい。これによると、道之島の者が鹿児島へ医道の稽古にきてても、鹿児島島の医師のように剃髪することを禁止し「島人ノ姿ニテ致稽古」すことを強制し、当分鹿児島にいる者も髪を立てて「島支度」とするよう申しつけた。また、医道稽古で鹿児島にいる場合も七ヶ年を限度とした。さらに(837)では「道ノ嶋人事、此地方・七嶋人ノ如ク月代並成人已後剃髪仕儀可為停止事」・「道ノ嶋人ノ儀ハ島人相応ノ姿ニテ、名モ附来候通ニテ可有之候処、何十郎何兵衛ナト、名付候モノモ有之由、不可然候、惣テ此地方・七嶋人ノ名ニ不紛様ニ道ノ嶋相応ノ名ヲ付可申候」と、髪型についてはさらに明確に指示し、名前についても道之島に相応しい名前を強制したのである。なお注意しておきたいことは、この区別の対象は七島人すなわち吐噶喇列島の人々にも及んでいたことである。このように、藩は、道之島を鹿児島本土と厳然と区別する方針を採ったのであり、延享元年、島人の武器所持禁止(860)もその路線上にあった。

② 就役運動：享保五年「申渡」(855)に次のようにある。

島与人ノ儀ハ別テ懇望ニ存候付、近年ハ鹿児島へ申越才覚ヲ求致懇望島モ有之、不届ノ至候、右体ノ儀ハ為代官被遣置見合ヲ以申出候上、遂吟味相応ノ者へ申付事ニテ候処、鹿児島へ直ニ申越致懇望儀不宜事ニ候条、向後鹿児島へ申

越才覚ヲ以致懇望候者へハ与人役申付間敷候条、右ノ趣得其意、島中へ稠敷可申渡候

すなわち、与人となることを求めて鹿兒島へ渡海し、才覚により懇望することを禁止した。城下士でも同様な伝手を求めた就役運動は一般的であり、就役運動には金がかかったから、道之島から渡海の上、鹿兒島に滞在しての就役運動には相当の資金が必要であつたろう。その運動が功を奏し首尾よく中間管理者である与人となれば、十分に失費を取り戻せる役得があるだけでなく、名譽心も満足させるものであつたが、それは「与人其外迄モ代官附役ノ用物ニ事寄セ致仕繰」ことにより得られるものであり(851)、百姓を犠牲とするものでもあつた。

③売役：『照国公感旧録』に「藩制に執政より胥吏に至る迄、年期を立て藏方の名職を授くる例あり、凡そ藩吏にして藏方の役職を受けるも、自ら其職に就くにあらず、一種藏方を稼職とする者に向て、価を約して其職名を売与す」とあるように、薩摩藩では慣行として、一定の期間ごとに売却されることを前提とした役が家老や御家老座書役等に与えられた。原口虎雄氏が言う「心付藏方」である。与えられる役は、役得の多い諸郷の下代や出物藏役である。道之島の諸役は「心付藏方」と全く同一ではないが、売買されていた。

文化七年、三島(大島・徳之島・喜界島)の代官・附役への申渡に、「三島諸役々交代ニ付、已前ニ相替リ格別附属料過当ニ差出、致渡海者モ有之哉ニ相聞得候、代官・付役交易砂糖斤数被定置候処、右様附属高料ニ付テハ別段趣法相企、島人共致迷惑、自然ト黍作り細メ候向ニ成立候テハ、当御時節、猶又御繰合御難渋相成不軽事候条、諸役々曾テ法ノ取引不致様可致精勉候」(832)とある。すなわち、役の売買が問題であるのではなく、格別の高額で役を譲り受けることが問題とされているのである。これは当然のことながら、在役期間中に購入料を賄った上に利益をあげるため、「別段趣法相企」ることにより島人を収奪強化することにつながるからであつた。藩が、役人の勤め方に当たり、「御規帳」・「物定帳」などの遵守を命じ、「自分ノ勝手ヲ構」ることの禁止を度々出す必要があつたのは、その横行が目

余ったからであらう。しかし、藩が役の売買そのものの禁止ではなく、高額による売買を問題としているのは、役売買が恒常的に行われていることに鑑み一定の役得を認めているにも関わらず、藩の採る黒糖入手増加策の阻害となっていたからである。

④城下士の就役独占：城下の下級武士にとり就役の有無は重大な関心事であった。役を離れることは即生活に打撃を与えたからである。このため、藩も城下士の就役拡大の方針をとった。延宝四年、郷士（厳密には〇〇衆、〇〇衆中、外城士と使い分けなければならないが、郷士で統一する）を鹿児島藩の筆者役から外して城下士に限定し、正徳三年には城下士に就役を限定する役を十七新たに指定した。これらの役は役得の多いものであったが、その内に「道之島代官附役」・「琉球在番役之内筆者并与力」も含まれている。

『道之島代官記集成』（福岡大学研究所）により、道之島附役について右のことを確認し、さらに就役の特徴について触れよう。

i 郷士の附役：代官附役に郷士が就いている記載があるのは、大島・喜界島・沖永良部島である。徳之島の附役には郷士と肩書きされた者はいないが、はたして全て城下士であるかは今後検討の余地がある。

大島の附役は、寛永十六年の初置時には三人であり、同十八年以降五人となる。十六年の附役は中里刑部左衛門・木藤九右衛門・石塚七左衛門の三人であり、中里・木藤は国分郷士である。郷士が附役として記される最後は宝永六年であり、山崎清左衛門（谷山郷士）・湯田主右衛門（大根占郷士）の二人である。寛永十六年～宝永六年まで、二二ヶ郷、延べ五三人の郷士が大島代官の附役となっている。喜界島を大島代官が兼帯する元禄五年までの『喜界島代官記』記載分を加えると、二六ヶ郷、六二人となる。また、慶安二・承応二・万治二・寛文六・同八・同十・同十一・延宝三・同七・天和三・貞享二・元禄二・同四・同八・宝永四・同六年には複数の郷士が就役し、同一人が複数回就役することも

あった。二二ヶ郷の内、多くの就役者を出しているのは、小根占郷（延べ八人）、谷山郷（七人）、国分郷（六人）である。元禄六年、喜界島は大島代官の支配をはなれて専任代官支配となった。附役は二人である。それ以後附役となった郷士は、正徳三年、折田惣左衛門（志布志郷）、同五年、月島太郎左衛門（末吉）の二人だけであるが、正徳三年以降の就役であることは注目される。しかし、同島もこれ以降の附役に郷士の任用はない。なお、沖永良部島での郷士附役の就役は宝永五年、能勢三左衛門（指宿）・宮里仲右衛門（高山）を最後とする。

ii 鹿兒島士の大島勤務：城下士には繰り返し代官・附役・横目などを勤める者がいる。「大島代官帳」では、附役のみを二回以上勤める者が二五名、代官・横目などの他の役、他島勤めまでを含めて複数回勤める者は五五名を数える。再勤までの間隔は一定でないが、多くは十年以内に再勤している。例えば、税所新助は延宝五年・天和元年・元禄二年、武井善兵衛は天保三年・同七年・同十一年に大島のみで附役を勤め、中馬幸之丞は文化元年喜界島蔵方目付、同十年徳之島附役、文政二年大島附役と他島の役をも勤めている。

他の役を含め大島に再勤する代官は一三名いる。内、鎌田勘兵衛（寛文六年・同十年）、肥後翁助（文化六年・同十二年）の両名は代官のみでの再勤であるが、他は附役・横目を勤めた後、代官を勤めている。中山甚五兵衛は弘化二年附役を勤めた後、嘉永二年・同六年に代官を勤め、福島半次郎は天保九年に横目を勤めた後、同十三年喜界島代官、嘉永四年大島代官を勤めた。また、親子で大島代官・附役を勤める家が六家あり、道之島勤務の家と言うような城下士の存在を予想させる。

iii 検地役人：万治および享保の道之島の検地には郷士も参加した。徳之島と沖永良部島の万治検地は、宮原五兵衛・川田与右衛門を竿頭とする一二名からなる同一グループで実施されるが、その内の四名が郷士である。享保検地では、徳之島の場合、郡奉行東郷十左衛門、御筆者徳尾武左衛門を除く九名が郷士、喜界島でも同様に郡奉行と定筆者を除く

七名が郷士、大島の享保検地は十一・十二年で検地役人が異なるが、十一年検地では九名中六名、十二年検地では九名中三名が郷士である。享保検地では、検地の頭と筆算の中心者に城下土を据え、筆算・蒔見・竿取に郷士を任用している場合が多い。これは鹿児島本土の場合でも同様であり、土地事情・耕作の実際を熟知する郷士が便利であったからであらう。では、検地に任用される郷士はどのような郷士であらうか。

徳之島・沖永良部島の万治検地に加わった一人に伊作郷士井尻諸兵衛がいる。同家系図（吹上町歴史民俗資料館蔵「伊作士秩禄籍撰総系図」）によると、諸兵衛は元和二年誕生であるから、徳之島へ渡海した時は四二歳である。持高は諸兵衛期には二〇〜三〇石台、以後は石高を急激に減らしているが、噺（郷土年寄）や与頭の郷役を勤める家柄であった。井尻の例から推察すると、検地の際に任用される郷士は上級郷士であったと考えられる。

2、「歴代制度」に所収される大島の記述は『大島私考』によっている。『大島私考』の著者本田孫九郎親孚は宝暦十三年十一月鹿児島に生まれ、十八歳にて祖父親福の縁により史学生員（記録方見習）となり、副史（記録方添役）、太史（記録奉行）へと昇進し、文化十三年に没した。親孚は記録奉行の職にある時、苦しい家計を救うために、祖父も明和二年から勤めたように、希望して文化二年春〜四年春まで大島代官の職にあった。『大島私考』はその時の著述である。島民の実態を知悉した親孚が藩の採る黒糖政策にも批判的であったことは、大島に伝わる『大島私考』の写本に、砂糖専売制を批判して、「惣御買入」といときは、島民商売の交易を禁じて租税の余りを皆諸品に易て年貢と同じく上に奉る。これ人君の民の利を貪るに似たり、恥べきにあらずや」とある（大山麟五郎「大島私考」解題）ことによりよく知られており、重豪の跡を襲った斉宣が、樺山久言・秩父季保を家老に抜擢し、重豪の採った財政経済政策を転換しようとしたことに対して、重豪が斉宣および樺山・秩父に与する一党を処分した文化朋党事件では、五年九月廿五日に逼塞の処分を受けている。親孚は藩主重豪の命を受けて編集した『薩藩名勝志』の功により、大島代官の勤務を終えて

帰国した時、特に賞賜され元の家格である小番に直されたが（原口虎雄「本田親孚」〈鹿児島大百科事典〉）、『称名墓志附録』に「既而以原爵直騎衛著、不復就官」とあるように、記録奉行には復さなかった。文化朋党事件関係者の地位と処分の状況をみると、家格の記載はなく、無役となっている（黒田安雄「薩摩藩文化朋党事件とその歴史的背景」『九州文化史研究所紀要』第十九号）。なお、親孚の子親賢は従弟伊地知季安の娘を娶っており、親孚の墓誌は季安が書いている（『称名墓志附録』）。親孚の著述は、『大島私考』・『薩藩名勝志』の外に、『大島要文集』・『称名墓志』・『称名墓志備考』などがある。

大山麟五郎氏によれば、伝存の『大島私考』に目次のみがあり本文のない「言語之事」は故意に書写されなかったとされ、また、「天保度以降の専売制下の藩庁的視覚に立つ写本者が意識的に抜いた」（『大島私考』解題）部分もあるとされている。目次のみがある他の一項「芭蕉ノ事」も同様に考えることが許されよう。

「歴代制度」の大島の項と『大島私考』を比較すると、一部項目の順序が変えられると共に引用されていない項目があるから、原著からすれば二重に改変されていることになる。

『大島私考』では、大島の来由、次いで間切・村数・島廻里数・神社仏閣などの地誌的内容、代官以下の諸役人と続き、その後が高頭が記される。「歴代制度」では、高による支配を強調するかの如く冒頭に高頭が記され、「大島来由の事」は島廻里数と神社仏閣との間に唐突に挿入されている。さらに、「村名書上」・「間切の事」と『大島私考』にある順とは逆になっているが、この外は『大島私考』と同じ項目順になっている。引用されていない項目は、『大島私考』に目次だけがあり本文がない二項目の外に、甘藷ノ事・蘭筵ノ事・煙草ノ事・屋舎ノ事・屋舎ヲ齋嫌日サクコノ事・遊日ノ事の項目である。

3、薩摩藩による琉球支配の実態は、藩の直支配であった道之島以上に秘すべきことであったがために、琉球につい

ては、支配ではなく交易面の史料が主に採録されている。『法令集』一に所収される卷之十四では、琉球由来・琉球国・琉球教条・琉球法度が含まれるが、中心となっているのは、琉球館を通した薩摩藩と琉球との関係を示す琉球法度であり、卷之廿二では、進貢・接貢の項目に示される通り、琉球国の行方明・清への朝貢貿易に関するものである。

支配に関わる史料は、卷之廿二では、わずかに「家久公ヨリ琉球へ御人数被差遣、中山王降参ニ付其段権現様 台徳院様へ被 仰上候処、則被遊 御頂戴候御内書」の内容説明付きで、家康より家久宛、秀忠より義弘宛の二通の内書(1252)のみであるが、『旧記雑録後編』には、採録された内書と一連の秀忠より家久および義久宛の内書がある。また、慶長十四年、薩摩藩の琉球支配の直接の契機となる島津義久より中山王宛の將軍への朝覲を求める書(『旧記雑録後編』四一五三二)、武力発動に際して与えられた家久・惟新・龍伯三名連署の「琉球渡海之軍衆法度之条々」(『同』四一五四四)、大将樺山久高へ与えられた「覚」(『同』四一五四五)など「旧記雑録」に採録されている支配に関する多くの基本史料を省いているところに藩の意思、「歴代制度」編纂の方向性が窺える。

なお、卷之廿二では、(1252)で示したような文書内容の簡略な説明付きの文書と、そうでない文書が混在する。内容説明付きの文書とそうでない文書に明確な区別の基準は見いだせない。『法令集』一の解題で指摘した複数の採録者による不統一としておく。

さて、琉球館は鹿児島城下における異国であり、琉球人の市中徘徊は制限され、士庶との自由な交わりも禁止されていた。幕府は琉球を介した貿易額の制限に乗り出し、貞享四年進貢料銀八〇四貫目、接貢料銀四〇二貫目と定め、さらに正徳五年には進貢料銀六〇四貫目、接貢料銀三〇二貫目とした。これらの進貢・接貢料銀の受け渡しを含め、琉球館は朝貢貿易に必要な費用の調達を主務としていたため、これに関する文書が中心である。そのため、卷之十四でも史料の採録はないが、琉球館はまた琉球で消費する日用品入手の窓口でもあった。その一つとして茶について触れよう。

文化三年、鹿児島で茶製造願いが出されたことにより琉球館が人吉藩産の茶、すなわち求磨茶を購入することが差し止められたことについて、つぎのよう願っている。

琉球の儀、諸士を始末々ニ至迄、求磨茶を日用ニ仕候故此節も右茶買下候様取分ケ注文を以段々申越有之候処、右通御差留付而は買入方不相成儀ニ付、御当地製の茶取寄致風味候処、求磨茶より余程氣搦有之、遠海の儀付ては、船中へ積入置候儀も難計候得ば、猶以氣相搦可申と必至と込り入居申仕合御座候間、琉球へ差下申答の内、無抛、届の方へは求磨茶差下、余は御当地製の茶差下用度御座候間、何卒求磨茶六百俵買入差下候儀、御免被仰付被下度奉願候、左様御座候ハ、館内立入者の者共へ買入方申付度奉存候〔琉球館文書〕一八三

鹿児島産の茶は求磨茶に比べ風味が劣っていたので、全てを鹿児島産の茶に替える訳にはいかなかったのである。求磨茶は琉球では日用に広く用いられ、「余国の茶にては一切不致納得、いつれの筋求磨茶にて無之候得ば、諸人合点不仕」〔琉球館文書〕二〇四と、求磨茶への信頼は厚かった。

琉球館が買入れる求磨茶は年々一五〇俵内外であり、人吉の商人が銘々勝手に売り捌いている時には品物もよく、値段も安かったが、人吉藩で産物の専売化が始まり、販売は請人四人の一手販売となったために売価も高騰していた。文化八年、専売会所が藩勤定役の受持となったことを契機として、琉球館が買入れる茶の特別取り扱いを人吉藩へ掛け合うよう琉球館は薩摩藩御物方へ依頼している。この依頼をうけた御物方は、「求麻茶館内へ直買入の筋、御物御計にて及御懸合、其通許容有之候ハ、益筋可相成候得共、後達て茶製不出来等の訳を以直組引上ケ又は品位不宜様共成立儀も有之候ハ、商人相對の様ニは被致間敷、左候得ば、無是非高料ニ不買入候ては不叶答候、左候て、却て当分より迷惑可相成」と、一時の益は後の災いとなる可能性もあることを指摘した上で、さらに次のように達している。

求麻会所納の茶、都て館内へ直買入の筋ニ御座候ハ、色々訳合相立、直組高料ニ相成儀も難計御座候へ共、会所へ

毎年三千五六百俵宛相納候、右の内ヲ千五百俵直買入ニ仕候ても、残り二千俵余は請人の手ニ相渡り、夫も御当地へ持越売捌申事候間、会所の直成万一右様の手筋有之、高料ニ相成候得ば、請人共御当地にて売出候直成を以引合申候得ば、早速相分り申事故、館内買入の方針、高料ニ売出候儀は決て被致間敷儀と奉存候（『琉球館文書』二〇五）すなわち、琉球館が全て直購入するのであれば高値購入となる可能性もあるが、三五、六〇〇俵の内一五〇〇俵の買入であるので特に高値購入ということにはならず、相場に応じた買入値段になるとした。

このように多量の求磨茶が琉球館を通じて琉球へ流れていった。この恒常的な多量の需要が見込まれる茶、およびもう一つの人吉藩の特産物である苧販売の一手販売権を手に入れ、これを当時薩摩藩で問題となっていた長崎会所における琉球産物（琉球を通じた輸入品）の販売代金未納と結びつけて、文政七年以降、代金未納の解消に乗り出したのが天草の豪農石本平兵衛であった。石本家の登場により、「歴代制度」ではその片鱗も見せない琉球館買入の求磨茶は、朝貢貿易、薩摩藩の財政と直接結びつくものとなったのである（武野要子「辺境相良藩と領外資本の関係」〈『九州文化史研究所紀要』一三〇号〉・黒田安雄「文化・文政期長崎商法拡大をめぐる薩摩藩の画策」〈『史淵』百十四号〉・安藤保「近世後期石本家と薩摩藩の関係について」〈『九州文化史研究所紀要』四五号〉）。

二 藩財政

薩摩藩の借銀は幕初から天保改革までは増加の一端を辿ったと言うのが通説となっている。いま、原口虎雄著『鹿児島県の歴史』に示される「借金表」A、『歴代制度』所載分B、『鹿児島県史』記載分Cを示すとつぎの通りである。

	A 銀高 () 内は金	B	C
1 元和元年	一〇〇〇貫余 (二万兩)		〇
2 寛永九年	七〇〇〇貫余 (一四万兩)		七〇〇〇貫目又は二万貫目余 ^(*1)
3 同十一年			八〇〇〇貫目余
4 同十七年	二一〇〇〇貫余 ^(*2) (三四、五万兩)		
5 寛文七年		二〇〇〇貫目 ^(*3)	〇
6 宝永七年		三四五〇〇〇兩	
7 寛延二年	三四〇〇〇貫余 (五六万兩)	同上	
8 宝曆四年	四〇〇〇〇貫余 (六六万兩)	同上	〇 ^(*4)
9 享和元年	七二六〇〇貫余 (一一七万兩)	同上	〇
10 文化四年	七六一二八貫余 (一二六万兩)	同上	〇
11 文政元年		九〇七一四〇兩程	〇
12 文政十年	三二〇〇〇〇貫余 (五〇〇万兩)		〇 ^(*5)

(*1) 寛永八、九年とある。(*2) 金換算は五〇匁替では四二万兩となる。(*3) 元金は二二九一一貫目。Bでは寛永十年とあるが、Cにより訂正。(*4) 宝曆三年とする。(*5) 文政末とある。なお、〇印は、A・Bに同じであることを示す。

10は三ヶ所の借財とあり、国元分が算入されていないことも予想される。また、5に示唆されるように、他の借財高も、元銀のみか利息分を含むかにより借財額は変化する可能性がある。借財の変化は、全体としては通説通りの傾向で

あるにしても、細かく見れば借財額は上下しており、藩政と関連つけた細かな考察の必要を感じる。

經常費の増加については、物奉行扱い分だけであるが、宝曆六年に比べ文化三年度（三年八月〜四年七月）は、米こそ三割強の増加であるが、銀・銭は二倍以上の増加となっている（1026）。

増加する借財と經常費に対応するには、支出削減と収入増加策が必要であった。

支出削減では、役所經常費の一律削減（896）、具体的例示による経費削減（900・893・897・899・920・915・914）、儉約専任の役人任命（930）、買物手続きの明確化（1000・1001・1004）等と、種々の経費削減の方法がどの藩主においても採られており、史料の所収される享保以降は、少し大げさに言うならば、常と代わる儉約令が常に施行され、経費削減がお題目となっていた。その中で注目すべきは、斉宣の改革である。

文化三年正月、斉宣の申渡を受けた家老連名論達には、「御産物高二不応御大借故、是迄之御儉約詮立兼、大身・小身末々迄モ一統困窮ノ上、又候出来・銀等被仰付候儀、至テ被遊御痛心候御事何共奉恐入仕合ニ候、右付テハ此節ハ何レニモ御省略ノ詮相立、近年中是非御立直ノ方相成、年限中ニテモ出来・銀等御用捨奉安尊慮候様無之テハ難相成事候（略）昼夜心力ヲ尽万端極々セリ詰遂吟味可致精勤候」（『島津斉宣・斉興公史料』二二六）と、省略を尽くし、出来・出銀の用捨を実現しようとした。これに際して家久期が参考にされ、寛永十一年、鎌田政統宛の伊勢貞昌書状が参照されたのである（913）。

右書状では、夫婦在江戸の場合、女房衆の帰国による支出削減、藩の窮乏には「知行上候上ニ刀ニ付置候金具ヲハツシ可致進上」とか、少々蓄えある者は銀子を借上るといふ奉公心に加え、八千貫目余の借銀返済には「朝夕汁を添候を、塩ニ而たへ候程之心持にて無之候ハ、調間敷と存候」（『旧記雑録後編』五―七四三）という厳しい儉約が必要であるとするものであったが、ここへの復古を理想とする改革そのものが文化朋党事件により挫折した。事件後も儉約策は採ら

れたが、「差当諸人迷惑ニモ相成候儀ハ用捨可致候」(925)と、一統熟和を旨とする政策であった。文化朋党事件後の人心把握のため融和策を採らざるをえない面があるにしても、儉約に取り組む構えは大きく変化したと言える。

なお、藩主経常費は、安永九年、在府時は銀二三〇〇貫目、在国時は銀二〇〇〇貫目に抑えることになっているが、この額内に抑えることの困難さは予想されていた(939)。享和元年には銀六七〇〇貫目余と大幅に増えており、藩主の経常費の抑制の難しさを示している。また、同年の見込みでは、借銀の利息だけでも薩摩藩産物販売代金全体に近づいており、藩全体の単年度収支も銀七六五〇貫目の不足となっていた(947)。

藩収支不足解決策としては、年貢の増徴が困難な薩摩藩としては、上知や出米・出銀の重賦課がなされた。元和二年、借銀一〇〇〇貫目の返済のため一匁の出銀を一匁三分とすることを決定している(『同』四―一三四七)。さらに翌年には、「借銀御返弁等諸事無際限之由」として一匁四分の決定を二匁とし、期限内に未納の場合には未進銀二匁に付き高一石の知行召し上げを厳命した(『同』四―一四七一)。しかしこれにより不足を吸収できなくなると、隠居分の一部繰り入れ(944)等もなされるが、これは精神的引き締め策以上のもではなく、実効ある対応策としては特産物、琉球産物への依存拡大へ進まざるをえなかったのである。

三交通・運輸、四神社、五儀式・儀礼、六身分・格式に収める史料は、薩摩藩研究にとっては何れも基本データとして重要である。しかし、「寺社家格式」の寺高を同時代に編纂された『薩藩政要録』の寺高と比較すれば、高の違いも多くあることに代表されるように、他資料による確認作業が必要な場合もあることを付け加えておく。

(安藤 保)

例 言

一本書は、東京大学史料編纂所所蔵「島津家歴代制度」七十一巻本（目録・巻之一〜七十）を底本とし、そのうち「巻之十五〜三十一」を『鹿兒島県史料 薩摩藩法令史料集二』として刊行するものである。

一本書の目次は、「歴代制度目録」および各巻頭目録をもとに、巻・項目の索引として作成した。

一文書の掲載順は、原則として底本に従った。

各文書の文首には通し番号を付し、関連する複数の文書から構成されたものについては、小番号を付して分けて収めた。

一収載した文書を他の文書や写本などによって補充または校合する場合は、次のようにした。

ア 校合史料からの補充箇所は▽△で示した。校合史料と異なる箇所は傍線もしくはくで示した。

イ 補充や校合に使用した典拠史料の名称および略記号は以下の通りである。

略記号

（異本） ⑥ 「歴代制度」六十一巻本（東京大学史料編纂所所蔵 目録・巻一〜六十）

（諸写本） ⑦ 都城島津家本「列朝制度」（都城市教育委員会所蔵）

（原本史料） 旧記雑録（旧記雑録・新編島津氏世録正統系図）ともに東京大学史料編纂所所蔵）

(刊本史料)

旧記雑録前編 (『鹿兒島県史料 旧記雑録前編』一～二)

旧記雑録後編 (『鹿兒島県史料 旧記雑録後編』一～六)

旧記雑録追録 (『鹿兒島県史料 旧記雑録追録』一～八)

「諸旧記一」 (『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺伊地知季安著作史料集四』)

令条記 (近世法制史料叢書? 『御當家令條』)

御触書寛保集成 (『御觸書寛保集成』)

御触書宝曆集成 (『御觸書寶曆集成』)

御触書天明集成 (『御觸書天明集成』)

御触書天保集成 (『御觸書天保集成』上・下)

「廻船之式目」 (内閣文庫本)

「薩陽落穂集」 (『新薩藩叢書四』)

一 刊行にあたって本文の体裁をおおよそ次のように統一した。

ア 字体は原則として常用漢字を用いた。ただし、人名や地名については原文の表記を重んじた。

イ 「歴代制度」は謄写本であるため、適切な位置で字配り・行替えを行い、体裁を整えた。

平出・擡頭・闕字・割書および但書などは、原則として底本の体裁に従い、闕字は一字分あけとした。

文書の差出年月日・差出所・宛所の位置などは、適宜改行・字配りを行い、体裁を整えた。

ウ 仮名は、底本の体裁に従った。変体仮名は仮名に改めたが、江・而・之・者・茂はそのまを用いた。

エ 文書・記事などの本文中には、適宜に読点「、」や並列点「・」を付した。

オ 原注は、底本の体裁に従って示したが、新たに付した注記は、()で囲み原注と区別し、文意の通じない箇所や文字は、(ママ)・(○○カ)などとした。

カ ルビは、底本にあるもののみを付した。

キ 朱書は、(朱書)と注を付して朱書部分を「」で囲んだ。

ク 付箋・貼紙は、右肩に(付箋)などと注を付し「」で囲んだ。

ケ 文字の不明や欠失は、その箇所を□で囲み(摩滅)・(破損)と傍注を付した。

また、判読不能な文字については■で示した。

コ 「薩摩藩法令史料集二」では、底本で使用された用字の表記を次のように統一した。

嶋津↓島津

一卷末に、収載順に文書・記事等の目録を掲げた。巻末目録に示した文書・記事などの題名は、当初よりあった原題は原則としてそのまま採ったが、ないものはそれぞれの種類や内容をふまえて題名を付けた。なお、参考として校訂に使用した刊本などの出典を示した。

鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集二 目次

歴代制度卷之十五（八二七〜八九一号）	一
道之島（八二七〜八六九号）	一
大島（八七〇〜八九一号）	三五
歴代制度卷之十六（八九二〜九六八号）	五三
御儉約（八九二〜九三七号）	五三
御銀割（九三八〜九五五号）	八五
御借金（九五六〜九六四号）	九二
御参勤料（九六五〜九六七号）	九六
用心銀（九六八号）	九九
歴代制度卷之十七（九六九〜一〇二八号）	一〇〇
諸向総（九六九〜九七三号）	一〇〇
諸御礼銀（九七四〜九七七号）	一〇四

目次

取込拝借(九七八〜九九二号) 一〇六

負銀(九九三〜九九九号) 一一七

御買物(一〇〇〇〜一〇〇六号) 一二〇

御払物(一〇〇七〜一〇一八号) 一二四

金藏元(一〇一九〜一〇二〇号) 一二八

金藏払(一〇二一〜一〇二六号) 一三〇

余勢銀(一〇二七〜一〇二八号) 一三六

歴代制度卷之十八(一〇二九〜一一〇二号)

運賃(一〇二九〜一〇八九号) 一三八

商物運賃(一〇九〇〜一〇九二号) 一六八

川米(一〇九二〜一一〇二号) 一七〇

歴代制度卷之十九(一一〇三〜一一五三号)

御賄料(一一〇三〜一一二〇号) 一七七

他国人数定(一一二一〜一一四〇号) 一八五

御役々他国人数定(一一四一〜一一四八号) 一九四

御国旅人数定(一一四九〜一一五三号) 二〇五

歴代制度卷之二十(一一五四～一一九九号)

苦勞米(一一五四号)	一一三
諸島賦附島人(一一五五～一一五九号)	一一五
江戸中急(一一六〇～一一七一号)	一一九
式日御使(一一七二～一一八三号)	一二七
道中駕籠(一一八四～一一八六号)	一三一
軽尻(一一八七号)	一三四
人馬御賦(一一八八号)	一三七
上乘賦(一一八九～一一九一号)	一三八
御船手物定(一一九二～一一九九号)	一四〇

歴代制度卷之二十一(一二〇〇～一二五一号)

御附届(一二〇〇～一二〇五号)	一四八
船法度(一二〇六号)	一二二
浦寄物(一二〇七～一二三三号)	一二五
他所船中(一二三四～一二六号)	一二六
浦賀印鑑(一二二七～一二三〇号)	一二三
同御番所(一二三一～一二四〇号)	一二四

大坂御番所（一二四一～一二四七号）……………二七二
同川内定（一二四八～一二五一号）……………二七七

歴代制度卷之二十二（二二五二～二二八四号）

進貢接貢（一二五二～一二八四号）……………二八一

歴代制度卷之二十三（二二八五～一三三二号）

寺社家格式（一二八五～一二九五号）……………三〇四
僧官成（一二九六号）……………三二〇
寺家法度（一二九七～一三〇五号）……………三二二
寺社家（一三〇六～一三二一号）……………三二九
靈符祭（一三二二号）……………三三七

歴代制度卷之二十四（一三三三～一三四二号）

御安置（一三三三号）……………三三九
御逝去（一三三四～一三三九号）……………三四五
御靈屋（一三三〇～一三三六号）……………三四八
御尊体御下（一三三七～一三三九号）……………三五二

御入寺（一三四〇号）……………三五四

御葬送（一三四一〜一三四二号）……………三五六

歴代制度卷之二十五（一三四三〜一四八三号）

御国忌（一三四三〜一四三三号）……………三六四

御精進日（一四三四〜一四五二号）……………三八四

御法事（一四五三〜一四七八号）……………三八九

御法会（一四七九〜一四八三号）……………四〇六

歴代制度卷之二十六（一四八四〜一六五二号）

御恐悦（一四八四〜一五九五号）……………四一三

公边御使者（一五九六号）……………四三四

御祝規（一五九七〜一五九八号）……………四三五

御願御届（一五九九〜一六三七号）……………四三六

御雁拝領（一六三八〜一六三九号）……………四四四

御肴拝領（一六四〇〜一六四二号）……………四四五

御馬拝領（一六四三〜一六四四号）……………四四八

伊勢家御礼（一六四五〜一六四六号）……………四四九

御登城御断（一六四七〜一六四九号）……………四五一
 公边御勤向（一六五〇〜一六五二号）……………四五二

歴代制度卷之二十七（一六五三〜一六六四号）

御内書式（一六五三〜一六五四号）……………四五四
 御奉書式（一六五五〜一六五六号）……………四五六
 御連署式（一六五七〜一六六〇号）……………四五八
 女文式（一六六一号）……………四六〇
 目錄式（一六六二号）……………四六一
 御招請（一六六三号）……………四六一
 入御（一六六四号）……………四六六

歴代制度卷之二十八（一六六五〜一七九七号）

御家督（一六六五〜一六七二号）……………四七三
 御讓物（一六七三〜一六七五号）……………四七七
 御初入部（一六七六〜一六八〇号）……………四八一
 御婚姻（一六八一〜一六九一号）……………四八二
 御入輿（一六九二〜一六九三号）……………四八五

御名称 (一六九四～一七三三号)	四九三
様文字 (一七三四～一七五九号)	五〇〇
御名順 (一七六〇～一七八四号)	五〇八
御機嫌伺 (一七八五～一七九〇号)	五一三
御献上物 (一七九一～一七九二号)	五一四
御進覽物 (一七九三～一七九六号)	五一五
御拝領物 (一七九七号)	五一七

歴代制度卷之二十九 (一七九八～一八七二号)

御元服 (一七九八～一七九九号)	五一九
諸人元服 (一八〇〇～一八一七号)	五二〇
家筋連名 (一八一八～一八二三号)	五二八
御姓氏 (一八二四～一八三二号)	五四五
諸家姓氏 (一八三三～一八三九号)	五四九
名遠慮 (一八四〇～一八七二号)	五五一

歴代制度卷之三十 (一八七三～一九六五号)

【御家中格式】

御一門（一八七三～一八八六号）	五六二
家名方（一八八七～一八九一号）	五六七
一所持同格（一八九二号）	五六九
寄合同並（一八九三～一九〇一号）	五六九
小番付御馬廻（一九〇二～一九〇九号）	五七三
新番（一九一〇～一九一二号）	五七六
御小姓与大番（一九一三～一九一九号）	五七七
小十人組（一九二〇～一九二三号）	五七九
郷士（一九二四～一九二七号）	五八一
与力（一九二八～一九三九号）	五八二
足輕（一九四〇～一九四九号）	五八六
諸家役々（一九五〇～一九五七号）	五八九
諸家中（一九五八～一九六五号）	五九一

歴代制度卷之三十一（一九六六～二二一〇号）

苗字帯刀（一九六六～一九九〇号）	五九七
医家（一九九一～二〇〇六号）	六〇五
七島郡司（二〇〇七～二〇三六号）	六〇九

百姓(二〇三七〜二〇四九号)	六二二
門屋敷(二〇五〇〜二〇五四号)	六二七
御船手附(二〇五五〜二〇八三号)	六二九
浦浜町(二〇八四〜二〇九一号)	六四〇
金山町人(二〇九二号)	六四二
苗代川人(二〇九三号)	六四三
寺門前者(二〇九四〜二〇九九号)	六四四
綱差(二一〇〇号)	六四七
地神盲僧平家座頭(二一〇一〜二一〇五号)	六四八
慶賀穢多行脚者(二一〇六〜二一〇八号)	六五一
陰陽巫祝(二一〇九号)	六五二
能役者(二一一〇号)	六五二
文書目録	六五五

島津家歴代制度卷之拾五 宝曆

道ノ嶋

大嶋

道ノ嶋

八二七

一 島方御用人へ

一道ノ嶋代官並附役勤方ノ儀ハ規模帳被渡置、先年已来諸事ノ儀以書付申渡有之候処ニ、猶又近年万端細蜜ニ申渡有之候へトモ、今以風儀不相直由聞得ノ趣有之、此儀何様ニ存違候哉、自分ノ勝手ヲ專ニイタシ、御物御不勝手、島人共ニモ及難儀候由不可然候条、先年已

来申渡置候通、自分勝手ヲ捨^①、御為宜、島人共不及難儀様一涯心懸、万事廉直ニ可相勤候、特^②當時代官並附役於島家来又ハ朝夕入用ノ品迄持渡候様為申渡置事候、然共代官^③並附役ニハ於島役料米被下置候付、其分ハ余計ニ相見へ候付、御物御買入相濟候已後、右米ヲ以砂糖其外ノ品相調差上^④候儀ハ其通ニモ可有之候、右之外砂糖其外ノ品余計ニ差登候ハ、^⑤遂吟味、其品取揚申付、又ハ時宜次第屹ト御咎目ヲモ可被仰付候間、聊大形ノ儀有之間シク候、且又、米・砂糖仕上船出帆相滞、山川着及延引候テハ、別テ御不勝手モ有之候条、随分積入差急キ早々出帆申付、此節ヨリ其詮相見へ候様ニ首尾可致候、右ノ段、附役又ハ与人横目其外末々ノ役々迄モ不洩様屹ト可申渡候、

一代官並附役共自物ノ品々、船頭水手共名付ニテ津口通相付相頼差登候儀ハ無之筈候へトモ、曾テ左様ノ儀致間敷候、万^⑥一体ノ聞へ有之候ハ、遂吟味、時宜次第^⑦申付候、尤、右ノ段船頭共へ諸人ヨリ何様相頼候トモ不受合様可申付旨、御船奉行へ申渡置候、

右之通申付候条、於島仕操等敷、其外風儀不宜儀跡々

先例ヲ以仕来候儀有之候ハ、都テ相改、規模並書付

ニテ段々申渡置旨ヲ以、万端正道可相勤候、

右、当春渡海道ノ嶋代官へ可申渡候、

（川田國權）
伊織
（宝曆）
二年申二月

八二八

一 徳ノ嶋代官

沖永良部代官へ

田畑作職、依年上見ノ願申出候節、不熟於無別条ハ早々

役々立会ノ上致見分、御法ノ通憲法ニ代成相究取納申

付、本初並当出来初代成究候役々連印ヲ以書出サセ、

代官致添書可申出候、

別紙二通、此節御船奉行並道ノ嶋差越候代官へ申渡候

条、於島万端為心得、道ノ嶋へ差越候座横目・表横目

へ可申渡候、

宝曆二年申二月十四日

伊織

八二九

一徳ノ嶋ノ儀、去ル亥年凶年ニテ百姓共致困窮候ニ付、

黍植重ミ往々潤相成候様ニトノ事ニテ為申付事候処、

年々御高所務ノ内役料米御扶持米等ノ用分残置候外、

有長ケ応分砂糖ヲ以引替上納申付候、其外ノ余計砂糖

今程脇売令免許候、先々ノ儀ハ其節ノ時宜次第何分可

申付候、

一山野地位悪敷、長々作職難成、致開替ノ由候付、先無

石申付候間、山野地黍作ノ畦反並砂糖高年々申出候様

ニ徳ノ嶋代官へ申渡候間、先々ノ儀ハ其節ノ時宜次第

何分可申渡候、

一上木上納ノ儀ハ現物上納申付候、

右之通申付候条、如例可被申渡也、

宝曆十年辰九月晦日

御勝手方印

喜入主馬（久徳）

八三〇

一高一万四百五十五石五斗

四斗二升八合代 口入

外ニ役米一升五合

賦米一升

① 上見部下り無之、受代、△押入四斗五升三合代

右、大嶋 ① 廻り五拾九里拾丁、鹿兒島より百四拾三里、喜界島江七り△

一高六千九百三十二石四斗

九升二合代 ① 口入△

外、役重一升 (米カ)

賦米一升

① 依願、上見部下り有之、△押入一斗一升七合

右、喜界嶋 ① 廻り六里二十丁、鹿兒島より百五拾八里△

一同一万九石七斗

二斗五升四合代 ① 口入△

① 外ニ△役米一升五合

賦米一升

① 依願、右同断、△押入二斗八升

右、徳ノ嶋 ① 廻り拾七里三丁、鹿兒島より百七拾九里、大島江拾八里△

一同四千百五十八石五斗

三斗代 ① 口入△ ① 依願、右同断、△

右、沖永良部嶋 ① 廻り拾里八丁、かこしまより貳百三拾四里半、よロンシマへ十八里△

一同千二百七十二石六斗

三斗代 ① 口入△ ① 依願、右同断、△

右、與論嶋 ① 廻り三里五丁、かこしまより貳百八拾七里半△

合高三万二千八百二十八石七斗 表方御蔵入

八三一

寛政(空白、ママ) 嶋代官書出

一米七千六百一十一石八斗六升五合六勺起

大島免本

一米一万四千八百六石八斗

代砂糖四百五十七万斤

外ニ三万斤、白砂糖一万斤引替

一米三百四十九石七斗二升起

代石入樽三万四千九百七十二丁代

一米千六百石

代砂糖四十万斤代

一同二十八石七斗二升起

右入樽二千八百七十九丁代

一同四千石起

代砂糖百万斤

一同百八十八石起

白砂糖一万斤代

一同二石二斗⑧八升起

右入樽百十四丁代

一同三百二十五石八斗三升一合八勺起

右一行、御買入莖並真綿海人草代

右、大嶋

右同

一米千三百八十八石三斗八升起

徳ノ嶋免本

右、黍地定代高納並役重(米カ)・賦米・故飯米・御狩代・御

狩夫代・所役繰船運上銀方納粟代表代込

右ノ内、

一米二千六百四十五石五斗起

右、御定斤七十一万五千斤代

外ニ砂糖一万五千斤、白砂糖方

一同五百十七石起

右、御買重十一万斤代

一同四百七十石起

右、去ル酉年御買米⑧十一万斤代

一同七百五十石起

右、去ル子年御買重十五万斤代

一同二千三百五十石起

右、当春被仰渡候御買重五十万斤代

一同九十石程

右、白砂糖五千斤代

一同百二十六石

右六行、入樽代米

右、徳ノ嶋

右同 喜界嶋免本

一米二百九十七石一斗八升六合起

但、大麦五百九十四石三斗七升二合代、

一同百七十六石四斗二升四合六勺六才起

但、小麦二百二十五石二斗二升一合代、

一同九百三十三石二斗四升同

但、当秋上納、

一同四十六石二升同

故飯米

一同二斗六升九合二勺八才同

大山野納

一同一石八斗二升五合同

繰船運上

一同一石二升三合八勺五才同

芭蕉地納

但、芭蕉百五十三斤八十目二分代、

一同百二石五斗六升同

御狩夫代

但、御狩夫二千五百六十四人、一人ニ四升ツ、

合米三千三十八石三斗六升八合七勺八才

喜界嶋免本

右ノ内、

一米二千百七十五石起

但、当冬御買入砂糖五十八万斤、一斤ニ付三合七勺

五才ツ、

一同百六十四石一斗一升五合

但、右入樽四千六百八十九挺、

但、三升五合ツ、

一同六百四十一石二斗五升

但、御買重砂糖十三万五千斤代、一斤ニ付四合七勺

五才、

一同三十五石三斗五升

但、右入樽千丁代、三升五合ツ、

一同九十石

但、白砂糖五千斤代、一斤一升八合ツ、

一同一石七斗五升

右入樽五十丁代

一同百九十石

但、巳年御買重四万斤代、四合七勺五才ツ、

一同十石八斗一升五合

右入樽三百九十丁代

一同千百八十七石五斗

但、^(寛百、ママ)年御買重二十五万斤代、四合七勺五才ツ、

一同六十七石三斗五合

右入樽千九百二十三丁代

一同二千三百七十五石

但、当春御買重五十万斤代、一斤ニ付四合七勺五才

ヅ、

一同百三十四石六斗一升

右入樽三千八百四十六丁

一同五石六斗六升三勺八才

但、当冬御買入尺莖三百枚代、

一同二十九石八斗一升一合三勺二才

但、当冬御買入中尺莖二千枚代、

右、喜界嶋

大嶋

一高一万六千三百四十五石二斗余

一右ニ相掛俵錢代米真米六十石

一右高所務免本真米七千六百二十九石九斗一升四合

右ノ内、

一真米一万五百石

丑年定式御買入三百五十万斤代

一同二千五百五十石

御買重八十五万斤代

一同三百五十石

御買入諸々草物代

喜界嶋

一高一万六千九百九十七石七斗四升五合

定代ニ斗ヅ、

納米二千三百三十九石五斗四升九合

外ニ

夏免小麦二百二十五石二斗一升

御立直成カへ

代米百七十六石四斗一升五合

夏免大麦五百九十四石三斗二升六合

半納ニテ
代米二百九十七石一斗六升三合

米百十三石九斗二升

御狩用夫二千八百四十八人

但、一人ニ付四升ヅ、

右ノ内、

一米三千六百石

丑冬御買入砂糖百二十万斤、代米一斤ニ付三合ツ、

一同四百二十石

右入樽一万二千挺代、一斤ニ付三升五合ツ、

一同五石六斗六升

丑年御買入尺筵三百枚代

一同二十五石八斗一升^⑨

右同、中尺筵二千枚代

一同六石五斗三升五合四才

来寅夏御横目兩人^⑩運賃

一同三十一石一斗三升二合八才

丑年与人六人御扶持米

一同五十二石二斗三升

丑年島横目砂糖方締勤日数御扶持米

一同八石四斗九升五勺七才

丑年唐通事与人格二人分、右同断

一同二十七石六斗三升六合七勺九才

^⑪宛
筆者、右同断

已上、

八三二

文化七年午

一 三島代官・附役人^⑫

當時、上方表御借財御繰合調兼候所ヨリ出銀米被仰付、其上三島迄モ御定式外追々御買重被仰付、夫長島人共及迷惑管候へ共、當時外ニ御クリ合ノ御余勢無之故、無是非右通被仰付置候処、此節三島諸役々交代ニ付、已前ニ相替リ格別附屬料過当ニ差出、致渡海者モ有之哉ニ相聞得候、代官・付役交易砂糖斤数被定置候処、右様附屬高料ニ付テハ別段趣法相企、島人共致迷惑、自然ト黍作り細メ候向ニ成立候テハ、当御時節、猶又^⑬御合御難波相成不輕事候条、諸役々曾テ不法ノ取引不致様可致精勉候、尤、船頭水手等ニ至リ不法ノ交易不致様是又可申渡候、乍此上若不宜聞得モ候ハ、糺方ノ上屹ト御取扱可被仰付候、右申渡、可承向々モ可申渡候、

午十二月

(願姓久翁)
信濃

八三三

鬼界嶋帳留ノ内

覚

一 今度道ノ嶋代官被仰付被差越ノ条、勤方ノ儀ニ付テハ御規模帳・物定帳ニ未ノ年覚書ヲ以委曲申渡置候、外ニモ前々ヨリ申渡置趣有之候間、^{⑦⑧}得其意△堅固ニ可相勤候、此已前ノ儀、右紙面ヲモ得ト不相屈事ニモ候哉、相違ノ儀モ有之不可然候、遠島ノ事ニ候故、依事ハ右書付等ニ不相見得、難計儀モ可有之候間、附役人中へモ申^⑨、其節ノ吟味次第宜申付、追テ其趣可申越事、

一 島中干損地ニテ候処ニ、田地ノ扱大形ニ有之候テハ偶植付候モ致不熟、其上不植付損高モ每度有之由、不可然事ニ候間、能々入念承合、附役人中冬初ヨリ諸村行廻リ、田地拵行出精、損地無之様ニ稠シク可申渡候、依村島方手広所ハ島作勝手能候付、田方ハ致大形ノ由

候間、旁入念可申渡事、

一 近年道ノ嶋百姓別テ致困窮ノ由、其間得候、島中私ノ夫仕並出米等ニテ内々費ノ儀モ有之由候間、蜜々承合雖為少事氣ヲ付、徒ノ無之様ニ可申付候、尤、与人已下不相応ノ儀申付候ハ、屹其沙汰可有事、

一 黒砂糖・尺莖其外何^(空白、マヤ)御買物ニ成候砌、売上候者へ時々

代物相渡候儀無滞、已後何角引方ニ仕儀トモ有之、百姓迷惑^⑩儀モ可有之候間、右体ノ儀無之様可申付事、

一 与人其外下役人共勝手能儀ニ付テハ、百姓共差迫致迷惑儀有之候テモ、代官並附役人へハ別テ致隠蜜儀^⑪有之由候間、氣ヲ付可被致沙汰事、

一 島中ニテ取替物利足、別テ高利ニ有之候ニ付、三割ノ利足ニ取替仕候様ニト先年御規模帳ヲ以申渡置候へ共、畢竟ハ諸役人御扶持米ヲ諸百姓へ利付ニ借付候故ニ、今利足不相下様ニ風聞候付、諸役人ヨリ借米不仕様ニ堅申渡置候間、役人中へモ其旨申渡、弥以、島中互ノ借三割ノ利足ニ取替候様可被入念事、

一 御蔵米出入ノ儀、初取納ノ砌ヨリ下代切封ニテ与人取

私ニ申付置候処、依時節右ノ出入猥ニ有之由、其間得候間、別テ入念候様下代中可得其意旨可申渡事、

一代官並附役人御扶持方半分ハ罷登候^(下カ)砌モ、半分ハ翌春申受筭候処、罷下候節皆共不申受、与人共ハ渡置、勝手能様ニ内々ニテ仕来候モ有之候由風聞候付、御規模ノ通無相違可申請旨兼テ申渡事候間、是又違背有間敷事、

一 御買入尺莚一束ニ付代米二斗ヅ、被下候処、藺無之在所ハ脇々才覚仕候へハ別テ高直ニ有之由候、雖然、就御用御買物ニ成候儀ハ別段ノ事ニ候、脇々ヨリ頼ミノ尺莚御用同前ノ直附ニ申付候間、過分ノ代米ニテ買調差出候故、百姓別テ迷惑仕ノ由候間、御用外右ノ通申付間敷事、

一 御当地ヨリ罷下候面々、惣テ諸役人共へ致内談勝手向宜様ニ繰廻候儀共頼候ニ付、所役人ノ者共モ右ノ序ニ自分勝手得ヲモ申付、諸百姓痛ニ成^{①候}、由相聞得不届ニ候間、右体ノ儀一切無之様ニ可入念事、
一^{②備} 船頭水手ノ者へ致内談、其者ノ名付ニテ致仕繰儀、

且又地下人等ニ至迄、曾テ不仕様ニ可申渡事、

右ノ段々被得其意、附役人中へモ堅固可申渡候、若於違背ハ可及沙汰者也、
(元禄十二年カ)
卯二月十日

御国遺座

喜界嶋代官
肥後仁右衛門殿

八三四

▽^③ 右同 △

一道ノ嶋ノ者共、互ノ通融並琉球へ罷渡節ハ、代官通手形ニ手札相添持渡由候へ共、向後左之通相改候、

一道ノ嶋ノ者共^{④互之}、通融並琉球へ罷渡節ハ、其間切ノ与人承届、無別条者ニ候ハ、与人ヨリ其者ノ年付^{⑤家門付}等其外

無紛様書記、年号ナシニ、エト月日付迄ヲイタシ、宛等^{⑥所}ノ儀モ参先キノ与人又ハ船改所ト書記、与人ヨリノ通手形ニ相認、印形イタシ、代官へ差出候節、遂吟味、無口能者ニ候ハ、右通手形ノ面ニ名書ナシニ代官免印押調相渡、其手形ニテ通融可為致候、勿論代官免印

無之手形ニテ致通融儀ハ堅ク可禁止候、右ニ付テハ代

官印鑑^⑤可受取置候、琉球在番ヘモ代官印鑑可差越置

候、且又手形ノ儀、子細有之、此節ヨリ持渡儀無用ニ

申付候、縦其島中ノ通融ニテモ手札船ニ不持乘、其島

与人ヘ差出受取置候様堅可申付候、

一 右ニ付テ、通手形ノ内ニ代官並附役ノ名又ハ年号書記

儀、堅無用ニ候、

一通手形認様ノ次第ハ、右ノ旨ヲ以無間違様与人共ヘ可

致差圖置候、勿論往来相仕廻候ハ、則代官方ヘ通手

形取揚、其手形ニテ幾度モ通融不仕様可致候、

右之通、此節子細有之相改候条、締方堅固ニ申付、為

差立用事ノ外猥ニ諸島ヘ不相渡様、可有其心得候、尤、

代合ノ節ハ慥ニ此旨可次渡候、

右之通可申越旨、御差圖ニテ候、以上、

(享保六年カ)
丑十月二十二日 高橋外記

喜界嶋代官

南雲順右衛門殿

八三五

右同

覚

一道ノ嶋取納米仕上セ肝煎ノ儀並古米新米積船ノ儀、延

引仕間敷旨従前々雖申渡置候、出船時分違ニ成候故ニ

候哉、此已前每度春上ノ船共於中途致難儀、御損亡モ

大分有之事ニ候、就中、秋下リノ諸船ハ水手賃ナシニ

テ自分持ノ余勢ヲ以致上下ノ由ニテ、偶順風ニモ右ノ

仕廻ニ取掛リ出船延引仕船頭モ有之由、不可然候、向

後御米^④仕廻候ハ、其所役人ヨリモ日和後ニ不能成

様ニ無油断肝煎可申候、乍其上大形仕船頭有之候ハ、

其所役々ノ者ヨリ代官方ヘ無遠慮可申出候、左候テ、

時々其趣船手ヘ可有引合^④候、且又島上ノ船向後時分後

ニ致上着候船頭ハ、其許送状ノ日付ヲ以諸島ヨリ上候

船々ノ送状ノ日付候ハ、引合セ、出船遅速相糺、左様

船ハ向後島下リ申付間敷候条、島中役人並罷下候諸船

頭モ得其意候様堅可被申渡候、尤、右ノ段ハ船手ニモ

申渡置候、以上、

子二月十日

御国遣座

取次 中原伊兵衛

喜界嶋代官

八三六

右同

写

一本琉球・道ノ嶋登船、近年積足重ク、且又船ニ不相応
 ノ大帆柱用候^①モ有之、風波ノ節及難儀、或打荷或破
 損致シ候由、其間得別テ不可然候、不相応ノ帆柱致所
 持候者ハ早速作替候様申付候、勿論船見ノ節委敷逐吟
 味、右船ハ不及申、諸道具等ニ至不宜船ハ、仮先番定
 手形ニテモ差下間敷候、
 一積足ノ儀、已前ヨリ定置候通、弥以四方足焼印限ニ堅
 可申付候、船足ノ輕方ハ不苦^②、若又定ノ外足入於有
 之ハ、其外船頭荷物取揚ノ可及沙汰候、右ノ段ハ山川
 船改所ヘモ申渡置、入津ノ節足見ノ吟味申付答候間、
 無違背様可申聞置候、

一端帆ニ相掛定ノ積石迄ニテハ四寸足輕^③、答ニテ前々ヨ
 リ御用ノ差荷積來候、雖然間々差荷ノ多少有之由ニテ、
 向後ノ儀ハ船々ニ応候指頭^④ニテ無親疎賦付置積セ可申
 旨、此節本琉球・道ノ嶋ヘモ申渡候、右差荷爰元ヘ積
 來候節、少々ノ品迄ハ本船^⑤、伝馬ヲ以卸サセ、藏入迄
 可申付候、自然荷物数多上荷船並日用ヲ以不致藏入候
 テ不叶節ハ、船頭ヨリ御船手ヘ可申出候、於其儀ハ上
 下町上荷又ハ浦船ニテモ着候次第加勢申付、藏入ノ儀、
 其藏々定日用多人数罷在藏入迄ノ儀ハ輕キ事ノ由候間、
 支配ノ座々ヨリ御奉公ニ申付可然候、
 一諸島代官並附役人自分荷物無運賃ニ積セ候^⑥、船頭共
 致迷惑筈故、相応ノ運賃相渡シ積セ可申旨、去年九月
 道ノ嶋代官中ヘ申渡置候処、当年モ無運賃積下候様ニ
 其間得不可然候、向後本琉球・道ノ嶋共ニ私用頼物無
 運賃積候儀堅無用可仕候、尤、定置候焼印外ニハ曾テ
 以積申間敷候、
 一海上ノ時節宜候ヘハ不意^⑦、輕我有少由候処、頃日毎々
 及難儀、又ハ時分後ニモ罷成、数十艘致越年候段、第

一御用向差支別テ不宜候、依之御船奉行吟味申渡候処、

已十月廿三日

一本琉球・道ノ嶋、秋下リ、九月ヨリ十月迄、依年十一

御勝手方
取次
堀甚左衛門

月上旬迄、

御船奉行

一右同、春下リ、二月ヨリ三月迄、

高奉行

一二月初、於道ノ嶋積石割付有之、三月日和ニ罷登候、

物奉行

一春早々、積荷ノ割付有之、碇先ヨリ段々積入、三月日

代官

和ニ罷登候儀、時分宜由候、乍然仮屋在番又ハ使者中

乗有之節ハ、雨晴五月ヨリ六月迄ニ掛リ上リ来由候、

八三七

中乗船ノ儀、専於琉球吟味ノ上、時分宜出帆有之可然

右同

候、何レノ筋不後立様ニ可有沙汰候、

一道ノ嶋人ノ儀ハ島人相応ノ姿ニテ、名モ附来候通ニテ

一六月末ヨリ七月迄出帆可申付候、依年閏月有之、八月

可有之候処、何十郎何兵衛ナト、名付候モノモ有之由、

上旬迄ハ時節宜筈ニテ、吟味於有之ハ可有其見及候、

不可然候、惣テ此地方七嶋人ノ名ニ不紛様二道ノ嶋相

右之段々、違背無之様船持共堅固ニ申付候、^{⑧之}若船頭水

応ノ名ヲ付可申候、紛數名付ニテ罷在モノ共急度相改

主共自分ノ勝手ヲ以仕廻兼日和後ニ罷成候ハ、急度

之、^{⑨破}早速名替可申付候事、

可及沙汰候、乍然船頭共ヨリハ無油断積入ノ願申出候

一道ノ嶋人事、此地方七嶋人ノ如ク月代並成人已後剃髮

ヘトモ、諸役人中ノ大形故於相滞ハ、其有筋罷上リ次

仕儀可為停止事、

第船頭共ヨリ御船手ヘ可申出旨申聞置、自然右式ノ儀

一右島人、或医道其外稽古、或病氣養生ニテ、此外ニモ

於有之ハ無用捨可申出也、

御当地ヘ差越候儀免許ノ面々、^{御当地カ之}御当人、姿曾テ仕間敷

事、

右之通堅固ニ相守候様ニ島人へ可被申渡候、若違背ノ族於有之ハ無用捨可被遂披露旨御差込ニテ候、以上、

卯九月二十八日
中原伊兵衛①高

喜界嶋代官

八三八

右同

覚

一米五十石

右①鬼界嶋へ代官一人可差下旨願申上候、来春ヨリ差

下管ニテ候、依之、右米五十石ハ代官一詰二十五ヶ月

扶持米、右員数ツ、鬼界嶋百姓共ヨリ御蔵へ上納仕

管ニテ候間、已後共ニ二十五ヶ月目ニハ、右員数ツ、

無相違上納有之候様、堅固ニ可被申付候事、

一大嶋中代官並附役人故飯米其外不依何色役人へ相応分

ハ、来春喜界嶋代官下島已後ハ大嶋諸役人ノ分ハ大嶋

ニテ可相勤候事、

一大嶋ト喜界嶋ト御米・上木・上草其外上納物ハ与人互

ノ寄替如此中可被申付事、

一右兩島百姓共、用事ニテ渡海、如此中与人証文ニテ

往来可仕事、

一伊砂与人

右ハ、喜界嶋与人十人有之候処、去年五人相減候故ニ、

五人ニテハ不足ニ有之、難儀ノ由申出候間、右与人相

重候間、扶持方其外如何可被申渡事、

一高頭一万五百二十石余 鬼界嶋中

内、三千七百八十九石四斗余 一噺

内、

千九百九十四石七斗余 灣間切与人噺

但、灣村、中里村、城ク村、山田村、川岸村、

千七百九十四石七斗余 荒木与人噺

但、荒木村、手久津村、嘉鉄村、浦原村、花

良治村、

三千三百四十一石七斗余 一噺

内、

千五百九十一石七斗余 志戸桶与人噉分

但、志戸桶村、佐手久村、小野津村、

千七百五十石余 東与人噉分

但、塩道村、永嶺村、早町村、白水村、嘉鉄(鈍)

村、阿傳村、

三千三百九十石余 一噉

内、

千八百二石余 西目与人噉分

但、西目村、朝戸村、嶋中村、中濃村、坂嶺(限カ)

村、

千五百八十八石余 伊砂与人噉分

但、伊佐根久村、伊砂村、瀧川村、中間村、

右ハ、与人五人ニテハ相役無之、当病差合ノ時分相支

由候間、与人六人兩人ツ、相役ニ相成、島中五間切ヲ

内々ニテ右ノ通三噉相分ケ相勉候様ニ可被申渡候事、

一大嶋・喜界嶋中尺筵、此中ハ在島人并鹿兒嶋諸人ヨリ

頼ニテ買調候時分ハ与人方へ申渡、与人ヨリ割付ヲ以

買調候由、⑨向後一向差留候間、可被申渡候、乍然在島ノ

代官并附役人ノ儀ハ、自分用少ノ儀ハ与人方へ無構、

代米之儀ハ如御定、百姓ト相對得買取ノ儀ハ各別ノ儀

候間、可為心次第候、勿論押買仕間敷候事、

右之段ハ堅固ニ兩島与人共へ可被申渡者也、

元禄五年申十月二十一日 御国遣座

取次 新納喜右衛門

大嶋代官衆

喜界嶋代官衆

八三九

右同

一道ノ嶋牛馬口錢之儀、已前八年々ニ匹間尺筵一枚致上

納候処、去ル卯年ヨリ牛馬百匹ニ付、口錢トシテ尺筵⑨重

五枚被仰付、代官一詰中ニ一度ツ、牛馬相改、応員數

上納仕来候、然処、琉球・種子嶋ノ儀ハ何匹ト定數相

究リ定納ニ被仰付候間、道ノ嶋ノ儀モ右同前ニ此節ヨ

リ定納被仰付候条、被得其意、牛馬員數相札可被申出

旨、彈正殿御差図ニテ候、以上、

但書略ス、

(享保三年カ)

戊閏十月四日

高橋外記

喜界嶋代官

平田平六殿

喜界嶋代官

町田孫七殿

八四一

一米一升九合

但、与人一日分、

一米一升六合

但、横目一日分、

一米一升

但、与人横目外ニ不差越候テ不叶者有之節給分、

右ハ、道ノ嶋へ唐船漂着、琉球へ送越候節ノ被下方、

此節ヨリ右之通被定置候条、御規帳張紙ニテ記置、諸

事如例可被申渡旨御差図ニテ候、以上、

子三月十三日

谷山角太夫

喜界嶋代官

川上平右衛門殿

木脇六郎右衛門殿

八四〇

覚

一大嶋代官并附役人在島中野菜薪看島中ヨリ相調候へ共、

遠方ノ間切ヨリ纔ノ作品難^{⑧所}取故過分ノ夫費モ有之候付、

大嶋ノ儀ハ前々ヨリ島中出米ヲ以夫一人ツ、雇、旅宿

へ入付置、用事相達由候、野菜薪看酒調用ノ故飯米、

前方御物へ被召揚、当分各役料米ノ内ニ相込被下事候

処、雇夫入付ノ儀二重ニテ別テ不相応ノ儀候条、自今

雇夫ハ勿論、野菜薪モ一切不入付筈ノ事候条、喜界嶋

ノ儀モ右式ノ儀於有之ハ無用ニ被仰付候間、左様ニ可

被相心得候、御檢地方ノ面々モ同道被仰付候条、得其

意、無用可被申渡候、此旨彈正殿御差図ニテ候、以上、

(享保十二年カ)

未十月廿六日

高橋外記

一喜界嶋代官座仕番無之由候間、此節ヨリ⑨使番人一人申付、相応ノ給分間切中用夫割出米ニテ相渡候様可被申渡候、

一飯屋三所掃除番賃米二石百姓出米ニテ候得共、此節ヨリ差留候間、水夫ニテ⑩掃除可相調由、郡奉行申渡候へ共、水夫差留候間、平生ハ飯屋ヨリ掃除相調可申候、手ニ不及節ハ間切中夫ヲ以相調候様可被申付候、

一移飯屋番米五斗百姓出米ニテ渡来候へ共、此節ヨリ差留、水夫ニテ可相調候、差支候節ハ間切押廻、夫ヲ以可相調由、郡奉行申渡置候へ共、水夫ノ儀ハ差留候間、廻⑪立ノ夫仕ニテ相調候様可被申付候、

一正江寺住持飯米諸仕用并三飯屋正江寺水夫賃ハ島中人体ニ相応⑫候故、当役々面々ハ相遠（アマ）シ其外ノ諸出米ハ惣様高割ニ致候間、与人横目下役々面々モ出サセ来ルノ由候処、正江寺住持飯米諸仕用ノ儀ハ向後作職高ニ割付出米可申付候、用夫ニ可割付儀ニテ無之候、水夫賃ハ有来通用夫割付出来可申付由、郡奉行申渡置候へ共、

水夫ノ儀當時ハ差留候間、寺統料并小者ニテモ召置事候ハ、高割ノ出米ニ可申付候、

右ハ、大御支配ニ付差越候郡奉行ヨリ百姓出物并夫仕減方ノ儀申渡候内、此節被相改右之通被仰渡候条、得其意、此段可申渡旨御差函ニテ候、以上、

（享保十三年カ）
申九月二十八日 高橋外記

喜界嶋代官
町田孫七殿

覚

一道ノ嶋田島不熟ノ節上見ノ致様去年被仰渡候間、郡奉行仁禮孫左衛門ヘモ問合被致候処、何ゾ存寄モ無之旨申越候付、被仰渡候通ニ相心得罷居候、重テ被仰渡儀モ有之候ハ、又々被仰渡ノ趣可被仰渡旨、当三月二日被申越趣遂披露候処ニ、於御当地モ郡奉行ヘシラヘ被仰渡候処、喜界嶋ノ儀御定代被相究置候へ共、不熟ノ節ハ後々ヨリ村々作人廻ニ上見仕来ノ由候、已後共不

熟ノ節モ作人廻ニシテ見分可被申渡旨御差図ニテ候、

以上、

(享保十三年カ)

申十月廿九日

高橋外記

喜界嶋代官

町田孫七殿

被申渡候、以上、

寅四月廿八日

種子嶋彈正殿

(八四四の2)

右之通被仰渡候間、可被得其意旨、彈正殿御差図ニテ候、以上、

寅四月九日

谷山角太夫

喜界嶋代官

木脇六郎(マツ)左衛門殿

八四四(の1)

写

一 毎年宗門改ノ儀、道ノ嶋中銘々家内札元人数出入生子

死人等相改、切支丹宗門不審成者無之通、名書一帳相

調、代官役所へ銘々召出印形可申付旨、去年七月申渡

趣有之候へ共、島中ニテモ遠方ヨリ代官役所へ銘々召

出印形申付①候儀ハ難成儀モ可有之候間、公義御条書

並御家老中書付写ヲ以、間切支配ノ与人方へ渡置、役

所へ召寄読聞、印形帳相調、代官所へ差出候様申付、

左候テ、先達テ申渡候通、印形ハ代官役所へ差置、代

官ヨリノ一紙書毎年七月限宗門改方へ可差出候、此外

ノ儀モ去年七月申渡候通相心得候様、道ノ嶋代官へ可

八四五

写

一 諸島並浦々へ鯨糞其外寄物有之節ハ、早速支配へ相付

申出候筋ニ前々ヨリ申渡有之、計ヒ様ノ儀モ御規模帳

為被載置事候間、弥以其通可相心得候、仮一寸二寸程

ノ小キ木切類ニテモ唐木①等敷相見へ、又ハシヤレ候木、

ニホヒナト有之候木、惣テ為替木見当リ候ハ、不捨

置取揚之、早速支配へ相付可差出旨、道ノ嶋・七嶋其

外島々地方ニテモ荒波ノ浦々不洩様ニ可申渡候、

右ノ通御船奉行・屋久嶋奉行・道ノ嶋代官へ可申渡候、

戊七月

金太夫

寄物ノ場可見合、

八四六

一道ノ嶋代官並附役代合罷上候節、御規ノ乘間ニ相懸運

賃米船頭へ相渡答候処、代官并附役方へ取込、船頭へ

ハ不相渡候由相聞得、不可然候条、自今已後御規ノ通

船頭へ堅固ニ可被相渡候、乍此上自然船頭へ不相渡人

有之ニ於テハ可^{⑨為}沙汰候条、附役中へモ往々^{⑩宛ト}可被申渡

候、尤、代合ノ節ハ此書付^{⑪備ニ}可被次渡旨御差函ニテ候、

以上、

(享保三年カ)

戊閏十月五日

高橋外記

喜界嶋代官

平田平六殿

八四七(の1)

写

一諸島へ遠流者又ハ私遠流者、島外へ不致他出様申渡置

事候処、去年四月口ノ嶋ノ流人、其島ノ者ト船ニ乗合、

魚猟ニ罷出、逢難風土佐国へ致漂着候儀有之候、遠流

者魚猟ニ罷出候儀可被差留候へ共、島方ハ作職場狭ク、

地方稼迄ニテ候へハ渴命難続由候間、遠流者其島ノ者

ト乗組、其島近辺へ魚猟ニ罷出候儀ハ此中ノ通可有之

候、流人共計乗候テ魚猟ニ罷出候儀ハ堅令停止候条、

此旨諸島へ可被申渡候、以上、

九月朔日

(八四七の2)

右之通、将監殿ヨリ樺山権左衛門取次ヲ以被仰渡候間、

得其意堅固ニ可被申渡旨、弾正殿御差函ニテ候、以上、

(享保二年カ)

西九月廿三日

向井十郎太夫

喜界嶋代官

渋谷三四郎殿

八四八

覺

一 上略、諸拝借返上方ノ儀、在島ノ代官ヨリ致沙汰
 事候へ共、別テ相滯不足候、現米ノ返上ハ難成者モ可
 有之候間、向後ハ砂糖并雜穀其外ノ品ニテモ、其年ノ
 出来次第余勢ニ罷成品ヲ以致返候様可被申渡候、左候
 テ、拝借帳間切分ヲ以委細ニ調置、返上相濟候分^{①は}年々
 御勝手方御用人へ可被申越候、尤、一詰中拝借且又返
 上相濟候分ハ致一総ニ、被罷上候節持参可有之候、御
 勘定所へ被相渡シラへ有之筈候、右之次第ハ先キノ無
 混乱様ニ代合ノ節堅固ニ可被次渡置候、此旨可申越旨、
 彈正殿御差図ニテ候、以上、
 (享保五年カ)①廿
 子十月九日 和田次兵衛

喜界嶋代官
 南雲順右衛門^②

八四九(の1)

一道ノ嶋代官并附役在島中ノ用、此間字不知ト本帳ニ有之

候、差下候節ハ証文ヲ以御船手ヨリ通手形申渡、且又
 於島御役料米役料米御賦御扶持米等ノ残ヲ以、砂糖・
 莛・芭蕉布類百姓共脇売買ノ価ヲ以相求候儀ハ不苦候
^{③付}
 テ、差上セ候節ハ代官送状ヲ以差越候様申渡事候処、
 御当地并山川へ問屋ヲ立置、右之者共へ仕入ヲ以船頭
 へ致内談、差下於島与人共へ頼致入付、諸色差上候節
 モ船頭水主荷物ノ筋ニシテ積上人モ為有之様、聞得ノ
 訳有之候、代官并附役勤方心得ノ儀、御規帳又ハ条目
 ヲ以委細申渡置、其外毎度申渡旨モ候故、其趣專相守
 御当地ノ御仕置ニ応シ可致沙汰ノ処、自分ノ勝手ヲ構、
 与人并船頭共へ内談ヲ以仕繰ケ間敷致方於無別条ハ沙
 汰ノ限ニ候、一島ノ為差引被差越事候へハ、面々御法
 様ヲ守、廉直ニ加下知候時ハ、与人ヲ初諸役々船頭水
 主百姓共ニ至リ、其下知ヲ恐、万端堅固ニ相守筈候処、
 自分勝手筋ヲ以内談^{④得之}仕形ニテハ諸事緩^{⑤七}ニ成行、却
 テ与人其外迄モ代官附役ノ用物ニ事寄セ致仕繰、百姓
 共漸々令困窮、自然ト諸上納方モ御不勝手ニ相成、第
 一風儀不宜候、右式ニテハ適為差引被差越置候詮モ無

之候条、曾テ右体ノ仕形無之様ニ互ニ^{①相}勵、段々申渡

置候趣堅固ニ可相守候、家来下人共ヨリモ船頭水主自
分荷物ノ筋ニシテ曾テ不相頼様堅可申付候、附役ノ内

ニハ役目ノ者モ被遣事候へハ、右体ノ仕形專氣ヲ付、

見聞ノ趣可遂披露ノ処、今迄何分申遣事モ無之候、此

儀ハ代官并同役ノ上ヲ取差扣候哉、其通ニテハ役目ノ

詮無之候、又ハ右式ノ仕形有之候ヲ於不承付ハ為役目

心掛モ無之筋ニ相見得、是又役職不相応ニ候、畢竟役

目ノ者ハ為締方ニ候条、万端氣ヲ付、代官并同役ノ上

タリト云へトモ御法違ノ仕形有之候ハ、少モ無遠慮見

聞ノ趣可申出候、若差扣脇ヨリ相知候ハ、可及沙汰候、

今度諸船頭共へ御船奉行ヨリ申渡旨有之、山川津口御

番へモ申渡置趣候故、自然相背候人有之候ハ、屹可及

沙汰候条、聊無大形相慎、諸役人へモ堅固可申渡候、

右之通、四島ノ代官へ此節ノ便ヨリ申越、向後代官渡

海前時々可申渡候、已上、

十一月

四郎太夫

(八四九の2)

右ノ通被仰渡候間、被得其意、附役中へモ堅固ニ可被

申渡置候、以上、

元文元辰十一月廿三日

郷原金太夫

喜界嶋代官

町田平寛殿

八五〇

覚

一琉球へ道ノ嶋ヨリ致渡海候船頭水主、於琉球唐荷物買

調申候儀、或道ノ嶋在島ノ諸役人或其島ノ者共頼遣儀、

後々為有之由、不可然候、向後右体ノ頼物曾テ不仕樣

ニ稠敷可被申渡候、勿論琉球へ道ノ嶋船着船ノ時分唐

荷物不買取樣ニ船頭水主へ被申付、乍其上出船ノ砌船

頭堅固ニ申付可為致出船ノ旨、琉球在番ノ奉行へ申渡

置候、若致蜜買相頭候ハ、可及沙汰候間、右之趣被致

差引候島中へ無構樣ニ可被申渡候、受合ノ時分、此書

付可被継渡者也、

子三月十七日

御国遣座

村田伊左衛門

喜界嶋代官

八五一(のし)

一道ノ嶋代官并附役在島中ノ用、此間字不^①知ト本帳ニ有

之、差下候節ハ証文ヲ以御船手ヨリ通手形申渡、且又

於島御役料米役料米御賦御扶持米等ノ残ヲ以、砂糖・

筵・芭蕉布類百姓共脇売買ノ価ヲ以相求候儀ハ不苦候

間、差上セ候節ハ代官送状ヲ以差越候様申渡置事候処、

御当地并山川へ問屋ヲ立置、右ノ者共へ仕入ヲ以船頭

へ致内談、差下於島与人共へ頼致入付、諸色差上候節

モ船頭水主荷物ノ筋ニシテ積上人モ為有之様、聞得ノ

訳有之候、代官并附役勤方心得ノ儀、御規帳又ハ条目

ヲ以委細申渡置、其外每度申渡旨モ候故、其趣專相守、

御当地ノ御仕置ニ応シ可致沙汰ノ処、自分ノ勝手ヲ構、

与人并船頭共へ内談ヲ以仕繰ケ間敷致方於無別儀ハ沙

汰ノ限ニ候、一島ノ為差引被差越置事候へハ、面々御

法様ヲ守、廉直ニ加下知候時ハ、与人ヲ初諸役々船頭

水主百姓共ニ至リ、其下知ヲ恐、万端堅固ニ可相守管

候処、自分勝手筋ヲ以内談得ノ仕形ニテハ諸事緩セニ

成行、却テ与人其外迄モ代官附役ノ用物ニ事寄セ致仕

繰、百姓共漸々令困窮、自然ト諸上納方モ御不勝手ニ

相成、第一風儀不宜候、右式ニ付テハ適為差引被差越

置候詮モ無之候条、曾テ右体ノ仕形無之様ニ互ニ相励

段々申渡置候趣堅固ニ可相守候、家来下人共ヨリモ船

頭水主自分荷物ノ筋ニシテ曾テ不相頼様堅可申付候、

附役ノ内ニハ役目ノ者モ被遣事候へ共、右体ノ仕形專

氣ヲ付、見聞ノ趣可遂披露ノ処、今迄何分申遣候事モ

無之候、此儀ハ代官并同役ノ上ヲ存差扣候哉、其通ニ

テハ役目ノ詮無之候、又ハ右式ノ仕形有之候ヲ於不承

付ハ為役目心掛モ無之筋ニ相見へ、是又役職不相応ニ

モ、畢竟役目ノ者ハ為締方ニ候条、万端氣ヲ付、代官

并同役ノ上タリト云へトモ御法違ノ仕形有之候ハ、少

モ無遠慮見聞ノ趣可申出候、若差扣脇ヨリ相知候ハ、

可及沙汰候、今度諸船頭共へ御船奉行ヨリ申渡旨有之、

山川津口番へモ申渡置趣候処、自然相背候人有之候ハ、
屹可及沙汰候条、聊無大形相慎、附役人へモ堅固可申
渡候、

右ノ趣、四島ノ代官へ此節ノ便申越、向後代官渡海前
時々可申渡候、以上、

十一月

四郎太夫

(八五一の2)

元文元辰十一月廿三日

取次
郷原金太夫

(八四九号文書に同じ)

八五二

元禄六年癸酉喜界嶋代官始ル、

寛亨

一大嶋ノ内鬼界嶋ノ儀、前々ヨリ大嶋代官ヨリ掛テ差引
被仰付置候、然共彼島之儀太分ニ御高モ有之候処、掛
テ差引如何ニ候、其上隔海路候故、諸役人毎々致渡海
儀百姓失墜有之、致迷惑ノ由候間、去々年ヨリ付役人

兩人被遣置候、乍此上代官ヲモ被差置候、左様ニ候ハ、

御扶持米ノ儀ハ百姓中ヨリ相納可申ノ由申出候故、右
ノ趣達 貴聞候処、百姓申出ノ通可申付ノ旨被 仰出
付、就夫、為代官伊地知五兵衛差越候、彼島ノ儀、前々

ヨリ大嶋差引ニテ候へハ、諸事心得可成儀ハ委曲繼渡、
乍其上相談可入儀共ハ互ニ引合ノ上、御為宜筋ニ可被
致其心得候、此等ノ旨、新左衛門殿御差込ニテ候、以
上、

酉二月廿日

元禄六年酉ナリ

新納喜右衛門

大嶋代官

猪俣休右衛門殿

八五三

寛

一道ノ嶋仕出シ米、船頭方へ積渡候時分ハ相例、送状例
書相添可差上旨、毎々被仰渡置候処、依島例書不相付、
送状ニ届運賃米迄ヲ相記、斤目ナシニ被差登島モ有之、
大様ノ儀ニ候、依之、此節山川ニテ例被仰付候へハ枅

目不同有之、不可然候、向後ノ儀ハ入念取納方申付置、

船頭ハ積渡候時分ハ御当地仕上セ同前、三俵例申付、

送状ニ斤ノ相付、右ノ例書相添可被差登候、且又取納

米仕上、惣送状不差登島モ有之由、是以不可然候、此

儀ハ御規帳ニモ被相載置候ヘハ、^{①時々}被仰渡ニ不及答候

処ニ、於島御規帳不見届人モ有之候哉、不宜事候条、

御規帳見届、如前方惣送状両通相調、船両艘ヨリ可差

登候、^{①此節}右ノ通、又々被仰渡事候間、堅固ニ可被相守候、左

候テ、代合ノ時分ハ可被次渡候、此旨御差函ニテ候、

以上、

(元禄十二年カ)
卯六月二日

喜界嶋代官

肥後仁右衛門殿

市木次郎左衛門

八五四

覚

一今度道ノ嶋代官被仰付被差渡ノ条、勤方ノ儀ニ付テハ

御規帳・物定帳并未年覚書ヲ以委曲申渡置、外ニモ前

々申渡置趣有之候間、得其意堅固ニ可相勤、^{①候}此已前

ノ儀、右紙面ヲモ得ト不見届事モ候哉、相違ノ儀モ有

之、不可然候、遠島ノ故、依事ハ右書付等ニ不相見得

難計儀モ可有之候間、附役人中ヘモ申談、其節ノ吟味

次第宜申付、追テ其趣可申越事、

一近年道ノ嶋百姓別テ致困窮ノ由其聞得候、島中私ノ夫

仕并出米等ニテ内々費ノ儀モ有之由候間、蜜々承合雖

為少事氣ヲ付、徒ノ費無之様可申付候、尤、与人已上

不相応ノ儀申付候者屹可有其沙汰事、

一芭蕉・莖等ノ類御買物ニ成候砌、売上候者ヘ時々代物

相渡候儀滞、已後何方引方ニ仕候儀共有之、百姓致迷

惑候儀モ可有之候間、右体ノ儀無之様ニ可申付事、

一与人其外下役人共勝手能儀ニ付テハ、百姓共差迫致迷

惑儀有之候テモ、代官並附役人ハ別テ致隱蜜儀而已有

之由候間、氣ヲ付可被致沙汰事、

一島中互ノ取替物ノ利足別テ高利有之候付、三割ノ利足

諸役人御扶持米ヲ諸百姓へ利付ニ借付候故ニテ利米不相下様風聞候、右之段不可然儀候間、可入念事、

一御蔵米出入ノ儀、初取納ノ砌ヨリ下代切封ニテ与人取払ニ申付置候処、依時節右ノ出入猥ニ有之由其間得候間、別テ入念候様ニ下代中可得其意旨可申渡①候事、

一代官并附役人御扶持方、半分ハ罷下候砌申受、半分ハ翌春申受筈ノ処、罷下候砌皆共申受、与人共へ渡置、勝手能様ニ繰廻仕候儀例ノ様ニ相心得、御規帳ニ相違①定ノ儀モ有之由致風聞、不可然候、弥以御達ノ筋ニ可申受事、

一御買入尺莖一束ニ付代米二斗ヅ、被下候処、藺無之在所ノ者脇々才覚仕候へハ別テ高直ニ有之由候、雖然就御用御買物ニ成候儀ハ別段ノ事候、①脇々より頼之尺莖御用同前之直段ニ申付候付、過分之代米ニテ買調差出候故、百姓別而迷惑仕候由候間、御用之外右之通申付間敷事、△

①一御物芭蕉、本琉球へ為御利潤差越候砌、△脇々ヨリモ売買用ノ芭蕉船頭へ申付為差渡節筋力モ有之候由、不可

然候条、御物ノ外遣間敷事、

一御当地ヨリ罷下候面々、惣テ所役人共へ致内談、勝手向宜様ニ繰廻候儀共頼候付、所役人ノ者共モ右ノ序ニ自分勝手得ヲモ申付、諸百姓痛ニ成候由相聞得不屈ニ候間、右体ノ儀一切無之様ニ可入念事、

一諸船頭水手ノ者へ致内談、其者ノ名付ニテ致仕繰儀、且又地下人共流人共へ取組仕繰①等敷儀、下人等ニ至迄會テ不仕様可申渡①候事、

右ノ段々被得其意、附役人中へモ堅固可申渡候、若於違背ハ可及沙汰者也、

(元禄十年カ)
丑閏二月三日

御国遣座

喜界嶋代官
猿渡新右衛門殿

八五五

一島与人ノ儀ハ別テ懇望ニ存候付、近年ハ鹿兒嶋へ申越才覚ヲ求致懇望島モ有之、不屈ノ至候、右体ノ儀ハ為代官被遣置見合ヲ以申出候上、遂吟味相応ノ者へ申付

事ニテ候処、鹿兒嶋へ直ニ申越致懇望儀不宜事ニ候条、

向後鹿兒嶋へ申越才覚ヲ以致懇望候者へハ与人役申付

間敷候条、右ノ趣得其意、島中へ稠敷可申渡候、

右之通可申越旨、彈正殿御指図ニテ候、已上、

卯五月廿八日

和田次兵衛

喜界嶋代官

南雲順右衛門殿

八五六

覚

一 田島ヲ荒並作障ニ神ノ山ケンモンタマカリ所ノ由候テ

竹木ヲ相立置候事、

一 病人有之候時分致祈念、牛馬其外生類ヲ殺並衣類家財

等取候事、

右、禁止ニ申付候条、島中ヨタ共へ不殘堅勝ニ相守候

様屹可申渡候、若背者於有之ハ可及沙汰ノ条、遂詮儀

可被申出候、尤、此書付後代官方へ可被継渡者也、

元禄七年戊三月朔日

御国遣座

取次

鎌田後藤兵衛

喜界嶋代官衆

八五七(の1)

一 道ノ嶋方御用人へ

道ノ嶋ノ者共鹿兒嶋へ差越居、医道致稽古者有之、右

者共ノ中ニ致剃髮置、衣服等鹿兒嶋醫師同前ニテ多年

居候者モ有之候、向後ハ都テ島人ノ姿ニテ致稽古、鹿

兒嶋へ多年居付候儀無之様ニ申付、当分鹿兒嶋へ罷居

候者モ早速髮ヲ立、島支度ニ可申付候、

右ノ通代官へ申越、当分鹿兒嶋へ差越居候者へモ可申

渡候、以上、

二月

(種子島久甚)
彈正

(八五七の2)

右之通被仰渡候間、得其意、支配中へ不洩様可被申渡

候、已上、

但、医道稽古ニテ御当地へ滞在、七ヶ年ヲ限被召置

筈ニ候、

(享保二十年カ)
卯二月十六日

市来次郎(ママ)右衛門

喜界嶋代官

木脇六郎(ママ)左衛門②殿

八五八

覚

一其島代官座へ硯箱算盤無之二付、被差下度由被申越候、
申出ノ通物奉行所へ被仰渡候間、此表物奉行所ヨリ送
状相付可被差下候条、本帳ニ付役替ノ節堅勝ニ次渡候
様可申渡候、

一其島へ罷居流罪人御赦免ニテ及披露候儀ハ、向後表方
月番ノ御用人衆宛書ニテ可被申越候、為心得候、

一大鍋四枚 但、五ツ物

右ハ、喜界嶋砂糖煎調ニ入用ノ由、与人長知ヨリ申出、
願ノ通御免ニテ此節長知持下候、代銀等ノ儀ハ去年喜
界嶋へ差下候鍋同前ニ物奉行所ヨリ委細ノ送状ニテ可
申越候条、其通諸事可被申渡候、

一与人長知事、当夏致上国、如例年献上物差上、御目

見被仰付、首尾好相濟、御本丸御方・御下屋敷御方

ヨリ拝領物仕并脇々進物如早晚致首尾、此節御暇ニテ

婦島候間、可被得其意候、

右之通可被得其意旨御差図ニテ候、以上、

(元禄八年カ)
亥十月十五日

中原伊兵衛

喜界嶋代官
長谷場源助殿

八五九

一喜界嶋芭蕉地納并狩夫代下芭蕉現上納不相調候付、代

米ヲ以上納被仰付度旨、与人ヨリ願出趣被申越、遂披
露候処、願ノ通代官(米カ)ニテ上納被仰付候条、御規模ノ通

上納方可被申渡候、藏々切封ノ儀ニ付、附役ヨリ申出

ノ儀ニ付被申越趣遂披露候、砂糖代米百姓共銘々へ配

当米ノ儀ハ附役切封ニハ不及筈候、殘米有之節御規模

ノ通切封ニテ差置候様被仰付候間、其通可申渡候、

外一ヶ条略ス、

右之通可申越旨御差図ニテ候、以上、

(延享三年カ)
丑十一月廿三日

木協賀左衛門

喜界嶋代官
東郷十左衛門殿

八六〇

一島人共武具致格護置候儀、従前々御禁止ノ事候間、相改、持合候兵具惣①録、代官所へ取揚置、其首尾可被申出旨、去亥六月被仰渡候付、島中相改、鏝一本・鏝穂一本・山刀四十四本代官所へ取揚置候由、先代官肥後藤之丞ヨリ被申出候、右ニ付、六間切与人横目願出候者、喜界嶋ノ儀端島ニテ他国船并異国船漂着ニテ悪党共島中へ致敵対者モ有之、刀属無之候テハ難鎮事ニ候、先年流人共致気任候儀有之、其節モ刀属少々有之候付相鎮候、向後右式ノ儀自然有之節、刀属無之難鎮、役目ノ越度ニ可相成候間、与人横目役相勤候内ハ御見合ヲ以御預被仰付被下度旨申出候①、共、余島一統ノ儀ニテ候へハ、ヤハリ代官所へ取揚置、時々附役人検者ニテ島役目ノ者共見合不①様可被致置候、自然不意ノ入用

モ有之節ハ代官見合①計ヲ以役目ノ者共へハ相渡候様被仰付候間、代合ノ節無間違様堅固可被次渡候、此旨可申越旨御指図ニテ候、以上、
(延享元年カ)
子九月廿一日
木協賀左衛門

喜界嶋代官
東郷十左衛門殿

八六一

正徳三年巳十月

一本琉球・道ノ嶋登リ船、近年遅立候間①付、海上及難儀、又ハ風後ニモ罷成、不得登船数余多有之、御用向差支ノ段不宜候、道ノ嶋ノ儀、第一取納方船仕出等滯為無之代官附役人迄段々差渡置候処、肝煎大形故及遅滯候テハ不可然候間、弥以無油断心懸可相勤儀肝要候、
一古米立ノ儀、諸穀物砂糖類迄ヲ惣様致出来、左候テ、船々ニ割付積セ候考ニテ、自然春始ノ①割方モ遅成、日和後ニ於罷成ハ、自今已後跡々二三ケ年諸船積高ニ並シ、且又其年ノ毛上・砂糖出来高等先大底ノ見合ヲ以、帆当何程ヅ、ニ相廻答ト究置、取納方ニ段々寄次第一

二艘ツ、ニテモ碇先ヨリ積入、三月日和順風次第出帆可申付候、万一數艘ノ内無抛支有之、後立儀候ハゞ、其子細先船ヨリ可申越之候、右之筋ニテ後番ノ船ニ至リ若積荷不足於有之ハ、新米ノ儀積合ヲ以可差上セ候、一新米ノ儀、取納方無油断申付、碇先ヨリ段々積入、六月ヨリ七月迄順風次第出船可申付候、

一島方御用米無余計見合残置筈候処、前方考違ニテモ候哉、過分残置、^⑨虫付、旁以御不勝手ニ相成候段、別テ不可然候間、余計無之様見合、積船ノ反^(空白、帆カ)前年御船手へ申出候節、附役人中何レモ致吟味、入念相考申越可然候、

一連々砂糖多致出来候ニ付テハ、煎調諸事難埒明儀モ可有之候得共、附役人中時々行廻リ、前以無油断様申付、乍其上自然与人其外下役ノ者共大形故延引ニ罷成候ハゞ、屹度可致沙汰候、

一諸船仕出方ニ付テ船頭水主自分ノ勝手ヲ以仕廻兼及遲滞候ハゞ、致其沙汰無用捨可申越候、

一米間切ニモ本船相廻積入候儀モ有之、難埒明由候、然

共、遠方ヨリ所役ニ小廻申付候儀ハ是又所ノ者可致迷惑候間、遠方ノ程有来ノ通本船相廻積入、其外小廻ヲ以積セ可然所者、尤、其通無油断小廻可申付候、右之通堅固ニ可申付候、右ニ付、自然宜存寄モ於有之ハ無遠慮可申出候、於爰元御船奉行へ申渡候書付写一通為心得差越候、尤、代合ノ節次渡可有之候、以上、

巳十月廿三日

御勝手方印

喜界嶋代官

八六二

一道ノ嶋与人ヲ始、役目ノ者共何ソ無調法ノ儀有之、料申付候節、其身ヨリ致上納、島中并間切村中ノ百姓出錢ヲ以不致上納様ニ可申付候、畢竟其身ノ無調法候ニ付テ料料申付儀ニ候処、百姓共へ為致出錢候テハ別テ不相応ノ儀候間、曾テ左^⑩ノ儀無之様、堅可申付候、一百姓ノ内無調法ノ仕形有之、其儀ニ付テ与人并役目ノ者大形罷成候儀モ有^⑪之、料料申付候節、其身ヨリ致上納候様可申付候、百姓ノ無調法ヨリ事起候由ニテ与人

并役目ノ者^①科料ヲ其百姓ヘ為致出錢候儀、曾テ無之
様ニ可申付候、百姓ノ無調法ヨリ事起候テモ与人并役
目ノ者モ大形故其訳ヲ以科料申付事候処ニ、百姓ヘ出
錢申付候テハ別テ不宜事候間、一切右式ノ儀無之様可
申付候、

右之通屹可申付候、若相背者有之候ハ、可及沙汰候条、
時々堅固ニ可申付候、

右之通、四島ノ代官ヘ^①節ノ便申越、向後代官渡海ノ
砌時々可申渡候、以上、

巳十一月

四郎太夫

八六三

覚

一大嶋・喜界嶋為差引、此中代官一人・附役^①五人被仰
付置候処、差引難達由候、依之、為試附役人兩人相重、
喜界嶋ヘ遣置、差引申付候処、島中百姓共ヨリ喜界嶋
ヘモ代官被仰付度由依訴訟、此節代官一人被仰付候、
附役人ノ儀ハ此中ノ通、此節兩人申付候事、

一喜界嶋ノ儀、麦作第一ニ仕、余島ニ相替、田方四五月
植付、八月致取納由候、適植付候地方モ麦作刈仕廻、
俄田地相拵候故、下地匱相有之、六月少々日照ニモ干
損相立、又ハ大風ニ逢^①損地ニ相成由、其聞得候間、
七八月ヨリ作職第一ニ出精候様可申付、彼島地方上位

ニテ入念下地相拵候ヘハ熟田ニ相成由候処、此已前ハ
附役人モ不召置、地下役人迄ニテ百姓心儘作職仕候故、
田方年々荒地有之由候、且又地下役人作法惡敷、島中
猥ニ焼酎三寸ヲ取持、徒ノ費有之、百姓致困窮由、不
可然候、向後徒成費無之様可申付、若氣任ノ者於有之
ハ可申出事、

一大嶋ノ儀、干損地ノ由候ヘハ、雨少キ年モ可有之候間、
本苗九十月イタシ置、正二月植付、春雨無之、本苗仕
付難成相見ヘ候ハ、正月ヨリ三四月迄若苗晚苗段々
イタシ置仕付可申付、尤、時々無油断致詮儀、何トソ
本苗ニ付植付^①、荒地無之様可申付、干損地ノ儀致打起
置、兩有之節成程踏拵畦堅メ能仕候ヘハ、廿日卅日雨
無之候テモ水持ノ由候間、其心得ヲ以年内ニ下拵仕廻

候様可申付、仮干損ニテモ、不植付地方ハ代定其年ノ

高代申付、尤、損地ニ相立間敷候条、可得其意候、且

又作時分ニモ海辺ノ漁而⑧仁罷出、耕作大形有之由候

間、右体ノ儀、曾テ無之様稠敷可申付事、

一 与人役代ノ儀、此中ハ代官見合ヲ以雖申付、向後役代

ノ儀ハ其旨趣委細書記、尤、代役人見合同前可申出事、

一 島中仕置ノ儀、規模帳別冊ニ申渡候間、堅固可相守之、

此外ノ儀、時々大嶋代官へ申渡候間、可有継渡候条、

委曲可得其意、若差支儀於有之ハ可申出、道ノ嶋ノ儀、

隔海路御仕置当ラサル儀モ可有之候間、諸事氣ヲ付、

⑨非意無之、往々少ニテモ宜筋ニ、附役人共ハ不及申、地

下役人ノ面々へモ堅固可申渡候、賄賂ノ進物受用有間

敷候、酒女ノ戒可為肝要事、

右条々相守之、附役人并地下役人百姓中へ慥申渡、若

違背於有之ハ可致沙汰条、急度可申出之、規帳別冊ニ

相渡ノ条、可得其意候、尤、向後役代ノ節ハ時々継渡、

古代官新代官立合、此旨堅固ニ可申渡者也、

元禄六年酉二月廿一日

御国遣座

喜界嶋代官

八六四

一道ノ嶋ノ者共、諸島通融ノ節ハ代官免印ヲ以可差渡旨、

去冬段々被仰渡候処、喜界嶋・大嶋ノ儀ハ前方向支配

ニテ有之、今以故飯米并諸役人御扶持麦其外御入付麦

等モ相究、何角用事モ一島同前ニ仕達之、通融モ已前

ヨリ代官附役無構相互ニ与人手形廻⑩ニテ通融仕来候間、

有来通与人手形廻⑩ニテ通融仕候様被仰付度旨、段々差

支候訳被申越趣相達、遂披露候処ニ、有来通与人手形

ヲ以致通融候様ニ被仰付候間、可被得其意候、尤、此

段ハ大嶋代官へモ被仰渡候、是又為納得申越候、此旨

可申越由、作左衛門殿御差図ニテ候、以上、

但、大嶋外ニ差越候節ハ此内被仰渡置候通可仕候、

以上、

寅十一月十一日

高橋外記

喜界嶋代官

上原善藏殿

八六五

一道ノ嶋御規模中取帳、元禄十一寅年被仰渡置候処ニ、其已後段々御格式相替候儀モ有之候、依之、御規模調此節御勝手方御用人鎌田六郎太夫へ被仰付候間、右中取帳ノ面、寅年已来ニ時々御証文ヲ以相改リ候儀可有之候条、念ヲ入不落様相シラへ、右帳面ニ委細致紙①限、来春便船ヲ以可被差上①候、且又御規模帳ニ無之候テモ先例ニテ定式ニ仕来候事、已後共御規模帳ニ被越置度儀ト被存寄儀モ可有之候、右体ノ儀ハ別紙書付右同前可被差越旨御差図ニテ候、以上、

但、寅年被渡置候中取帳ヲ本ニシテシラへ有之候間、其島ニテハ写ヲ以御用可被相弁候、
(享保元年カ)
申十月十日
向井十郎太夫

喜界嶋代官
渋谷三四郎殿

八六六

一道ノ嶋牛馬口銭ノ儀、已前八年中ニ匹間尺筵一枚上納、

且又去ル卯年ヨリ牛馬百匹ニ付重口銭トシテ尺筵五枚

申付、代官ニ詰中ニ一度ツ、牛馬相改、応員数上納仕来候通、然処ニ琉球・種子ケ嶋ノ儀ハ何匹①定ト員数相究リ定納ニ被仰付候間、道ノ嶋ノ儀モ右同前ニ此節ヨリ定納ニ被仰付候条、得其意、牛馬員数相糺可被申出旨、去戌閏十月被仰渡候へトモ、定納ニハ不被仰付候条、此内ノ通牛馬相改、応員数上納仕来候通①ニ、口銭并重口銭迄モ跡々ノ通可被相心得旨、弾正殿御差図ニテ候、以上、

(享保四年カ)
亥十月十一日
蒲生十郎兵衛印

八六七
写

一御物仕上セ時分後不罷成様ニト已前ヨリ段々被仰渡置候処、近年相滞候船々モ有之候、道ノ嶋ノ儀、時節ヲ限致渡海事候へハ、時節後候テハ上着相滞、御用ノ支

相成、其上海^⑧等モ有之、旁以御不勝手候間、一漕氣ヲ付、仕上セ無遅滞様ニ可申渡候、

一 棕呂木ノ儀、無沙汰ノ所モ有之由候条、村々地面広狭人数多少ニ応シ年々木数見合植付申渡、間切横目ナトノ内兼役申付致成長候様ニ可申渡候、左候テ年々年々植付候木数ノ首尾毎年可申越候、尤、当分植立有之分ハ木数改申付、皮上納可申付、植次ノ木ハ御イカタ之通上納可申付候、

一 仕上船足重ク不積入様ニト已前ヨリ申渡ノ趣有之候処、近年足入ノ船モ有之候、足重積入候テハ少々風波ニモ及難船、別テ不宜事候条、向後弥以定ノ焼印限積入、曾テ足重不積入様ニ可申渡候、若此已後足入ノ船モ有之候ハ、可及沙汰候条、堅固ニ可申渡候、

一 代官并附役人諸品物持下、百姓共へ致入付間敷旨、從已前段々被仰渡趣有之候処、連々緩セ成行候由、其間得有之、不可然事候条、向後猶以先年已来度々被仰渡置趣屹相守、代官并附役ハ勿論、召列候家^⑨下人又ハ与人其外役々ノ者迄モ、曾テ不致入付様可申渡候、若

相背候ハ、可及沙汰候、万一此已後諸品物入付候共、一向受付間敷旨、諸百姓共へ堅可申付置旨、被差越置候横目へ申渡趣有之候条、此段モ附役并家来下人・与人其外諸役々迄モ不洩様堅固ニ可申渡候、代官代合ノ節ハ慥ニ可次渡候、

一 御買入砂糖并尺筵其外御買物ノ代米諸百姓へ相渡候節、諸出米^⑩等押込ニ致差引候故、何々ニ付而之出米△何程ト百姓共不存候由、此儀如何ノ条、向後ハ百姓共為落着、砂糖代米尺筵代米何程、其内何程ニハ何々ニ付テノ出米ト銘々具ニ相記シ、一村分ツ、致書付、与人致印形、年々百姓中へ相渡候様可申渡候、尤、此已後ハ右通ノ書付年々与人共ヨリ相渡管候間、能致格護置、入用ノ節ハ差出候様ニ諸百姓共へ可申聞置旨、被差越置候横目へ申渡趣有之候条、是又可得其意候、

丑九月

轉

太郎左衛門^⑪

八六八

大嶋置目ノ条々

一島中田島ノ名寄帳可被書調事付、荒地并仕明地可相記

事、

一^{①おほ}ヤ、向後相ヤメラル可キ事、

付、御扶持米被下間敷事、

一ウハ木ノ与人目指可被止事、

一一郡ニ与人三人宛相定候事、

一一村ニ掟一人相定、一人ニ付切米一石可被下候、

一一郡ニ筆者一人ツ、相定候、

但、一人ニ付切米一石ツ、可被下候、

一与人一人ニ付切米五石被下、知行可召上候事、

一与人筆子并諸役人ノ数、御定ノ外ハ停止タルヘキ事、

一カツラ・米・莛・布・酒、男女ニヨラス出間敷事、

一与人筆子、百姓ヲ色々召仕儀、皆^{①為}停止事、

一オツルノ方ニ^{①御百姓}ヲ人々内ノ者ニ相成候儀、曲事候間、

元和元年ヨリ以来ノ者相カヘスヘキ事、

一島中ニヲヒテ私人ヲ致成敗儀、堅可為停止、

但、殺シ候ハテ不叶科人ハ可得御意事、

一諸役人百姓ニ対シ私ニ檢断致儀、可為停止事、

一島中諸役人、百姓ヲヤトヒ供ニツレマシキ事、

一カイセン作マシキ事、

一日本衆其島ヘ^{①被}罷参候共致進物間敷事、

一折目祭夫々仕米スクルフウニシヤウニ取納可致事、

付、島中ノ者百姓等ニ至迄、草履ハクヘキ事、

一赤津久黒ツク馬ノ尾牛皮不殘御物ヲ以可買取事、

一島中麦ノ内小麦ヲ專ニ可仕事、

一カラヲ莛芭蕉ワタ御物ヲ買取^(以脱カ)可納事、

一牛馬年々ニシルシ役儀可仕事、

一諸百姓可成程焼酎作可相納事、

一追立莛ノ儀、人数付ノ上ヲ以可相納事、

一納物不依何色百姓ニ請取^{①を}可出候事、

一数年百姓未^{①進}事、

一百姓手前ヨリ役人共色々出物仕候、向後何色ニヨラス

可為停止候間、田島ノ納相カサム可キ事、

一米此地仕上セノ時分、二月ヨリ船ヲ被遣、三月此方ヘ

着船ノ事、又四月ヨリ六月迄先ハ上下可仕事、

一 七月ヨリ明ル正月迄ハ仕上セ船ノ上下可為停止事、

一 与人御算用可参①知ハ主従三人可罷上候、多人数召列候

儀可為停止、

付、滞在中飯米可被下事、

一 右御算用ニ付可罷上①知ハ、与人一人ニ付御船間二十石

可被下候、

右条々、若於相背ハ稠敷可有其沙汰事、

元和九年癸亥八月廿五日

(三原重徳)
備中守 印

(比志島國徳)
宮内輔 印

(伊勢貞昌)
兵部輔 印

(喜入忠統)
摂津守 印

(島津久元)
下野守 印

八六九

宝曆二申二月

一 島方御用人へ

一道ノ嶋代官并附役勤方ノ儀ハ規模帳被渡置、先年已来

諸事ノ儀書付ヲ以申渡有之候処、猶又近年万端細蜜ニ

申渡候旨有之候へ共、今以風儀不相直ノ由聞得ノ趣有

之候、此儀何様取違候哉、自分ノ勝手ヲ專ニイタシ、

御物御不勝手、島人共ニモ及難儀①之候由、不可然候条、

先年已来申渡置候通、自分勝手ヲ差捨、第一御為筋宜、

島人共不及難儀様一涯心掛、万事廉直ニ可相動候、①時

当地代官并附役於島家来又ハ朝夕入用ノ品迄持渡候様

為申渡置事候、然共代官并附役ニハ於島役料米被下置

候間、其年ハ余計ニ相見へ候付、御物御買入相濟候已

後右米ヲ以砂糖其外ノ品相納差上セ候儀ハ其通ニモ可

有之候、右ノ外砂糖其外ノ品余計ニ差上候ハ、委遂

吟味其品取揚申付、又ハ時宜次第屹ト御答目ヲモ可被

仰付候間、聊大形ノ儀有之間敷、且又米砂糖仕上セ船

出帆相滞、山川着及延引候テハ別テ御不勝手モ有之候

条、随分積入ヨリ着早々出帆申付、此節ヨリ其詮相見

へ候様首尾可致候、右之段附役又ハ与人横目其外末々

ノ役々迄モ不洩様屹可申渡候、

一代官并附役共自物ノ品々船頭水手共名目ニテ津口通相

付相頼差上セ候儀致ハ無之筈候ヘトモ、曾テ左様ノ儀致間敷候、万一右体ノ聞得有之候ハ、遂吟味時宜次第可申付候、尤、右ノ段船頭共ヘハ諸人ヨリ何様相頼候テモ不請合様可申付旨、御船奉行ヘ申渡置候、

右ノ通申付候条、於島仕繰等敷其外風儀不宜儀、後々先例ヲ以仕来候儀共有之候ハ、都テ相改、規模并書付ニテ段々申渡置旨ヲ以、万端正道ニ可相勤候、

右、当春渡海道ノ島代官ヘ可申越候、

申二月

(川田編補)
伊織

(八二七号文書に同じ)

大嶋

八七〇

本田氏大嶋私考

一享保十二未年大御支配ノ檢地アリ、翌年戊申七月廿五日御給地大嶋高一万六千七百七十八石六斗一升一合四

勺九才ニ究リ、其後檢地有テ減少、今現高一万六千七百七十石二斗五升七合一勺八才、享保ノ大御支配ヨリ去年文化元年ノ秋迄年数七十八年ノ間ニ三百七十石一升九合三才ノ增高アリ、是ヲ御試新任明ト云、当時惣合ノ高頭一万七千四百四十石二斗七升四合一勺一才アリ、御試高当納米百四十二石六斗四升三合、

名瀬方

一高頭千六百五十八石五斗八升二合八勺五才

内、

島高四斗九升三合三勺三才 藏地

同二斗三合八勺一才 役屋敷

同一升八合一才 役屋敷

現高千六百五十七石八斗六升七合六勺一才

四斗二升代

納米六百九十一石五斗七合

龍郷方

一高頭千四百一石五斗二升一合九勺二才

外ニ高頭百四十五石九斗四升七合六勺九才^①武

右、名瀬間切龍郷方浦村瀬名方へ被召付度、伊集院弥八郎代段々申出趣有之、享保十五戌十一月八日高橋外記殿御取次御証文ヲ以、外書ノ通瀬名方へ被召付、亥年ヨリ除、

畑高二斗七升四合二勺九才 藏地

現高千四百一石二斗四升七合六勺三才

内、同高千三百六十三石四斗三升四合三勺

四斗二升代

納米五百八十四石九升五合

笠利方

一高頭千七百五十石四斗二升七合六勺二才

内、同高千五百九十五石五斗九升四勺八才

四斗二升代

納米六百八十三石五斗五升一合

畑高八十六石三斗五升九合五才

四斗五升代

納大麥二十三石七斗八升三合

納小麥十五石八斗五升六合

赤木名方

一高頭千七百十五石三斗八升六合六勺七才

内、

畑高六升六合六勺七才

藏地

同二斗七升五合二勺四才

役所屋敷

上木高三升八合一勺

右同

現高千七百十五石六合六勺六才

内、同高千五百九十七石八斗四升七合六勺一才

四斗二升代

納米六百八十四石五斗一升八合

塩浜高六石六斗二升二合八勺六才

三斗五升代

納米二石三斗六升五合

畑高九十六石四斗三升六合一勺九才

四斗五升代

納大麥二十六石五斗五升九合

納小麥十七石七斗五合

瀬名方

一高頭千五百五十三石六斗六升五合七勺二才

内、高百四十五石九斗四升七合六勺二才

但、名瀬間切龍郷方ヨリ被召附度申出、享保十五

戌十二月八日被召附候、

島高一斗二升一才

藏役屋敷

一現高千百五十三石五斗四升六合七勺一才

内、同高千二百二十五石九斗八升二合八勺六才

四斗二升代

納米四百八十二石三斗七升一合

古見方

一高頭八百八十五石九斗八升九合五勺三才

内、

畑高一斗六升六合六才

藏役屋敷

田高二石一斗八升五合七勺一才 損地引

但、享保十五戌年破損、伊集院弥八郎竿、

同二石四斗

右同

但、享保廿一年辰洪水ニ付破損、酒田次郎左衛門

竿、

現高八百八十一石二斗三升七合一勺六才

内、田高八百七十一石八斗二升二才

四斗二升代

納米三百七十三石四斗八升八合

住用間切

一高頭千二百十六石三斗七升七合一勺四才

内、

島高一斗三升二合三勺八才

藏地役屋敷

田高四斗八升

損地引

但、享保十五戌年洪水ニ付破損、伊集院弥八郎竿、

現高千二百十五石七斗六升四合七勺六才

内、田高千二百五石四斗七升三合三勺三才

四斗二升代

納米五百十六石四斗二升五合

渡連方

一高頭千二百二十石八斗五升四合二勺九才

内、

畑高五升七合一勺四才

藏地

同二斗一升三合三勺四才 役屋敷

現高千二百二十石五斗八升三合八勺一才

内、田高千百九十七石三斗九升七合一勺四才

四斗二升代

納米五百十二石九斗六升五合

東方

一高頭九百七十五石五斗三升七合一勺五才

内、田高九百五石二斗

四斗二升代

納米四百九石二斗八合

西方

一高頭千三百六十石七斗一升六合二勺五才

内、田高二斗八升七合六勺二才

右、芝實雄屋敷被成下候引、

現高千三百六十石四斗二升七合六勺三才

内、田高千三百八石九斗六升三合六勺三才

四斗二升代

納米五百六十石七斗六升

實久方

一高頭千二百四十四石七斗四升一才

内、畑高三斗七升一合四勺三才 藏地役屋敷

現高千二百四十四石三斗六升八合五勺八才

田畑高千二百二十二石三升四合二勺九才

四斗二升代

納米五百二十三石五斗二升

宇檢方

一高頭千四百七十三石九斗七升三合三勺五才

内、畑高二斗七升四合二勺九才 藏地役所屋敷

現高千四百七十三石六斗九升九合六才

田高千四百十石四斗四升二合八勺七才

四斗二升代

納米六百四石二斗三升四合

大和濱方

一高頭七百六十五石八斗三升九合九勺九才

内、田高二斗九升六合一勺九才 藏地役屋敷

現高七百六十五石五斗四升三合八勺

四斗二升代

納米三百十六石四斗四升六合

御給地元

惣高頭一万六千七百七十八石六斗一升一合四勺九才

合当納米七千二百二十八石二斗四升八合二勺四才

外、御試仕明高アリ、

島中

一当納米惣合七千三百六十六石五斗三合

内、

米七百二十六石五斗二升九合 笠利方

同七百二十七石五斗二升九合 赤木名方

同六百九十石五斗八升九合 龍郷方

同七百三十三石三升一合⑧斗 名瀬方

同三百三十五石七斗四升一合 大和濱方

同六百四十一石三斗七升五合 宇検方

同五百九十五石一斗七升四合 西方

同五百八十四石八斗八升三合 實久方

同四百三十三石七斗九升二合 東方

同五百四十三石七斗二升七合 渡連方

同五百四十七石六斗六升九合 住用間切

同三百六十五石一斗四合 古見方

同五百一十一石四斗四升三合 瀬名方

八七一

名瀬間切二十二ヶ村

根瀬部村 知名瀬村 小宿村 佐倉村(念カ)

朝仁村 金久村 伊津部村 大熊村

浦上村 有屋村 朝戸村 中勝村

右十二ヶ村ヲ名瀬方ト云、

有良村 芦花部村 阿木名村 幾里村

嘉徳村(園カ) 龍郷村 久場村

瀬花部村(瀬花留部カ) 屋入村△(大島私考により補)

右十ヶ村ヲ龍郷方ト云、

笠利間切十七ヶ村

屋仁村 佐仁村 用村 笠利村

千花部村 喜瀬村 湯湾村

右七ヶ村ヲ笠利方ト云、

邊留村 須野村 宇宿村 萬屋村

良田村(節カ) 平村 赤尾木村 芦徳村

里村 赤木名村

右十ヶ村ヲ赤木名方ト云、

古見間切十一ヶ村

浦村 大勝村 古里村 中勝村

奥間村 戸口村

右六ヶ村ヲ瀬名ト云、
(方脱カ)

小湊村 名瀬勝村 伊津部勝村 朝戸村

西中勝村

右五ヶ村(節カ)古見方ト云、

住用間切十四ヶ村

市村 山間村 尾勝村 田代村

役勝村 石原村 西中間村 神屋村

橋勝村(節カ) 和瀬村 金久村 見里村

東中間村 川内村

東間切二拾ヶ村
(二十一カ)

渡連村 洗鈍村(諸カ) 手安村 久根津村

油井村 古仁屋村 阿木名村 伊須村

蘇刈村

右九ヶ村ヲ渡連方ト云、

生間村 諸敷村 勝浦村 細野子村(網カ)

秋徳村 野見山村 龜野子村 勝能村

右十ヶ村ヲ東方ト云、
(四村脱カ・嘉徳村・清水村・節子村・嘉徳村)
外二ヶ村不足、

西間切三十四ヶ村

蔭川村 芝村 實久村 阿多地村

須古茂村 嘉入村 西阿室村 花留村

伊古茂村 於斉村 請阿室村 池地村

與路嶋村

右十三ヶ村ヲ實久方ト云、

西古見村 管鈍村 花矢村(天カ) 久慈村

古志村 篠川村 小瀬村(小名瀬カ) 阿鉄村

押角村 表村 三浦村 武名村

木慈村 瀬武村(瀬相村脱カ)

右二十四ヶ村ヲ西方ト云、
(十五カ)

屋喜内間切二十六ヶ村

屋鈍村	阿室村	平田村	佐倉村 <small>(念カ)</small>
名柄村	蔵戸村	須古村	湯灣村
田検村	芦検村	生勝村	久志村
郡連村 <small>(部カ)</small>	外一村 <small>(宇検村カ)</small>		
右十四村ヲ宇検ト云、			
今里村	志戸勤村	名音村	戸圓村
金久村	大棚村	毛陳村	大和濱村
思勝村	津名久村	湯灣釜村	國直村
右十二ヶ村ヲ大和濱方ト云、			

八七二

間切ノ事

一大嶋七間切有、名瀬・屋喜内或勝内・西・東・住用・古見・笠利ヲ云フ、我藩ノ郡ト云ニ同シ、其間切ノ内ニ村々アリ、然共岡嶽山野ヲ以境ヲ分ル事ナク、只其人居ノ有所、田島ノ支配スル地ヲ区テ何間切ニ究メ、全体地面ノ境ナシ、村々モ又シカリ、人家ヲ何村トヨ

ヘリ、ムカシ我藩ノ郡里ヲ孝徳帝三十七代ノ御時、大化二年ノ正月定メ給ヒシ、斯コソ有ヘシト覚ユ、其里ハ人家在所ヲサシテ云也、一間切ニ与人一兩人ヲ置、其間切ノ頭役ナリ、又間切横目一兩人ヲ置、惣体ノ善悪ヲ見聞スル役ナリ、与人・間切横目ハ居役所ニシテ、与人居所ヲ役所ト云、其間切ノ事ニ決断済成スル所ナリ、間切横目ノ居所ヲ横目役所ト云、屋喜内ヲ二ツニ分テ大和濱方・宇検方ト云、一方ニ与人一人・間切横目一人ヲ置、其間切ノ広太成故ナリ、西間切二ツニ分テ西方・實久方ト云、東間切二ツニ分テ東方・渡連方ト云、古見間切二ツニ分テ古見方・瀬名方ト云、笠利間切二ツニ分テ笠利方・赤木名方ト云、名瀬間切二ツニ分テ名瀬方・龍郷方ト云、一方毎ニ与人・間切横目一人ヲ置事、皆大和或勝・宇検ノ如シ、是ヲ十ヶ方ト云、与人ハ三年交代ニシテ勉ム故ニ何方与人ト呼、間切横目ハ其間切ノ名ヲモテ、何間切横目ト云、龍郷ニ勤テ名瀬間切横目ト云、瀬名ニ勤テモ古見間切横目ト云、年限ヲモテ交代スル事ナシ、村ニ掟ヲ置キ、其村ノ頭

役ニシテ即我藩ノ庄屋役トヲナシ、

八七三

島廻り里数ノ事

大嶋、惣廻り五十九里十丁ト云、丑寅ノ方ヨリ未申ノ方ニ流テ長シ、廿一里廿四町、中山伝信録、島長一百三十里ト記セリ、今ノ三十六丁一里ノ賦ニシテ、廿里廿四丁ナリ、未申ノ方ニ佳寄呂麻ト云離島有、廻り十五里余ニシテ半ハ東間切ニ屬シ半ハ西間切ニ屬ス、俗ニ向フト云、其渡リ一里ニ足ラスシテ瀬戸ナリ、其瀬戸内大船通融シテ風波凌能所ナリ、瀬戸ハ湾曲ニシテ長事凡五六里、又佳寄呂麻嶋ノ未申ノ方ニアタリテ両島有、請嶋・與路嶋ト云、西間切ニ屬ス、請嶋廻り四里九丁、與路嶋廻り三里廿丁、請西ノ地ヲ去事海上六里、與路西相去事海上六里、西古見港ヨリ請ト與路トノ間、海上纜ニ廿丁ナリト云ヘトモ不同ナリ、ムカシ島図ヲ画、里数究リ時、山坂險阻、岸怪石多ク、猿モ攀登ル事能ワサル所有、依之繩ヲ引テ細ニ間数ヲ量ラ

ス、只今家ノ有所ヲ以何所ヨリ何所迄①行程何程何町ト究タルト見②へタリ、其里数等カラス、世俗云フ、或ハ五十町或六十町ナト云フニモ遠キ一里有、道ニ此石何里ノシルシナルト云フ所有、イツレノ世ニ定リシニヤ詳ナラス、今代官役所ニ収ル所ノ島ノ図ヲ天和三年亥二月廿五日箱銘ニシルシアレハ、正保年中薩藩ノ地図ヲ大家ニ獻③せラレシ事アリ、其時調ヲ奉シ図ノ写ナルヘシ、元禄年中又薩藩ノ図ヲ細糺シテ 大家ニ獻セラレシ事有、此時モ調ヲセシ管ナレ共、今是ヲ収メス、其一町ハ六十間、其一間ハ六尺五々ノ法ヲ用ユ、我藩モ上古ハ一里ノ法定ラス、里ヨリ里迄一里ト云、人里ノ義ナリ、サレトモ大概六町ナリ、其時ノ一步ハ六尺ト云、正親町院天正年中、一里ノ行程ヲ定玉フ、地ノ三十六禽ヲ表シテ三十六町ヲ一里トス、諸国ニ一里塚ヲ築シム、シルシニ松杉ヲウユヘキヤト信長ヘ伺フニ、余ノ木ヲウユヘシト云、畏テ榎ノ木ヲ植タリ、ヨノ木・エノ木聞タカヘト云伝フ、名瀬役所ヨリ龍郷役所迄陸地四里、海上五里、龍郷ヨリ笠利役所迄三里、海上二

里、笠利ヨリ瀬名役所迄三里、海上同シ、瀬名ヨリ古見役所迄四里、海上二里、古見ヨリ住用役所迄五里、海上三里、住用ヨリ東役所迄五里、海上同シ、東ヨリ西役所迄海上三里、陸地ナシ、西ヨリ宇檢役所迄五里、海上ヲナシ、大和濱ヨリ名瀬役所迄四里、海上三里、其役所々々ヲ左旋スルニ陸地四十一里、海路三十六里ナリ、

八七四

大嶋来由ノ事

天地ヒラケ何レノ代何レノ人ノ住居シテ此島ヲ領知セシニヤ詳ナラス、ムカシ平氏ノ党没落シテ身ヲ西海ニ沈シ時、三位中将資盛・少将有盛・左馬頭行盛ナル人漂流シテ島民ヲ教化シテ遂ニ領知スト云伝フ、行盛ハ瀬名戸口村、有盛ハ東間切大チヨン、資盛ハ名瀬浦上村^⑧、廟所有、今ノ蒲生権現・今井権現^⑨の兩社は供奉の人々にして没後権現△ト崇シト云、又琉球ニ貢ヲ入レシ事ハ中山王英祖ノ時咸淳二丙寅ノ年也、注ニ咸淳

ハ宋朝ノ年号、日本文永三年丙寅ニ当ル、中山伝信録ヲ按スルニ、英祖ハ舜天王四世ノ王、年二十ニシテ経伝ニ通ス、三十二ニシテ即位、明年國中巡行シ周徹ノ法ニ效フ、経界ヲ正シ、井地ヲ均フシ、穀録平ニ百度奉、景定五年西ノ諸島^⑩来貢をはしむ、咸淳二年丙寅北夷大嶋△来朝ス、厚ク賜ヲ給ヒ帰サル、是大嶋来貢ノ初、毎年貢ヲ入事ト記セリ、琉球ヨリ北夷ト云時ハ元来琉球ノ属島ニアラサル事知ヘシ、マタ我朝ニ来貢スル事モ詳ナラス、或人南島トアルヲモテ大嶋ノ事ナド、云ヘトモ未タ証的ヲ見ス、薩摩ノ南ニ島々多シ今按スルニ其地形ヲモテヲシテ考ヘ、異朝ニモ我朝ニモ属セス、マタ琉球ニ属セスシテ、佳寄呂麻・喜界・請・與路ヲ合セ独立シテ食足豊饒ノ島ナルヘシ、吾藩ノ属島川邊郡七嶋モ往古ハ大嶋ノ属島ニテ、貨物ヲ我国ニ交易スル所ナラン歟、互ニ通融シテ遂ニ日本ノ属島トハ成ニシ哉、続日本記文武三年秋七月多櫛夜久度威等人從朝率而来貢方物、授位賜各有差矣、度威嶋^⑪中国於是始矣、云々、多櫛今ノ種子嶋、夜久ハ則今ノ屋久嶋ナリ、

度成嶋ハ今ノ七嶋寶ノコト成ヘシ、中山伝信録ニ七嶋ノ惣名ヲトカラト云ト見ヘタリ、大嶋ハ七嶋ヲモテ^①倭国に交易し、所謂資盛・有盛漂流して△倭国ノ風イヨク行ワレ、日本附庸ノ地ノ如クナリシニ、文永三年琉球ニ貢ヲイレ、此時本朝龜山帝ノ御宇、將軍惟康親王ニ当ル、於是皆琉球ノ法振ニ習フ、大嶋ハ七嶋ノ寶ヨリ方位巳、海上三十五里、大嶋ヨリ琉球ニ至迄海上凡百五十里、末略、

琉球ハ、普光院義教將軍嘉吉元年邦君太岳公ニ賜ヒシヨリ附庸ト成テ、毎歲文船二艘ヲ貢シケルニ、中山王尚寧叛キ、慶長十四年己酉ノ春、樺山権左衛門久高ヲ大将トシ、平田太郎左衛門増宗ヲ副將トシテ琉球ヲ征伐セシム時ニ初此島ニ渡リ、今ノ大和濱ニ着船ス、防モノ一人モナク降参ス、又宇換ヲ攻ム、酋長出テ戦ワントス、銃丸ヲ放サシム、島民其威ニ恐レ悉ク降参ス、依テ地名ヲ焼討ト云フト云リ、其時ノ酋長姓名詳ナラス、久高・増宗徳ノ嶋ニ渡、カレヲモ討隨ヘ、遂ニ琉球首里城ニ押寄、国王及群臣ヲ捕、日本ニ帰朝ス、凡

二ケ年ヲ経テ国ニ帰ル、此時ニ当テ大嶋ノ地悉ク我公田ト成、同十八年法元仁右衛門ナルモノヲモテ大嶋代官職トナシ、年貢ヲ大和ニ収メ、島人皆土民ニ準シ、諸役ヲ勤ル者ハ一等ヲ揚テ下土ニ準シ、役退テハ又故ノ如ク土民トナス、其役ヲ大親ヲモテ長トス、其次ヲ与人トス、大嶋ノ諸令^①元和九年定ル事見ヘタリ、

一 中山伝信録ニ、大嶋ハ琉球ノ屬島ニシテ三十六ノ一ニシテ、大嶋土名烏父世麻、在度姑東北、去中山八百里、水行三日可達、其島長一百三十里、分七間切有、西間^①・東間切及笠利間切・瀨名・屋喜^①・住用^①・古見等間切ニ分、屬二百余県、其島無孔廟、有四書五經・唐詩等ノ書、自称小琉球、大酋長^①十二員、小酋長△一百六十余員云云、度姑ハ唐音トク、即今ノ徳ノ嶋ナリ、烏父世麻唐音ウフスマ、八百里ハ六町一里ノ賦ナルヘシ、與路ヲ由呂ト書、請ヲ烏奇奴ト記ス、唐音由呂ハユロ、烏奇奴ハウキラヌ^①、徐保光大嶋ノ訓音ヲ尋シ時、大嶋ヲ烏父世麻、請ヲ烏奇奴ト書テ見セタルヲ其儘伝信録ニ書載タルト見ヘタリ、與路・請ノ両島皆琉球屬島三

十六ノ内ナリ、

八七五

神社仏閣

一行盛宮 瀨名方戸口村ニ有、伝称左馬頭行盛ノ廟ナリ

ト云、祭日二八月初酉日、

一助盛ノ宮 ^⑨赤井 赤間切諸鈍村ヲホチヨント云所ニ有、祭神

三位中将助盛ノ靈ト云、

一有盛宮 名瀨方浦上村ニ有、祭神少将有盛、

右三人平氏ノ党ニテ、ハシメ喜界嶋ニ渡リ、其後瀨名

戸口ニ来リ、城ヲ築キ居住シテ島民ノ下知ニ随ハサル

モノヲ討テ島ヲ領知シ、三人三頭ニ分テ支配セリ、今

ノ社地ハ則居住ノ遺址ナリト云フ、

一蒲生権現 笠利間切屋仁村ニ有、蒲生左衛門ナル人ノ

靈ナリ、祭日九月九日、

一今井権現 名瀨間切龍郷方圓村ニ有、今井権太郎ナル

人ノ靈ナリ、正祭前ニ同シ、今井・蒲生ノ両氏ハ行盛

ニ随侍ノ人ニシテ、行盛居住ノ瀨名ノ城ヲ警固ノ為ニ

津代港深井カ浦ノ入口左右ニ分レテ、蒲生ハ東ノ鼻崎、

今井ハ西ノ鼻崎、即今ノ社地ニ居住シテ、大和船来着

スルヲ防禦為ト云ヘリ、

一弁天社 赤木名村ニ有、勧請年月不詳、

一補陀山観音寺 笠利間切赤木名村ニ有、曹洞宗福昌寺

末寺、本尊正観音座像、作ハ不詳、開基年曆不詳、中

古名瀨間切大熊村ニ有、イツノ年カ赤木名村ニ移ス、

是又年間不知、

八七六

代官権輿

一慶長十八癸丑年、法元仁右衛門初テ此職ニ置ル、三年

交代ト見ヘタリ、喜界嶋モ大嶋代官支配ス、引移^⑩元和

元乙卯年川越将監、同三丁巳年川上彦左衛門、同五己

未年黒葛原筑後、同七辛酉年鮫嶋幸左衛門、同九癸亥

年町田勘ケ由、宝永^(寛永カ)二乙丑年是枝仲^⑪房、同四丁卯年

野元源左衛門、同六己巳年関渡左衛門・山口蔵之助、

同十癸酉年野元安右衛門、同十二乙亥年吉岡宮内太夫、

同十四丑年有馬丹後、同十六己卯年有馬治右衛門此節 迄附 役三人、
姓名不知、同十八辛巳年有川五左衛門此節ヨリ附役人、 五人ニ成ル

其後段々交代、元禄六癸酉年村田伴助代、喜界嶋代官
伊地知五兵衛ニ被仰付、大嶋ヨリノ支配除カル、寛延
四辛未年伊佐岡伊右衛門、是年代官附役共三年代止ラ
レ、一年代ト成、宝曆七丁丑年山田喜三右衛門、此年
又代官附役三年代ニ相成候、安永六丁酉年新納用之進、
此時御仕向替ニテ砂糖惣御買入被仰渡、天明七丁未年
三原善兵衛、此時惣御買入被相止、御定斤外役々交易
御免、

八七七

忝検者渡海

元禄八年野村四郎右衛門此職ニテ渡海、此已前不詳、
同九年木場市郎右衛門交代ス、同十年上別府半六交代、
二ヶ年詰テ同十二年川上平五左衛門ニ交代ス、是ヨリ
二年詰ト成、其後段々交代、享保三年八木渡左衛門渡
海、其後御引取、格式伝ワラス、代々ノ人ヲモテ按ス

ルニ今ノ地方検者等ノ類成ヘシ、三人賄トミヘタリ、

八七八

横目渡海

延享二年横目中馬休左衛門・鎌田寛太夫兩人不時ニ渡
海被仰付、是初ナリ、同三年・同四年・寛延二年姓名
不見、此三ヶ年ハ關役⑧、按スルニ、延享四年四月晦
日島中ノ費ヲ改、十五ヶ条ノ令ヲ下サル、中馬・鎌田
前年上国シテ数ヶ条上書セシニヤ、此事ニ及フ、同三
年又横目山崎藤左衛門・座横目川村四郎左衛門兩人渡
海シ是ヨリ年々交代ス、其後年々横目・座横目交代ス、
宝曆四年座横目谷山次郎右衛門・横目相良嘉兵衛交代
ス、此時ヨリ座横目横目ノ頭ニ連名、

八七九

地方検者渡海

寛政十一年未春、地方検者中村源助・福田彦八・宮原
五兵衛・稲留良右衛門三人四人被差越、山野地開方賄料

作手入催促等被仰付、同十二年荒武武右衛門・伊藤休右衛門彼四人ニ交代、翌享和元年黒江正右衛門・貴嶋正九郎渡海、同二年夏上国、已来御引取、

八八〇

代官仮屋

慶長十八年法元仁右衛門大嶋代官ニテ被差越、名瀬間切大熊村ニ仮屋ヲ建、已来廿四年、寛永十四年有馬丹後笠利間切赤木名金久村ニ移ス、同十六年有馬治右衛門又大熊村ニ移ス、十六年ヲ経テ、慶安二年中村主計又赤木名金久村ニ移ス、同四年伊集院左京又大熊村ニ移ス、廿三年ニシテ、東郷喜兵衛代延宝元年赤木名村ニ移、代々居住スル事百廿九年、享和元年和田新吾代、名瀬伊津部村今ノ地ニ移サル、

附、交代仮屋ハ南雲新左衛門代、宝曆四年名瀬間切龍郷村ニ作ル、是ヲ移仮屋ト云、此時初テ作ルニ非ス、其初不詳、安永七戌年、代官新納用ノ進龍郷村移仮屋引払、赤木名村ニ借宅ス、島民ノ徭役ヲ省ク

為ナリ、其後武清太代、又龍郷村ニ作ル、寛政三年亥二月四日、代官并詰横目龍郷ニ移ル、

八八一

島中人体牛馬船数

一島中男女三万四千百八十五人
但、寛政十二^中相改、
一同三万五千六十六人
但、文化二丑年宗門改帳、
一島中用夫四千五百二十九人
但、文化元子改、
一島中遠島人三百五十六人
但、文化二丑改、
一船頭水手滯島ノ者四十八人
但、文化二丑十一月改、
都合人数三万五千四百七十人
一島中牛馬千四百六十八匹
但、文化元子改、

一島中三枚帆八艘

島人はヲ小早ト云、松ヲ以作ル、上屋アリ、屋形ト云フ、

但、文化元子改、

一割船二百八十艘

松又ハ榑ヲ以作ル、島民是ヲ板付ト云、

但、文化元子改、

一クリ船二百五艘

松又ハイヅウヲ以作ル、丸木ヲ其儘①例テ船トナスユヘ

繰船ト云、伝信録ニ独木船ト云、

八八二

大嶋検地

一代官今井六右衛門在職ノ節、享保十一年丙午十二月郡

奉行田中幸右衛門・筆者鹽田覚之助并蒔見兩人・筆算

三人・竿取三人一手ニテ名瀬間切阿丹崎ニ着、翌年春

三月廿四日郡奉行市来新左衛門・筆者松岡覚兵衛并蒔

見二人・筆算三人・竿取二人一手ニテ大和濱ニ着船ニ

テ検地有之、惣高一万六千七百七十八石六斗一升一合

四勺九才ニ究、享保十三年申七月廿五日御検地帳渡ル、

是ヲ大御支配ト云、御勘定奉行鎌田太郎右衛門・谷山

覚太夫兩人ナリ、天明三年大嶋絵図ニハ惣高一万四百

五十五石五斗ト記セリ、其已前検地年間不詳、慶長・

万治ノ内検島々迄有之候儀不詳、代官名前交代記ニ、

元和七年代官鮫嶋幸右衛門代、大嶋・笠利間切・喜界

嶋御竿入有之由相見へ候、

一田畑共ニ町反畦歩ハ藩法ニ替リ無之、一間六尺五寸ニ

テ一間方一步ナリ、三十歩一畦ナリ、三百歩一段ナリ、

三千歩一町ナリ、大嶋ノ田地ハ一畦ニ稻三束アルト云、

束トハ稻ヲ刈時片手ニテ稻一握ツ、三ツ合テ①世一把ニシ

テ、其一把ヲ又三ツ取合一把ニ成テ、是ヲヒトタワリ

ト云、其一把ヲハツ合テ一ツニ成シタルヲ一束ト云、

一束ノ稻斤メ廿五斤百六十目ニシテ米ニ成テ四升定法ナリ、

突入宜ハ六七升モ有之由、枅ハ今ノ京ハンナリ、四升

ノ米粃ニシテハ八升成ヘシ、一畦ニ稻三束ハ京ハンニ

テ一斗二升ノ賦ナリ、又三百束田ト云事アリ、田地一

町ノ事ナリ、則稻三百束有、米ニ成シテ十二石ト云、
於島稻ヲ掛候斤量別ニ作テ有之、琉球二年貢ノ時ハ斤
メ上納ト見ヘタリ、

按ルニ、一把ノ事、島民ヒトタワリト云、孝徳帝大
化二年正月ノ記ニ、田三十歩広十二歩為段、十段為
町、段稻二束二束ニ把リ、町祖稻二十束ト記シ、束
ヲツカ、把ヲタハリ①、②仮名ヲ付タリ、日本上古ノ詞
不思儀ニ大嶋ニ伝レリ、其節ノ一步ハ六尺ヲ云、

八八三

砂糖黍ノ事

一今ノ砂糖黍ト云ハ甘蔗ナリ、島民ナヘテ荻ト云、吾藩
ノ人黍ト呼、大ニ誤①ナリ、所謂黍ハ五穀ノ長ニシテ
甘蔗トハ異ナリ、本草綱目ヲ按スルニ、甘蔗竹根名竿
蔗②有、竹蔗・荻蔗、竹蔗ハ大竹ノ如ク長サ丈余、
赤色ニシテ紅蔗ト云、又紫蔗又崑崙蔗トイフ、荻蔗ハ
白名ニシテ芳蔗ト云、又蠟蔗共云、皆汁ヲ取テ砂糖ト
ナスヘキナリ、時珍曰、蔗皆畦種③生ス、最地力ヲ圈

如茎竹ニ似テ内実ニシ、大成モノハ囲数寸、長サ六七
尺、根下節蜜ニシテ漸クニ疎ナリ、葉ヲ抽テ④葉ノ如
シ、其太ク長キ事三四尺四方ニ垂ル、大嶋ノ蔗ハ皆荻
蔗ニシテ竹蔗ナシ、島民荻ト云事実ニ当レリ、凡草ハ
皆正生嫡出ス、惟蔗ハ側種根上庶出ノ故ニ字庶ニ從フ
ト云ヘリ、砂糖本草ニ沙糖ニ作ル、

八八四

黍草取手入ノ事

一砂糖黍、一番草・二番草・三番取時節後レス手入スル
事肝要ナリ、一番二番ノ兩度ニテ黍立ハ能モノナリ、
三番草ヲ取ハ風切ヲ除、又黍ノ実入ヨシ、又翌年黍立
進ミ能事ナリ、黍十年ヲ過レハ位劣ルナリ、地面宜キ
所ハ手入草取能スル時ハ十年過テモ劣ル事ナシ、又黍
立宜ク、九月ニ至テ悉ク穂ヲ出ス時ハ上作ト知ヘシ、

八八五

新黍植ノ事

一正二月砂糖煎スル時、黍柄ノ八九寸目ノ所ヲ八九寸ニ切テ指ナリ、速ニ根ヲ生シ盛長ス、即新黍是ナリ、上々ノ進ミハ凡高サ五尺計、地ノ位ニ因テ黍ノ上中下有、地悪キハ纒一尺八九寸ニ過ス、新黍ハ草取疎成ハ草ノ為ニセカレテ進マサル事、古黍ト大ニ違フ故、草取手入肝要ナリ、又黍地ハ冬^①年地拵^②ヲシタルニシクハナシ、黍モ年内指付置時ハ翌年ノ砂糖増ルナリ、当春拵ノ地面ハ心頭黍ヨカラス、年々新黍裁^③サレハ古黍ヲ打コヤス事ナク、毎年アシキモ今ノ儘ニテ置ユヘ漸々砂糖減スルナリ、油断スヘカラス、

八八六

黒砂糖製法^④ノ事

一冬十一月砂糖車ヲ立、一所ニ車三ツ置、一ツヲ一組ト云、黍ヲ刈テ一把ツ、持運ヒ、黍ノ大成ハ一本、小成ハ二本、彼三ツノ車ニクワセテ、中ノ車ヲ馬ニ引セ、或ハ牛ニ引セ、或ハ水車ニ仕掛、中ノ車右旋スル時ハ左右ノ車左旋シテ、三ツノ車共ニ廻テ黍汁垂ル、其汁

ヲ丹荷ニ入、白灰ヲ入カキマセ、鉄鍋三ツニ入テ一所ニ焚^⑤フタナシ^⑥ニ鍋三ツヲ置、一時ハカリ焚ク、少シ堅マル、其汁減^⑦、又鍋ニツニ移入テ右ノ如ク焚テ煎ス、又其汁減ス、又二鍋ヲ一鍋ニ移入テ右ノ如ク煎シ加減ニ煎終テ又別鍋ニ移入、木ヲモテマスルナリ、ヒユルニ付テ即チカタマリ、最上ノ砂糖ト成、焚ニ加減有、又白灰ニ加減有、古老曰、寛政元年ノ春、砂糖煎方春暖ニ成テハユルミアリテ位ヲトル、十月朔日ニ初、翌年二月ヲ限ルヘシト二階堂太夫ノ命有テ代官武清太命セラ、其年十月朔日ニ初ム、砂糖甚少^⑧クシテ人悦ハス、人悦サレハ行ワレス、全体黍ハ二月ヲ熟スルノ時節トス、冬十一月十二月伐テ煎スル時ハ汁一斗ニ砂糖三四斤有、其黍ヲ二月伐テ煎スル時ハ一斗ニ五斤有、然共多ク作ルモノハ冬車ヲ出テモ三月四月ニ煎終ル故、砂糖ノ多少ニ拘^⑨ラス十一月初ムト云^⑩、少ク作ルモノハ正月二月ニ車ヲ立、其黍少フシテ砂糖ノ多キヲ利トス、民家利欲ノ為ニカシコケレハ油断スル事ナシ、一日男女十人アレハ樽一丁分出来ス、其一丁ノ斤目ハ凡

百三四十斤、或ハ百五十斤ニ及フ、斤目重キヲ以砂糖ノ位ヲ上トス、

八八七

黍地ニテ砂糖賦ノ事

一上々ノ黍ナラハ一畦ニ砂糖八十斤ノ内外有ヘシ、此已前ハ一畦ニ百斤ノ賦ト云トモ今ハ其黍ナシ、中黍ハ一畦ニ六十斤、下黍ハ四五十斤、新黍ハ三十斤余ト賦ルヘシ、天明中代官三原善兵衛黍ノ位ヲ試ミ、砂糖ヲ煎シ、上中下ヲ究メシ事アリ、上黍ハ長五六尺有、一畦ニ黍一尺立時ハ砂糖十斤宛ニ見賦ナリ、此事黍横目佐志雲ニ聞ニ、又黍横目幸喜ニ聞テ違フコトナシ、

八八八

砂糖樽ノ事

一砂糖入り樽①ハ、アサ・ゴラウ・クロ木・フク木・アン木・シロツク木・スクノ木・ソロメ木・キナ木・カシヤ木等ノ木ヲ用ユ、九月十月山ニ登リテ伐、二束ツ、

荷ヒ里ニ帰ルナリ、其一束廻リ三尺余、長一尺五六寸有、樽四挺分ニシテ、其重サ凡八貫目、樽木ハ初冬取テ能枯サレハ斤目重シ、又砂糖ヲ入テ漏セル②ユヘ甚ヨカラス、笠利間切山林ナク樽木ニ隙ヲ費ス、他間切トテモ二十年已前ハ一二里ニシテ木ヲ得、其日帰リシモ、今ハ二三里行テ是ヲ得、其日帰ル事能ワス、民隙ヲ費ス事ムカシニ倍セリ、砂糖多増、山薄ク成故ナリ、

八八九

樽寸法ノ事

一樽ノ高サ一尺五六寸、厚サ四部、口差渡一尺五六寸、蓋厚サ五六部、底厚廿七八部、樽スミ双方立金釘十本計ヲ打、帶竹六節③、是寛政元年己酉ノ春、国命アリテ定ル、樽ノ布袋ハ十三斤ヨリ十七斤迄アルモノナリト与人前喜子語レリ、

八九〇

髮指ノ事

男女共ニ髪ニ指頭差ノ惣名ヲギハト云、即簪ノ事ナリ、
与人役ハ白銀ノ菊形・白銀ノ副差ヲ用ユ、菊形ハ頭ニ

菊花ノ形有テ柱ハ方ニシ長三四寸計、髪ニ前ヨリサス、
副指ハヒニ似タリ、柱ハ円ニシテ^{⑦長}六七寸計、後ヨリ

サス、間切横目已下ノ諸横目ハ白銀ヲ用ル事ヲ免サス、
真鍮ノイチビカタ^{俗ツフロギハ又}・真鍮ノ副指用ユ、イ

チヒト云ハ吾藩ノイチゴノ事ソト、形カレニ似タルヲ

モテ、カク呼ヘルモノナリ、筆子・掟・黍見廻等ハ真

鍮ノ菊形・真鍮ノ副指ヲ用ユ、功才ハ真鍮ノ菊形ヲ用

ヒ副指ヲユルサス、其已下ノ民家菊形ヲ用ユルヲユル
サス、真鍮ノ副指計ヲ用、女ハ^⑧絞ノ髭ニテ造テサス、

八九一

廻文方限ノ事

○名瀬方凡四里 ○大和濱方凡五里 ○字検方五里

○西両平<sup>西役所海
上三里</sup> ○東両平五里 ○任用間切五里

○古見方四里 ○瀬名方三里 ○笠利両平三里

○龍郷方

右一手廻文ナリ、七間切与人中又ハ十三ヶ方与人ト宛
ル時ハ右ノ次第二廻ル也、

二手廻文

○大和濱方五里 ○字検方五里 ○西両平海上三里

○東両平五里 ○任用間切

右一手、

○名瀬方三里 ○古見方五里 ○瀬名方二里

○龍郷方三里 ○笠利両平

右一手、

三手廻文

○名瀬方五里 ○瀬名方五里 ○笠利両平三里 ○龍郷

○古見方二里 ○任用間切五里 ○東両平

○大和濱五里 ○字検方五里 ○西両平

^{朱書}諸役廻島^⑨二手

大和濱差入、字検・西・東・任用・古見ト廻ル、
名瀬方差入、瀬名・笠利・龍郷ト廻ル、

島津家歴代制度卷之拾六

寛延
文化

御儉約

御銀割

(本文より補)

御借金

御参勤料

用心銀

御儉約

八九二

御筆

一 近年所帯方不勝手ノ上領内凶年打続、年貢不足又ハ諸
士以下末々ニ至及困窮、飢ヲモ助、彼是ニ引入、且上

方向ノ才覚モ難達砌ニ付、別テ統方支ニ成候由、依之、
城代家老共ヨリ段々儉約ノ事共申越、委聞届候、公
義勤等ノ儀ハ格別ノ事ナカラ、是モ致様於有之ハ可相
減候、尤、此方ノ用事ハ随分不如意ニテ済メ候了簡候
ノ条、内証向ハ猶以減少候様可致候、畢竟領國中ノ者
共往々致安心候様ニトノ事ニ付、此旨得ト致了簡、都
テ減少ノ儀相シラへ、近年中其詮モ見へ候様ニ心得可
申候、右次第ニ付テハ従前々有来候格式ヲモ不相変候
テ不叶品モ有之事候、然ハ政務ニモ懸リ大切成事候間、
万端委細致沙汰、無費事ヲ專ニ可致吟味候、今度ノ儀
ハ尋常ノ儉約トハ変候間、面々随分心掛可令出精候、
シラヘニ付城代家老共并ニ若年寄・大目付ヘモ申談事
有之節ハ、余事ヲ差置時々此儘係リ片付可申談候、以
上、

享保十二年未六月

(卷之四 二一五号文書に同じ)

一近年御所帶方御不勝手ノ上凶年相統、諸士以下末々ニ至迄及困窮候付、此節段々江戸ヨリ御儉約ノ儀被仰出候ニ付テハ委細御家老中ヨリ申渡有之候、依之、面々引受ノ於座々ニシラヘノ次第左ノ趣ヲ以吟味可仕候、一御国并江戸上方御入用、其積為致候処、一ヶ年分ノ御不足高二積リ太分ノ儀候ヘ共、夫長ケノ減少ハ難成筈候条、當時御弘方ノ内ヨリ五六部程相減シ御統方相達候様ニ可有之儀候、御儉約ノ儀ハ毎度其沙汰有之、セリ詰タル御統方ニ候ヘハ、此上減様有之候間敷儀候ヘ共、此度ノ儀ハ有来儀ヲモ、振變トノ御事ニ候ヘハ、御規ノ表并先例等ハ差捨置、曾テ無頓着御規文モ例格為相究内、或其品モ惣様相減シ、或ハ半減・三部一、其外品々ニ応シ、相減、御統方相濟候様、可被仰付儀ニ候、公義御勤方ヲサヘ被減、御用ヲモ被相關候、御不如意ニテ可被為濟トノ御事候間、右仰出ノ旨ニマカセ、品々取付減方シラヘ仕、相濟候分ハ段々幾仕切ニモ可差出候、左候テ、惣体ノシラヘ相濟候節、於座々

一ヶ年分ノ御入用積リ仕、減定候惣高引、右之減方ニ致都合候哉、其記イタシ、若五六部減方ニ不及候ハ、又々御弘方ノ内減少ノシラヘ仕、イツレ右ノ減方ニ相當候様可遂吟味儀候、御屋作・御船等ノ儀ハ何部ノ減方相究候テノ沙汰ハ難致筈候ヘ共、是共ニ無用ノ御家等モ有之候ハ、取除可被仰付候間、於御船手ハ右ノ心得ヲ以、御船教御船道具其外減方ノ儀、随分無費様吟味可仕候、

一御納戸御書院方ノ御用物、御末、常程等ノ儀モ、此節ノ御儉約ハ尋常トハ相替候故、減少可有之儀候間、シラヘハ右ノ心得ヲ以遂吟味可申出候、御奥向御渡方、儀モ可為同断候、

一當時有来ノ内右ノ減方ニ被仰付候ハ、別テ不手迫ニテ少々ノ間違滞等可有儀ハ勿論候、別テノ滞ニ不成儀ハ、尤、其沙汰ニモ可及候間敷候条、何篇其見合ヲ以減方可申談候、引受ノ方計ニテモ無之、他ノ支配内ノ事ニテモ減方ニ付テ存寄候品ハ不及遠慮、可申出候、雖為小役人存寄之儀ハ無遠慮、申出候様ニ申渡、存寄

申出^{①候}ハ、御受可申出候、

一此節ノ儀、御所帶御取調、過分ノ御不足ヲ被補、其余勢ヲ以末々小安堵仕候様ニトノ御事候間、此涯ニ付テハ諸士以下末々迄何様ニ被仰付候ハ、可宜哉、尤、當時ノ御所帶向ニテハ急ニ潤被成候様ニハ難被仰付儀候ヘ共、御沙汰ノ品々ヨリ漸々致安堵^{①候}手筋モ可有之儀候条、右之意味致得心各存寄ノ旨不殘可申出候、

一右段々ノ趣ヲ以相シラヘ、其旨申出候テモ其筋ニ被仰付儀ニモ無之、相談ノ上達 貴聞候儀ト奉伺、何分ニモ時宜相応ニ可被仰付事候間、於面々ハ曾テ不及遠慮致吟味可申出候、

右ノ旨趣得其意、申出候儀共有^{①候條}間敷候、此節ノ儀、末々迄致安心候様ニトノ思召ヲ以、段々御儉約被仰付事候間、此旨得ト奉承知、各出精可遂吟味者也、

享保十二年未八月
(種子島久志)
彈正

八九四

一御所帶方難被統ト申儀、此程モ度々為有之事候ヘ共、

此度ノ儀ハ尋常ニ相替、至極候御差迫候故、諸御役座

每物減少イタシ候様可被仰付候条、致吟味可申上旨致承知候間、減方ノ儀、其座々ニテノ御用筋随分遂吟味、帳面等ノ儀モ余リ不詮立儀ハ二三重ノ書留ニ不及、輕キ事共ハ留ヲモ不致、惣体事少キ様致候ハ、夫々ノ座々ハ被掛置候人数モ減少被仰付様ニモ可有之候間、此減少方モ随分致吟味可被申出候、手広事候ヘハ何々ヲ致吟味候様ニモ^{①上}可被申渡様^{①候}ハ難致候間、支配外ノ事ニテモ存寄無遠慮可被申出候、

右ノ趣ヲ以、支配々々ニテ委細遂吟味、被差出^{①候}様ニ申渡、御用人中ヘモ右ノ趣遂吟味可申出候、以上、
享保十五戌九月 彈正

八九五

一御所帶向難被統、近来以来御儉約被仰付、當時^{①候}シラヘ座被建置、細蜜ノ上吟味被仰付事候ヘ共、近年御物入打統候所ヨリ為差出方不相見得、御借銀相増、当分三万四千貫目程ニ及、上方御利払サヘ三千貫目余ニテ、

御国産物其外寄銀取合常式江戸上方御入用ニ引当三千貫目程及御不足候、臨時ノ御入増又ハ依豊凶万納引入候年ハ猶以不足相重、応夫、御借銀モ年々相増積ニ候、只今ノ通ニテ被差置候テハ前後必至ト及御手迫、此儀別テ御大切ノ儀①候、御所帯向何篇振ラ被替、イツレ御借銀減候様御手当不被仰付候テ不叶事ニ候、五万石方御高所務近年表方御統料ニ被出置候②ヘ共、来午秋ヨリ御借銀本済料ニ別格ニ被差分候、右ノ所務一ヶ年太底文銀千三百貫目余ニテ、此分表方當時御統料引入、夫々々々ノ御不足銀三千貫目程ニ取合、一ヶ年都合文銀四千三百貫目余御不足ノ積ニ候、右ノ内七百貫目余ハ磯付御新田繰替高二千九百石余ノ所務代、其外菜種子・砂糖他国出手形銀相増候分物奉行方ヨリ諸人御借銀利銀重出来人別出銀等并給分ノ内引方被仰付、此節新規ノ出方故差引候テモ一ヶ年三千六百貫目余御不足ノ筈ニ候、此御不足銀江戸上方御領國中御入用ノ内何篇不差見候③ヘ共、本済料被差分候詮無之、其上往々御所帯御取統ノ程未定ノ事候、右イツレノ筋ニモ右ノ分

出方ニ不罷成候テ不叶儀④ハ先年以来諸事被減置候上太分ノ御減⑤候ヘハ別テ重キ儀ニ候、然トモ此以後ハ五万石方御高、本済料ニ被差分、残り御高其外万納ヲ以江戸上方御国御所帯相償、新利文⑥一切無之諸事相調候様、每物御取細メ一涯其詮相立候様格別ノ吟味不被仰付候テ不叶儀ニ候条、右ノ旨ヲ以、何篇不依輕重無遠慮細蜜尽吟味可被申出候、右之通可被申渡候、

寛延二年巳十一月

⑦平田正輔
⑧ 韌負△

八九六

(八九二号行開朱書)

一金銀御定法割合付テ江戸上方一ヶ年御入用増銀四千四百貫目程ノ積ニ候、其内千五百貫目程ハ見当有之候、⑨相残二千五百貫目、米ニシテ二万四千石余御不足ニ相究候、此節ノ儀、新規ノ増銀ニ候ヘハ御国元ヨリ不相統候テ不叶事候、然トモ近年別テ御差迫付ハ御簡略ヲモ被仰付、至極セリ詰候テノ事ニ候ヘハ、出方曾テ不相見得候、依之、御国元諸払ノ内差欠相統ル外無之候、

尤モ少ノ儀ニテハ中々御不足ニ不罷成候処、此節ハ御規ノ内ヲモ押テ致減少、御前御用ノ内ニモ差テ御用ニ不立品ハ相減、其余勢ヲ以御不足銀相弁候様無之候テ不叶事ニ候、一ヶ年御^①、私惣銀高四千貫目、米五万三千九百石余ニ付候、太略此銀米ニ応シ三割ノ減シ方ニ申付候条、御規模ニテモ定式ノ弘又ハ臨時ノ弘方迄モ其心得ヲ以テ減少仕、委曲致積書、来月十日ヨリ内ニ可差出候、此節ノ儀ハ格別ノ訳ニテ右ノ通御規ノ内被相欠、万端強テ減少申付事候へ共、先々御用ノ支モ可有之候へ共、別テノ支ニ不罷成儀ハ能々遂吟味減立可申付候、

一 依品ハ三割引程ニ難成モ可有之候へトモ兎角ユリ合ニテ社可有之候へハ右程割合不相定候へハ難致儀モ可有之候付、右ノ通申付事^①候、尤、吟味ノ上減少難成、又減少候テハ別テノ支ニ罷成儀ハ其訳委細可申出候、一 御役料其外被定置候被下分ノ儀ハ近年段々為被相減事候故、当分ノ通ニテ被差置候条、此段ハ承知可仕候、併、每物引締候テハ筆者小役人其外人數ヲ減候儀ハ可

有之候条、随分氣ヲ付相減可申候、

一支配外ノ儀ニテモ宜敷筋存寄ノ儀、此節ノ儀候間、少事^①テモ無遠慮可申出候、

右ノ通、諸奉行頭取へ不洩様可申渡候、已上、

享保四年亥四月

(種子島久基) 彈正

八九七

(八九三年行間朱書)

仰出御書付写

一 江戸詰中并、道中致参会儀有之由、此程段、申渡置候

通、料理ノ儀ハ勿論、酒肴其外不依何色馳走ケ間敷儀

一切致無用、茶・タバコノ外曾テ出間敷候、屹ト料理

ヲモ出シ祝不致候テ不叶程ノ儀、有之節ハ、輕キ吸物・

酒一通ニテ可相濟候、旅ノ事ニ候へハ万端不如意ヲ以

テ相濟候儀ニ可取計事、

一支度ノ儀可用飽服ト兼テ申渡置候、此節儉約申付候付

テハ一涯其詮不相立候テ不叶事ニ候条、江戸并道中供

先ニテモ随分飽服用、勤番等ノ節ハ猶以可致着飽服、

三人賦ヨリ已下ノ者ハ向後日野紬・郡内類可致着之、

紗綾・縮緬・羽二重此外結構ノ衣類持合タリトイフト

モ下着ノ外曾テ着致間敷候、四人賦已上新番馬廻ノ面々
モ可成程日用細類可致着、屹ト立衣服ヲモ不致候テ不
本ノマ、

成合程ノ儀可有之節ハ分限相応ニ可致、常ノ供先勤
番等ニ目立候費シ支度致間敷候、上下羽織等ノ儀モ右
①之

ニ準シ鹿相ノ品ヲ以可調之、身帯相応ノ者タリトモ勤
場ノ格式ニ応シ可調衣服、料理等ノ儀ニ付ハ從公
①之

義モ段々被仰渡旨有之候付、旁以右ノ趣堅可相守候、
右ニ付テハ役目ノ者共へ申付置趣モ候条、聊致違背間
敷候事、
①之

一酒ヲ取、ハヤシ候儀付テハ段々申渡置候間、屹ト参会
①之

等ハ致間敷候ヘトモ、ケ様ノ儀ハ程輕候ヘハ自然ト大
形ニ成行事モ候条、不致忘却様ニ可相慎事、

一親子兄弟ノ外土産一切無用タルヘキ旨從前々申渡置候、
此節儉約申付候付テハ弥以其旨ヲ可相守事、

一勤方ニ付物入ヲ申立、訴訟ケ間シキ儀一切申出間敷候、
面々勤場相応ノ賦申付事候間、内々儉約ヲ用、奉公相

勤候儀可為專一候、自然子細ヲ申立訴出候共、此節ニ

候条、取揚間敷事、

一側廻ノ儀、万端実体ニ相勤、支度等モ分限ヨリ輕クイ
タス可キ旨段々申渡置、猶又此程分テ申渡趣モ候条、
①之

道中江戸共ニ可成程鹿服ヲ用、平日ノ勤ニハ木綿
①之

類ノ上下又ハ芭蕉等ニテ可相濟、屹ト立候祝事其外衣
類迄モ相改候程ノ客対可有之節ハ格別候条、至其時ハ
不見苦支度ヲ以可相勤事候、夫共ニ目立候結構ノ衣類

調間敷候、少ニテモ費ノ物入イタシ訴訟ケ間敷儀申出
候共取揚間敷候、勿論平日勤番ニ結構成衣類持合候共
致着間敷候、随分儉約ヲ用、兼テ申付ヲキ候支度類ヲ
①之

以取計、奉公可相勤儀可為專要事、

一足輕小者中間其外家来末々ニ迄、定置候衣服用之、
何程鹿相有之候テモ可成迄ハ可令着、見分迄ヲ存、少
ニテモ費ノ儀ハ致サセ間シク候事、

右ノ条々、兼テ為申渡置事ニテ不新候ヘ共、連々所帯
就難洩致、此節一涯儉約ヲ用、其詮相立候様申付、此
①之

方ノ用事ハ、或令延引、或事ヲ欠、每物不如意ニテ相
濟ス砌候ヘハ、物入又ハ不勝手ノ訳ヲ以テ申立、訴訟

候儀可為專一候、自然子細ヲ申立訴出候共、此節ニ

申出候共、難取揚時節候条、其旨ヲ存、面々令欠略、
専奉公相勤候様屹ト申渡、於江戸モ早速ヨリ引替リ、
其詮相立候様ニ可申渡旨可申渡者也、

享保十六年亥七月

八九八

(八九三行間朱書)

一上方表御借銀及太分御所帶難被統候付、当年ヨリ四五

ヶ年御役料其外一升五合引方被仰付候事、

寛延二巳十一月四日

八九九

一 諸御役人へ

近年御物入ノ儀打統御所帶向難^{①統}罷成候処、去春御類
焼ニ付、御作事料出方無之、御借入モ一切難調候処、
御仕登物ノ内差分本濟筋ノ取組ニテ漸々御用金ノ内御
借入差出候、右ニ付テハ御仕登ノ品引入、猶以御統料
御不足相増、可被償様無之、及御手迫候付、諸御入用
格別ニ被相減、其余勢ヲ以可被為統儀候故、五ヶ年御

儉約被仰付候間、每物嚴蜜ニ尽吟味、御入用御減、往々
御統方相調候様ニ去年被仰出、其趣委細及兩度申渡有
之候処、先年以来度々ノ御儉約ニセリ詰被置候故、此
上存寄無之旨申出候モ有之、筆者小役人并筆紙墨減少、
御払物直増等ノ儀申出候モ有之、差当出方ニ可罷成儀
モ無之、御儉約ノ詮不相見得候、今度定式ノ御統料シ
ラへ申付候節、一ヶ年分御不足分^{①太}概三千八百貫目余
ニ及、太分成儀毎年ノ御不足ヨリ、其上御類焼候ニ付
二万兩之御拜借金来年ヨリ四千兩宛五ヶ年府御返上ノ
筈^{①候}、来年ハ琉人被召列筈候付テ此御物入有之、其外
不時御入用モ可有之儀候へハ、左様成^{①候}都テ定式御不
足ノ外相重積ニテ何レノ筋可被統様無之、至極ノ御手
迫太切成御事^{①候}、右ニ付テハ御統料ノ内被差欠、押テ
被取納方ニ一涯御儉約不被仰付候テ不叶儀候、御領国
中モ手広事候間、御役座へ不相懸儀ニテモ屹^{①依}被仰付様
ハ御勝手相成納方有之、又ハ減方能成可然儀一分ノ存
寄有之候ハ、同役構ナク面々見込ノ趣不及遠慮銘々
ヨリ可申出候、尤、表立難申出儀モ有之、内分ヲ以可

申出候、後々^御差迫ノ節トハ相替、毎事ノ定式ノ御不足ニテ格別成御差迫候間、其訳得ト汲受、小事ノ儀^候モ不扣置、当三月限可申出候、吟味ノ上何分可申渡候、存寄ノ趣差支有之無詮儀トテモ無調法ニハ成間敷候、此上存寄無之人ハ其首尾是又右月限可申出候、右ノ通、御側方・表方・御勝手方・支配中不洩様可申渡候、

宝曆十二年午二月

(養川実詮)
藤馬

九〇〇

一御所帯向ノ儀、連々御欠略被仰付、御積方モ宜成立、上方御償銀^借ノ内御出方モ有之、最早夫丈ケノ御統方ニ可罷成算用前迄^候ニ付、去ル子年定式ノ御仕登物モ被重、以後ハ不及御借銀御統方相濟筋ニ其手当被給付置候処、新^銀一統ノ通用ニ相成来^候テモ、諸物直成^{四宝}銀割右ノ通無之故候哉、江戸御国御入用相増候、於大坂ハ米并御仕上ノ御払物抜群ノ下直ニ罷成、子年ノ考ニ致相違候、依之、一ヶ年ノ御国御払物方ノ総申付候、前方ノ

御払ヨリ銀二千四百十七貫目余御入用相増候算用前ニ候、且又御仕上物^買子年定置候直成ト当時ノ相場ニテ見合候ヘハ、直下リノ引入千八百六十貫目程ニテ太分ノ銀高ニ候、右ノ通候間、上方ニテ又々新規ノ御借入銀モ有之、振廻別テ難調候、爰元ノ儀モ御当用払漸相達仕合ニ候故、来年ノ御参勤料・琉球拝借銀ノ御入付モ未相見得、至極^之ニ候御手廻^候ニハ、当時ノ振^付ニ付候ハ、不限此節、以来共御統方差支申答候ニ付、御入用ノ内相減、其余勢ヲ以被補候外致方無之積候間、何レモ此旨得ト承知可被仕候、

一右ノ次第候ヘハ、イツレ御払方ノ内不被相欠候テハ御勝手ニ不罷成答候条、面々引受ノ内右ノ心得ヲ以相シラヘ、仮^令ヘハ御規模有之儀ニテモ被相欠可然ト存寄^候ノ段ハ可被申出候、左候ハ、吟味ノ上何分ニモ可申渡候、一此跡ヨリ有来候儀又ハ時々御用ノ内ニテモ、或ハ減少、或ハ輕ク申付相濟儀有之答候処ニ、何事モ先例ニ任セ置、不及其儀候テハ平常モ不可然候、猶此砌候条、自今何篇見得来候儀ハ減方細蜜ニ可被致吟味候、諸座御

用物ノ内ニモ、一品有之候テモ自然御用可差支被相考
二重納物申付、為用心御当用無之品調方申付儀モ可有^{①調}
之候、御当用ノ内サへ可被差欠時節ニ候へハ、ケ様^①
之費曾て無之様△ニ可被氣附候、

一御船手・御普請方・御細工所・御台所・御春屋ノ儀ハ
余御役所相替、手広御物入有之場所候条、専氣ヲ附末々
ノ儀迄モ可入念候、新敷出来物又ハ繕物儀^{①杯}モ夫々輕重
ヲ考、徒ノ費無之様ニ致沙汰、修甫御普請輕ク取繕等
モ見分不宜所ノ儀ハ先^{①足}ニテ可差出置、モシ其通ニテ
ハ以来却テ御物入可有之ト存候程ノ儀ハ、委遂吟味可
得差戻候、諸職人・人足不断差置事候由候へハ、差当
^{①候}ノ仕業相濟候ハ、早速可差揚候、乍然御当用ノ分ニテ
モ調申付置、心得別^{①以後}テノ御不勝手ニ成候儀ハ格別候、
其外不差当儀共ヲ申付、弁々ト召仕置候儀ハ可為無用
候、諸職人・人足類召仕候程ノ御役所ノ儀ハ惣テ右ノ
格可相心得候、

附、諸^①所へ荷物運又ハ仕人足・草取類ニ付人足入^{①特}
用ノ費ハ受込ノ座々ニテ遂吟味、余計無之様人足賦^{①節}

可致候、

一山奉行方ヨリ取下シ申付候諸材木取下シ銀出方太分ノ
儀ハ、賦方ノ致様ニヨリ取下シ銀モ可相減儀ニ候、此
段ハ別テ出方ノ減儀候条、委可遂吟味候、^{①被}

一諸座入用ノ筆紙墨類ノ輕品迄モ徒ノ費無之様可被附氣
候、支配頭へ差出候書付又ハ諸座互ノ引合ニ付テノ書
付ハ内輪ノ事候処、少シ書違墨付等有之候ハ、書改候
故、筆^①者之隙取△筆紙墨ノ費候条、少々ノ儀ハ消コ
サキ^{①候}杯致シテモ御用サへ相達候へハ不苦候間、其儘ニ
テ可相濟旨、先年申渡置候間、弥々其旨可被相守候、
帳留ノ内ニ頭ヲ留置相濟候分ハ其通可被申付候、左候
へハ連々筆紙墨ノ入用モ相減宜管候条、可被得其意候、
一御表方・異国座・御勝手其外ヨリ証文等ヲ以申渡為有
之儀ニテモ、外ニ申付様ニヨリ御物入相減候見込モ候
ハ、幾度モ無遠慮其趣可被申出候、
右、申渡候^{①被}太概ノ儀ハ、此外ハ右ニ準シ雖為少事減
少方ノ儀随分可被致吟味候、何レノ節^{①筋}ニモ御払ノ内減
立、其余勢ニテ御統方不被補候テ不叶事候へハ、面々

受込ノ内少々ニテモ不相減候テハ分テ申渡詮モ無之、
第一御統方可被統様モ無之儀候条、聊無大形可被致其
沙汰ハ勿論、自分支配外ノ儀ニテモ何ソ減方存寄有之
候ハ、少々ニテモ不及遠慮見込ノ趣申出候様可被相心
得者也、

享保九年辰八月十五日

御勝手方

取次
鎌田六郎太夫

九〇一

一文銀一匁、錢ニテモ、人別一人分

右同二匁、右同、牛馬出銀一匹分

同一匁、右同、大小船・橋(橋船カ)・川平太迄出銀帆一反分

右出銀被仰渡、来月二十日限金蔵へ上納ノ管候、

延享三年寅二月

九〇二

一今度御儉約シラへニ付、郷原轉(久雄)江戸へ被差越、減方被

仰付旨被仰渡、

延享三年寅五月二十五日

九〇三

一役料米二十俵取二十九俵ノワリ候、其外五部減ニテ可
被下旨被仰渡、

延享三年寅六月二十四日

九〇四

一文銀五分、一人分、錢ニテモ

但、無高之面々并末々迄人別出銀、

同一匁、牛馬一匹分、錢ニテモ

同五分、大小船并橋舟・川平太迄帆一反分、錢ニテモ

但、右同断ニテ面々所持ノ牛馬并船出銀、

右之通来卯年ヨリ午年迄四ヶ年出銀被仰付候、

一御役料役料銀米・御切米・御扶持米・支度料銀・苦勞

銀・田舎行御扶持米・駄賃銀・日雇賃・船賃銀其外銀

錢米ノ御払銀ハ、百目ニ付五匁、米ハ一石ニ付五升ツ、

引方被仰付候、右外引方ノ儀被仰渡、

延享三年寅六月二十九日

九〇五

(九〇三号行開朱書)
一重出米出銀被仰付置候へ共、末々差迫候由相聞得、今年ヨリ重出米出銀被返^{①下}候旨被仰渡、

延享四卯十二月

九〇六

一御手伝ニ付、人別一匁出銀并諸御払方、米ハ一升五合、銀ハ一匁五分引方被仰渡候、

宝曆四戌三月九日

但、宝曆四戌正月、濃州・勢州・尾州川々御手伝被^{①付}仰出候間、惣奉行平田鞆負殿、副奉行伊集院十藏被^{①兼}仰付候、

九〇七

(九〇六号行開朱書)
一去ル巳年已来諸払方、銀ハ百目^{①ニ}付一匁五分、米ハ一石ニ付一升五合ツ、引方申渡置候へ共、右引方差止候、

御役料役料米・御切米其外^{①右体}ノ上下方ハ当八月朔日ヨ

リ引方ニ不及、時々ノ払方ハ今日ヨリ無引方ニ被仰^{①候}付、

宝曆五亥九月朔日

九〇八

一銀五分、一人分

但、無高ノ面々末々迄人別出銀、

同一匁、牛馬一匹分

同五分、大小船・橋船・川平太迄帆一反分

高一石ニ付米二斗^{①并}

但、真赤半分ツ、

右ノ通出銀并重出米被仰渡、

宝曆十一巳十月二十三日

九〇九

一銀五分、一人分

同四匁、二十三反帆ヨリ八反帆迄帆一反分

同二匁五分、七反帆ヨリ五枚帆迄帆一反分

同一匁、四枚帆以下橋船・川平太迄帆一反分

同五分、牛馬一匹

右、当酉ノ年ヨリ三四ケ年ノ間出銀被仰付、^{①旨}明和二

酉十月二十八日被仰渡、

九一〇

一高一石ニ付米一升五合ツ、真赤半分

右、上方表御借銀及太分御手迫ノ故、当秋ヨリ三四年

ノ間重出米被仰渡、

明和五子七月

九一一

一御所帯向御難渋、御勤向等モ難御調程ノ御勢ニ成立

候間、我々御前へ被召出、御直ニ御趣意ノ趣奉承

知候、御古代様御振合ヲ以万端取縮致吟味候様御

内沙汰有之候間、諸御役場其考ヲ以、^{①御}当規定ナト存

合、差扣候テハ却テ不本意ノ筈候間、右様ノ御趣意

ヲ奉汲受、向々無遠慮御取縮ノ吟味早々可申出候、

右之趣表方へ致通達、奥掛・御勝手方へ可相達候、

文化五年辰正月二十七日

^{①島津久泰} 将監
^{①頼廷久裔} 信濃
^{①鎌田政興} 典膳
^{①秩父手保} 伊賀

九一二

一先年依御願御米金御拝借被仰付、御返上御年限中去ル

末年ヨリ十ケ年 公辺御役人方ノ内、^{①御}贈物御減少等ノ

儀御届被 仰出、^{①置}去辰年迄年限満候付、当年ヨリ御

贈物有之筈候処、其後御領内凶年大災殃其外莫大^{①之}御

入用屯候折柄、去年琉球人参府ニ付御助勢ノ御手代無^{①段}

之、依御願御米金御拝借被仰付、右返上年限中御贈物

是迄ノ通ニテ、年限明候節ヨリ以前ノ通被成候御心得

ノ旨、御用番様へ御届被仰出候処、当年ヨリ三ケ年は

迄ノ通、申年ヨリ以前ノ通御贈物有之候様被仰渡候処、^{①段}

申来候、此旨可承向へ可申渡候、

寛政九巳二月

(伊勢貞矩) 播磨

九二三

中納言様御代御問合ノ内

一從 黃門様為御使吉田次郎兵衛殿被罷下候間、一書令

啓候、

一一昨十八日 御参内御座候付、薩州様初テ 禁中へ被

成御参目出度奉存候、明二十一日、近日又大坂へ御出

ノ由候、如此候ハ、臆テ御隙明、可為 還御トノ取沙

汰候事、

一於其元被成御談合、御借銀御返弁ノ儀ニ候、諸士上知

行ノ儀御国へ被仰遣候、其御返事渋谷四郎左衛門殿・

児玉筑後守殿被罷登候テ被申上候、於御国モ皆々談合

被申、重々被申上候内ニ、夫婦ニテ在江戸ノ衆御賦方

ニ銀子入申候間、先此節々町田駿河守殿・我等兩人へ

從最前御供申候間、此分ニテ被差置、其後被召寄候衆

ハ女房婦国被仰付、尤ノ由候間、達 上聞候処、諸事

改儀候間、ケ様ニ可有之旨被仰出候、委細ハ御国へ被

仰遣候条書帳面有之儀候付、以其趣一々可被仰達候、

誠ニ此節ハ腰之刀ヲ御沽却ニテ成共御用可被在時節候

間、如何ニ候テ堪忍、尤ノ由可被仰渡候、鹿兒嶋表

へモ知行上候上ニ刀ニ付置候金具ヲハッシ可致進上候

由被申上候衆書立ニテ参候、一段被成御感事候、下々

少シタクワへ其衆モ成次第少々ツ、成共銀子借上可申

由内々申ノ由候、誠ニ御普代ノ御国ニテ候故如此候

儀感入候、少モ迷惑候事ニテ無之由候、奇特成トノ申

事候、

一御借銀ハ八千貫目余成候、上知行ニテモ漸利御ナシ候

テ、少本銀御ナシ候ヤウナル算用ニ付、心安夜ヲモ寝

可申ニ而無之候、諸事礮氣ヲ替候間、此中朝夕汁ヲ添

ヲ塩ニテタへ候程ノ心持ニテ無之候ハ、調候間鋪ト

存候、能々其元ノ衆へモ如此心持可被仰達候、恐惶謹

言、

七月二十日

鎌田出雲守様へ

伊勢兵部少輔貞昌

人々御中

一此節御用金ノ儀被為蒙 仰候ニ付テハ別紙ヲ以申渡通候間、少事連モ御費無之様於向々可遂吟味候、御附届等ハ 公辺御役々方ハ格別、其外ハ表向御内輪共ニ御減少無之候テハ外々ヘモ不相並候間、御留主居御使番申談、何篇致作略候様取調可申候、

一神社仏閣御備物、 御代参・御法事・御祭礼等ハ是迄ノ通被仰付候、 思召ノ社務寺僧等へ被進物・被下物等ハ外々御附届ニ可準候、御法事・御祭礼ニ付、御賄^⑨ニテ御渡方ノ内、差知候御不益候儀モ取調可申出候、
 一御規式事ハ格別ニテ候へ共、御太粧ニモ及候儀ハ、仮ハ白木具ノ所ハ塗具ニテ差上、御旧式ヲ不取失様可仕候、

一先年ハ御儉約ノ節被及御断候寺社家ヨリ色々申立差上物^⑩ニ無御抛御請用ノ上御返被下儀モ有之、少事連モ御規定ノ破レニモ相成候間、^⑪訳合申上、差上候儀共取次申間敷候、 以下略、

一御能方動向ノ面々五石取以上ノ人役料米減少被仰付候、
 一高原ノ神徳院へ御扶持米十石被下置候処、当分出来高等有之候ニ付、此節ヨリ不被下候、

一江戸・京・大坂詰人数、当分勤居候面々ヨリ都テ二年詰被仰付候、併、御家老御役・御側廻ノ人ハ詰ノ長短無御構御見合ヲ以可被仰付候、

一溜池并三田詰ノ面々モ二年詰被仰付候、

一御普請方蔵役人・進物蔵役人・台所役人ノ儀ハ二年詰ニテハ勘定方差支ヘモ相成候間、一年詰被仰付候、

一江戸・京・伏見・大坂詰ノ内、^⑫当地方二年詰一年半又ハ一年詰被仰付置候面々、都テ二年詰ニ被仰付、其内依人御見合ヲ以詰重又ハ半詰相御シ等ニテ交代可被仰付儀ハ今迄ノ通ニテ、惣体押並候筋右ノ通被仰付候、
 一当時至極ノ御手迫故、江戸御勘定所引取被仰付候、左候テ、御勘定方等ノ儀被仰渡、

外ヶ条略、

安永四年未九月

九一五

- 一 諸御役所栖居替・造次等可成様申出間敷候、又ハ竹文箱・醬麩・竹筒、於諸向紛失無之様人々可心掛候、灰吹・柄杓等ハ目印ノ焼印致置、引替可相渡事、
- 一 御納戸・御兵具方・御広敷・御厩一身ノ者共江戸交代ノ節、船中賄方入用ノ平鍋口切桶借物不申付候、
- 一 砂糖会所蔵入札払代錢ニ相掛リ四部口錢ノ内、諸雜用相払候殘四部一小牟田周蔵へ被下來候へ共、一往四部一ノ半分ハ四部三ニ取加、御物分ニ申付候、
- 一 諸節句并御前御用ノ調物、塗物塗直物等モ輕メニテ可相濟候、
- 一 御寺方障子張替等ノ事、
- 一 稽古能ノ節入用ノ作本、形計ニテ可相濟事、
- 一 右同断、仕手脇狂言役等へ応度教被渡候、足袋、是迄三度ニ一足相渡候へハ六度ニ一足、四度ニ一足相渡候ハ、八度ニ一足相渡候様申付候、

一米砂糖御仕登、上乘三人ツ、被遣候へ共、二人ツ、可被遣候、

- 一 櫛方檢者、春秋日数九十日ツ、夏勤ハ五十日、一櫛実秋見掛ノ儀差止申付、夏勤ノ節所掛役ニ立会、大底ノ致見掛、年々郡方へ為申出来由候ニ付、弥其通申付置、定式櫛方檢者ノ儀モ楮見掛且改方、櫛伐垂方へ時節見合差越置、專取納時分被相遣候節檢者助八十四人可差越候間、右檢者助ノ儀ハ日数五十日ニ相仕廻候様可申渡候、尤、其内相仕廻候者ハ時々其届可申出候、勿論郷村受持ハ相並候様於郡方可致吟味候、
- 一 田地方檢者、春普請ノ多少年々相替由候付、兼務等ニテ多郷受込、檢者相減候様可致吟味候、
- 一 田地仕付・草取・水廻檢者、定式七十一人ニテ諸郷割合相並候様可致候、取納究・溝下見掛檢者ノ儀、可成程郷教受込、日数モ減少ノ方致出精相勤候様可申渡候、
- 一 諸郷ヨリ万調物申渡候節、遠方へ不相掛様申渡、御加勢、夫立又ハ御買入人足等ニ至リ、諸郷へ相掛候儀親疎無之、迷惑ニ不相成候様可申渡候、

一御勝手方触番五人ノ内一人減、高奉行所三人ノ内一人

減、御勘定所右同八人ノ内二人右同断、郡方右同三人

ノ内一人右同断、

右ノ通、当時別テノ御差迫ニ付減方等被仰渡候間、御

出方ニ相成候儀ハ致吟味可申出候、

天明八年申八月

(二階奉行且)
主計
(関山金庫)
札

九一六

明和五年子

一今度稠敷御儉約ニ付、先達テ被 仰出候御書付ノ内、

万端御事ヲ被為欠^①ニテ、人々何ノ格式モ無構、御

出方ニサヘ成候ヘハ宜事ノ而已自然心得違ニテハ、ヲ

ノツカラ心底モ邪ニ相成、若耽利欲、風俗モ取乱候様

ニ成立候テモ、甚 御思召ニ不相叶候、此節ノ儀、第

一驕費等無之様ニト被思召儀ニ候ヘハ、每物随分作略

可有之事候ヘ共、格式有之儀ハ可成様不取放様ニ致吟

味、又ハ末々及困窮儀共ニ専心付、其上ニテ何篇致減

少、兎角風儀^①宜筋ノ御儉約ニ被仰付候、

右ノ通被仰出候条、右ノ心得ヲ以、取違無之様ニ猶細

蜜ニ遂吟味候様ニ、御役人^②可申渡候、

子八月

(權山久智)
左京
(斐刈美登)
藤馬
取次
(久連)
島津登

九一七

一此節御儉約^①候付、当年ヨリ七ケ年ノ内、年頭其外年中

御規式ノ儀、延享五辰年以來被減置候通被仰付候条、

少事逆モ無御費様相心得、椀飯御飾其外御規式ニ付被

用來候品ノ内、差当難調類ハ至其節似寄ノ品替ヲ以被

相済管候間、品相替候節モ時々^②可被得差図候、

右ノ通被仰付儀ニ^③候ヘ共、猶又氣ヲ付、存寄儀共都

テ向々ヨリ御儉約御用係方ヘ可得差図候、此旨可承向々

ヘ可申渡候、

八月

(小松清番)
帯刀
(河野通古)
外記

明和五子八月廿三日

九一八(の1)

明和九年辰

口達ノ覚

一先年已来、御益筋ニ相成^{①候}儀ハ可申出旨被仰出趣有之、御家老中折角遂吟味事候へ共、格別詮立程ノ儀モ不相見得、当時セリ詰候上ニテハ候へ共、於諸御役座モ猶又尽吟味、依事テハ先例ヲ以致来候儀モ仕向ヲ替^{本ノマ、}又ハ以前ヨリ御免無之儀ニテモ御益ニ相成儀ハ吟味次第被仰付様モ可有之候、左候へハ江戸御普請御取細有之候様、何ゾ仕向ヲ替候体ノ儀ニテハ有之間敷哉、違仕向存付候テモ先キ^①ノ行届程合難計不申出得事モ可有之候へ共、左様ノ儀モ候ハ、不差扣可申出候、惣テ右ノ心得ヲ以、諸御役々細蜜ニ遂吟味^{②可然}見立ハ勿論、少事迎モ御益筋ニ可相成儀ハ可被申出候、左候ハ、御吟味ノ上何分ニモ可被仰付候、

五月

(九一八の2)

右之通辰五月二十三日迫水善左衛門殿へ口達ヲ以承知、^{①ナシ}

御船奉行

相良四郎兵衛

九一九

写

一明和五子年ヨリ七ケ年内稠敷御儉約被 仰出置候処、当年迄年限管合候、然共今以御世帯向立直候廉モ不相見得候ニ付、又々来未年ヨリ先キ七ケ年 公辺御勤事ノ外稠敷御儉約被仰付候間、都テノ儀、去ル子年委曲被 仰出置候通相心得致首尾、猶又此節ハ一涯細蜜ニ遂吟味、御世帯方相直候様於向々随分出精可致候、一年頭御礼ノ儀ハ格別成御大礼ノ訳ヲ以、来年頭ヨリ七ケ年内迎モ御礼ノ式迄ヲ可被遊御請候、御規式向ニ付入用ノ具モ、仮へハ白木ヲ塗ニテ相用、只御格式不欠様相心得、万事御費筋無之様可致首尾候、且年限内、熨斗目着用無用被仰付置候面々、年頭三ケ日ハ熨斗目

着用仕候様被仰付候、

右ノ通、又々七ヶ年御儉約被 仰出候条、都テ当分ノ
通相心得、猶又少事迎モ細蜜ニ尽吟味、一涯其詮相見
へ候様可致出精候、此旨表方へ致通達、御側方・御勝
手方へモ写ヲ以可相達候、

安永三年十二月四日

(島津久雄)

仲次

小笠原郷左衛門

九二〇(91)

明和五子御儉約^{②(三付)}

一御所帯向別テ御差迫ニ付、当年ヨリ先キ七ヶ年稠敷御
儉約被仰付候間、左ノ通被 仰出候、

一御常調御膳一汁二菜差上来候得共、一汁一菜ニテ差上、
何ソ御出来物等有之節ハ見合相重差上候様、先達被仰
付置候間、年頭其外屹ト立候節ハ相調可申上候、

一撰米被 召上来候へ共、以来撰米ハ被 召上間敷候、
御奥ノ儀モ同前被仰付候、

一当分御箸ノ儀、乍少事御費ニ候間、已来ハ塗御箸相調、

相損候迄ハ其御箸ヲ以可差上候、何ソ白木御箸差上砌
ハ随分鹿相ノ御箸可差上候、

但、白木^{②(御箸)}ノ儀ハ致吟味可申出候、御客ノ節迎モ当

分ヨリ位劣ニテ宜筭候間、御成行御相応可致吟味候、
一御常調御肴御野菜類モ御余計ニ不取入、其外御末廻リ
随分御費無之様可仕候、

一於伏見・大坂、何ソ御買入物モ候ハ、申談、無御費様
可仕様^{②(候)}、御道中用ノ御菓子等モ御当用不差支迄ニ致用
意、御酒ナトハ猶以不被召上事候間、御余計曾テ無用
候、惣テ^{②(御)}取入モノ減少候様、折角氣ヲ可付候、

一毎日御菓子取入置ニ不及、被 召上候節計可取入候、
一江戸・御国元・御旅中共、酒杯御次へ被下候事毎日規
模ノ様差出ニ不及候、御沙汰ノ節計ト可相心得候、其
節モ於御前可被下候、屹ト御祝儀事等ニテ被下候節ハ
格別、平生御近習番所ニテ御酒被下候儀ハ用可仕候、
一於江戸御客ノ節、御馳走ノ次第ハ有来通可有之候、乍
然、此跡二汁六菜ノ御料理ハ二汁五菜、二汁五菜ハ二
汁三菜^{②(杯ト)}、タシ、御菓子・御吸物・御取肴等モ細々

氣ヲ付、每物少シツ、ハ相減、品位相劣候筋ノ心得ニ可仕候、イツレ御成行御相応ニサヘ有之候ヘハ宜筈候間、当分迄ノ儀無之候テモ相濟賦ニ候、夫共御客ノ依趣御程合可有之事候条、時々勘弁可仕候、

一 右同断ノ節、差テ御心入ニモ不成、不目立品ニ高直成

物抔取入候儀モ可有之事候、專御納戸奉行引受、左様成ニモ氣ヲ付、支配下ヘ得ト申合、御包丁人頭初、御

末廻ノ者共、ケ様御差迫リ被遊、御不自由候御事ト奉

承知候ハ、只今迄モ其心得ノ筈ニハ候ヘ共、弥以何

歎ト無御費様心掛、少迎モ氣ヲ付事候、左候ヘハ、

格別御物入薄キ方ニモ可相成儀候、

一 御掛合御菓子等迄モ、当分ノ様無之候テモ可相濟候、

御並様方御見廻被遊、御覽候処ニ、脇々ニテハ此、御

方様ノ様ニハ無之、鹿相ノ方ニ候間、吟味可仕候、

右十ヶ条、御納戸奉行ヘ申渡、其外可承御役々ヘ可申

渡候、

一 御召物、御内輪ニテハ紬・木綿類迄ヲ可被為召候間、

其考ヲ以御用意可仕候、其外夫ニ準シ、御召物御上

下等、御夜物ニ至リ、芭蕉上布類其外御藏御在合ノ品

見合、無御費様ニ可仕候、惣テ右ノ心得ニテ可致吟味

候、御公界向々可為有来通候、乍然是モ当分迄ノ様無

之候テモ相濟儀モ可有之事候、御成合御相応ニサヘ有

之候ハ、相濟賦ニ候間、其程合致吟味、少ツ、ニテ

モ御物入薄キ方ニ可相心得候、左候テ随分御アカ付、

又ハ何ソ難被為召罷成候節、御下リニ可仕候、可成程

ハ被為、召候様ニ可心得候、右ノ通御下ニ相成節屯

置、拝領ニモ可被仰付候、差テ御古ヒモ無之候ヲ早々

拝領ナトイタシ候、無用可仕候、

一 御足袋、御公界・御不断ト二通位ヲ分ケ差上事候ヘ共、

向後ハ当分御不断召ヲ、御公界ニモ差上、二通ノ用意

無用可仕候、毎日召替差上候ニモ不及、古ヒ候迄可差

上候、

一 御下帯モ毎々取替ニ不及候間、見合取替可差上候、其

外右ニ準シ、随分無費様可氣付候、

右三ヶ条、御小納戸役ヘ申渡、其外可承御役々ヘ可申

渡候、

一 御公界御召物地合中位被仰付候、御不断 御公界召ヲ段々ニ追送ニ被遊候へ共御費無之筈候、夏 御召ノ儀モ右ニ可準、当分迄ハ 御召物過分ニ調方モ有之候へ共、以来ハ半減、又ハ其内ニテモ可成程相濟候様致吟味可申上候、

一 御手拭・御扇子・御鼻紙等モ当分御用被遊候ヨリハ位劣候テモ不苦候間、程合致吟味可申上候、

一 御湯カタ白地計ニテ候へ共、以後ハ御勝手御筋ニテハ染池ニテモ取交差上、尤、当分ヨリ地合劣候筋ニ吟味可仕候、

一 細上布類注文ニテ琉球へ申渡候儀ハ無用被仰付候、出来合ノ内ヨリ可差上候、

一 御召物京都調被仰付来候へ共、江戸呉服所ニテ御勝手ノ品ハ江戸調可被仰付候、尤、御勝手筋ニテ京都調ノ品モ候ハ、当分ヨリ位劣被仰付候、是又致吟味可申上候、

一 御到来ノ諸反物其外不依何色、御出来物有之候節ハ夫々ニテ可被相濟候間、見合可差上候、

一 御納戸^{①并} 御小納戸御先^{①高} 御後荷ニ遣候御荷物、江戸・御国元共置付候テモ不損品ハ置付可仕候、御当用計持越候様ニ可仕候、

右七ヶ条、御納戸奉行・御小納戸役へ申渡、其外可承役々へ可申渡候、

一 表方諸御荷物等モ右之通相心得、少ニテモ減少候様ニ可致吟味候、

一 御旅中為御用諸御野菜干物類杯御国元ヨリ過分持越ニ不及、御船繫へ於諸所御買入ニテ御勝手ノ品モ可有之候、人夫等ノ費等モ計、右ノ心得ニモ可致吟味候、

右二ヶ条、可承御役々へ可申渡候、

一 御不断ノ御手拭、間モナク召替候ニモ不及候、少々取落候テモ水ニテ清メ候へ共相濟事候、其外穢敷モ無之

品ハ右ニ準シ可相心得候、

一刻御多葉粉、双方ノ切ハシ多、中計差上事候へ共、不及其儀候、末々ニテ用候多葉粉同前ニ相心得、切ハシ

多費ニ不成様ニ可仕候、

一 多葉粉・御茶其外取入物ノ節、沢山取入間敷候、御

用分迄ヲ取入、無之候テモ相濟程ノ物ハ兎ヤ角ニテ御用相弁候様可心得候、

但、江戸・御国元・御旅中共ニ其心得可仕候、

一 御煎茶モ時々煎替差上候ニ不及様、アラタメ替又ハ二番センシ迄モ可差上候、其外右ニ準シ御費無之様相心得、於伏見・大坂、御多葉粉又ハ何ゾ御買入モノ等有之候節ハ可成程氣ヲ可付候、

一 御道中御茶道方御道具 御昼休ニモ繰越ニテ差越候へ共、以来ハ御泊計繰越ニテ、御休へハ御④茶弁当ニテ可

被相濟候、御手水等モ御小休ノ通相心得候様可仕候、

一 御在府・御在国并御旅中辻モ、御灯方相減候様可仕候、每夜 御前御灯台、御平生ハ二ツ可差上候、御手燭一ツ、当分迄ハ御灯台同前ニ灯置候へ共、是ハ御立行ノ御用ノ間、不灯候テ御近辺へ差置、御用ノ節計時々々シ、直ニ消候様被仰付候、何ソニ付、御灯台多入候節モ此後ノ通出間敷候、可成程可相減候、御近習番所ハ猶④間以ノ事候、手燭一ツ置、御用ノ節計、時々相灯シ可消置候、

一 御行灯モ右ニ準シ候、方々ハ御座御廊下杯ハ当分④ハ無

不足様相見得申候間、吟味ノ上減少可仕候、依御座御

行灯無之候テ相濟所モ可有之候、御廊下モ相減宜所モ

可有之候、イツレ 御通筋御廊下杯モ明リノ不統候テ

モ不締ニサへ無之候へハ相濟事候、又宵ノ内灯候テ油

次足ニ不及、御夜詰引ケ候節消候テ宜所モ可有之候、

左様成事ニモ委敷可致吟味候、

右七ヶ条、御茶道頭へ申渡、其外可承御役々へ可申渡

候、

右之通被 仰出④候、御費無之様ニトノ儀ハ先年以来度々

御沙汰モ有之事候へ共、如何相心得候哉、兎角其通無

之候、左様不最通事ニテハ別テ如何ノ旨 御沙汰ニテ、

此節ノ儀ハ屹ト詮相立候様随分逐吟味、依事④てハ時々

御側御用人・御近習役へモ可申談候、其外右ヶ条ニ準

シ無御費様可致吟味候、就中於伏見・大坂、御買入物

等跡々 御上下ノ節ヨリ格別相減候筋仕候様、可申渡

旨被 仰出候、

但、右之通被仰出候儀、御側御用人・御近習役へモ

奉承知、万端申談、無御費様氣ヲ付、御側廻ニモ存

寄時々不差置申聞候様可申渡候間、是又被 仰出候、

四月

(九二〇の?)

右之通被仰出、於江戸申渡相済候様申来候間、御減方

致吟味申出候様、御納戸奉行・御小納戸役・御茶道頭

へ申渡、其外可承御役々へ^{①可}申渡候、

五月

(榊山久智)
左京

(兼刈実詮)
藤馬

(久進)
島津登

九二一

宝曆十二午御儉約ニ付

一御所帯方太分ノ御不足有之、出方不相見得御手迫ニ付、

当分ヨリ^{①年}五ヶ年御儉約被仰付段、先達テ申渡置候、其

節モ申渡候通、江戸御普請料為差当御入用候処ニ、上

方御借入難調候付、無是非、御仕上ノ内米一万石・黒

砂糖百万斤別格ニ差分ケ、御普請料御借入差出シ、銀

高ニ応シ右両品代ヲ以致本済^{①候}ノ御仕上物代都テ常御

続料ニ差当候テモ過分ノ御不足ニテ難被償候処ニ、両

品常御続料御不足相重管候、右ニ付テハ御儉約ノ御余

勢ヲ以被相統外一切出方無之候、大概当時ノ御入用半

分程モ不相減候テハ其詮無之管候、然トモ依品其通ニ

ハ減少難成、又一向難減モ可有之候、或ハ半分其余モ

相減、惣減モ有之、或品位ヲ輕メニ引替、御勝手ニ成

候モ可有之候、御修補台替・新台物・膳物等モ、御当

用決テ差支候儀ハ格別、可成程致延引付テ往々ノ出方

ニ不罷成候テモ此法ノ御余勢ニ相成管ノ事候間、右段々

ノ次第、得其意、折角氣ヲ付、細蜜ニ相調へ、来月十

日限可申出候、吟味ノ上何分ニモ可申渡候、

右、支配ノ奉行頭人へ可申渡候、

午六月二十一日

(川田國福)
伊織

小林中太兵衛

九二二

写

一御所帯方難被統段被 聞召上候、右ニ付テハ、御前ニ

モ万事不如意ニテ可被相濟候^①付、御費成儀ハ假令へ被仰出候儀迎モ無用捨何ケ度モ可申上候、依事^①テハ

都テ御存不被遊儀モ有之候条、御家老中申渡、每物細蜜吟味イタシ、往々御所帯向相直候様ニ可仕候、乍然

末々ノ者共致困窮候テモ御氣ノ毒ニ被 思召上候間、

御領内國中勞ニモ不相成、万端風儀宜、利勝無之様ニ

心掛、諸事可被計旨被 仰出候、

右ノ通被 仰出候条、奉承知、此度ノ御時節柄候条、

万事御為宜様ニ可心掛候、

未七月 宝曆十三末

(島津久光)

圖書

(島津久金)

左中

(菱刈東詮)

藤馬

(鎌田正芳)

藏人

(高橋權寿)

此面

九二三(の1)

文化元子十二月 公義

(御触書天保集成 五九〇〇号)

一御儉約ノ儀、当子年迄ノ御年限ニテ候処、今以御勝手

ノ御操合御充実ニ無之、其上諸家共多分勝手差支有之様子ニ相聞候付テ、此上猶又来ル未年迄七ヶ年ノ間、

是迄ノ通御儉約可被仰付旨ノ御沙汰候、 末略、右之趣可被相触候、

十二月

(九二三の2)

右之通、從 公義被仰渡候条、此旨相守候様、組中・

支配中へ不洩様可被申渡也、

但、諸郷へ七月番御用人ヨリ可申渡候、

正月十二日

御家老座印

九二四

文化二年丑

一去ル酉年ヨリ格別ノ御省略被 仰出置、何篇御取縮有

之候へ共、御産物高ニ不応御借金故、年^①御借重相成、御儉約年限モ当年迄答ニテ候へトモ、今以御立直ノ期

不相見得候付、来寅年ヨリ又々五ヶ年、是迄ノ通稠數

御儉約被仰付候条、少事タリトモ御費無之様、御役々

精々尽吟味、屹ト其詮相立候様可心掛旨被 仰出候、

右之通不洩様致通達、支配下有之面々ハ奉行頭人ヨリ

可申渡候、

丑十一月

(顯桂久喬)

信濃

(妻川東祐)

下総

(川田佐實)

伊織

(赤松則次)

市正

九二五

中将様御筆 (文化カ) 文政五年辰六月

一此節、江戸国元トモ何篇致下知候様、無抛承候趣有之、

難黙止、其意ニ応シ候処、第一所帯向極々難渋ノ時節

ニテ段々聞通趣モ有之、難差置急務ニ候故、乍省略中、

五ヶ年ノ間猶又稠敷取縮候儀致工面度、差当於爰元ハ

掛ノ者ヲモ申付、何篇取調へ申出候様、先達テ致沙汰

置候、然処、既ニ段々省略為有之上ノ事候へハ、一通

ノ取調へニテハ致作略度心付ノ儀ニテモ同前ノ差支ニ

テ、最早手ノ付様ハ無之ト等閑ニ相成候儀モ可有之候

へ共、前文通何篇用向聞届致下知候上ハ、イツレニモ

取縮候詮相見得、所帯向少々ニテモ立直リ候様無之候

テハ不相濟儀ニテ、是非詮立候様ニト、手元ヲ初、日

夜是ノミ致心勞事ニ候、依之、諸役々ニモ此旨ヲ汲受、

是迄ノ儉約筋トハ訳モ相替候儀ト相心得、実ニ一涯染

入、心頭ニ掛、急度逐吟味候様可致候、勿論右通取縮

向々事候へトモ、諸役場難儀ニモ可及儀ニテ氣ノ毒候

へトモ、今形ニテ差置候テハ不達弥増難渋ニ成立、其

節ハ諸人ノ難儀モ無申計事ユへ、兎角取縮無之候テ不

叶儀候間、深此旨ヲ可存候、乍然差当諸人迷惑ニモ相

成候儀ハ用捨可致候、畢竟所帯向立直リ、諸人モ身分

相応致渡世候様ニトノ本意候間、旁右之趣意不取違、

此涯無油断諸事取調へ、鎖細ノ儀迄モ行届、無延引申

出候様可取計候、乍此上万一不頓着ニテ打過キ向モ

有之候ハ、屹ト可及沙汰候条、右之趣諸御役場下役迄

モ致得心候様申渡、於国元モ右趣意ニ準シ取計有之候

様可申渡事、

六月

右ニ、御家老衆御連名ノ御添書、無別意ユヘ略之、

九二六

一御所帯方御難渋候間、先年以来御省略被仰付置候ヘト

モ、猶又当年ヨリ五ヶ年ノ間稠數御取縮被仰付旨被

仰出候間、其段ハ申渡置候通ニ候、右ニ付テハ當時御

儉約御用掛被仰付置候面々ハ勿論、掛リ外ノ面々ハ夫々

於御役場申談、御取縮向々儀トモ致吟味、無遲滞可申

出候、此旨向々ヘ可申渡候、

文化五年辰七月

(島津久恭)
將監

九二七

一大圓寺ヘ年々御米三百石ツ、被相渡事候処、此節分テ

御取縮被仰付候付、右三百石ノ内十五石ツ、年限中渡

方被相減候旨、申渡有之候段申来候条、可承向々ヘ可

申渡候、

辰九月

典膳

九二八

一御隠居様御事、亦々御介助等無^御抛御請合被為在候処、

當時御所帯方至極御難渋ノ砌候故、御省略中ナカラ猶

又年限ヲ以敵數御取縮向々儀^之追々被^仰出、於江戸表

モ夫々御役々被掛置、セリ詰候御吟味ニテ、最早一万

兩位ハ御出目モ相見ヘ、今一万両丈ケ^御御出目有之度、

尤、追々御老年ニモ被為成候ヘハ、是非ニ御取縮^御立、

少々ニテモ御所帯方御立直リノ儀現在^御御覽御安心被

遊度御含ニ候、右ニ付テモ面々致一和、人々一統心ヲ

合セ不申候テハ^御思召ニモ不被為叶、勿論先達^御御

介助候折トテ相替、此節ノ儀ハ江戸・御国元トモ御引

受被遊^御御下知御事候ヘハ、其詮不相見得候テハ^御太

守様ヘ被仰分モ無之御事候間、御趣意相通候ヲ致吟味、

此節御規定有之候儀、後返リ候儀トモ無之候様被思召

候トノ趣^御御沙汰被為在候段申来、誠厚思召ノ程一々

承知仕、何トモ御心痛儀儀奉恐入儀候、依之、御当地

御取縮向近々申渡儀ニ候ヘトモ、猶又御用掛被仰付置

候面々ハ勿論、掛外於^御役場等モ右^御御趣意ノ程奉汲

受、人々致一和、御取縮方屹ト取調ヘ申出、タトヘ他

御役場ノ儀迎モ御為筋ト心付候儀ハ其通差当、目立候

程ノ儀ニテ無之候トモ、御差繰候^{①ニ}モ可相成儀ハ互ニ

申合、少事タリ共不差置可申出候、末略、

右之通掛役々ヘ申渡、可承向々ヘモ可申渡候、

文化五年辰九月

(島津久泰)
将監
(鎌田致興)
典膳

九二九

写

一 近年御物入打統、御産物代ニテハ及御不足候様、上方

表銀部御借入ヲ以被相統、御難渋ノ御事ニ候ヘ共、

公辺ヘ相掛儀共ハ難被差欠、^{①殊}特来年御初入部、来々年

琉球人出府又ハ、上使御巡見等、大分ノ御物入差見得、

中略、其上此節京都大火、御屋敷迄モ御類焼ニ付、

是以則其辺ニテ難^{①被}差置、臨時ノ御物入莫太成御時節

ニ候処、最早上方表高部御借入銀ノ儀モ相調兼候趣追々

相聞得、至極ノ御難渋候、依之、不限大小事御費ノ儀

ハ勿論、是迄致来儀モ被差欠、可成ニ事済候程ノ儀、^{①体}

又ハ此涯差テ御出方不相見得候テモ以来ニ相掛御不益

筋ノ儀トモ、不依何篇於向々相シラヘ、ケ条書ヲ以早々

可申出候、其内同役中見込違ノ儀モ候ハ、面々ノ見込

通ヲ以申出、或ハ支配違ノ儀迎モ存寄ノ儀ハ少モ不差

置、屹ト取シラヘ当月中其届可申出候、尤、仮令御用

ノ御差支相成候儀ニテモ存寄候儀ハ細々尽吟味、少モ

無用捨可申出候、

右之通、大番頭以下奥表御勝手方御役人限、早々可申

渡候、

天明八申二月

(島津久邦)
和泉
(喜入久福)
安房
(菱刈隆昌)
大炊
(二階堂行且)
主計
(岡山金輝)
糺

九三〇

一

種子嶋^(久基)彈正殿

右ハ、御所帯方御不勝手^{②之上}ニ付、御領内凶年打統、御領

国中ノ者共及困窮候ニ付、往々致安堵候様ニ此節御俵

約調へ被仰付候ニ付、右ノ御用係彈正殿へ被仰付候、

一 堀甚左衛門^(與喜)

右ハ、御儉約^{①方}御用係彈正殿へ被仰付、甚左衛門儀、

右ノ御用係被仰付候、

右之通被仰付候間、御役人限承知仕候様、可致通達候、

以上、

享保十二年未七月

(權山久初)
主計

九三一(の1) (御触書覽保集成 一〇七六号)

一 前々ヨリ被 仰出候儉約ノ趣、弥堅可相守候、近年米

ノ価別テ下直ニ付、諸人致難儀候由相聞候付テ、今度

元禄十五年^{ナシ}年以来ノ^借金銀ノ儀、向後利分五分以下タ

ルヘキ候間、先達テ御触有之候事、

一 惣テ近年ノ風俗ニ随ヒ、衣服或ハ親族諸傍輩^類參会等ノ

節、料理又ハ御番ノ節弁当等ニ至迄、不得見事仕来^止

候品有之由^ニ候、右体ノ儀故支配^頭ノ向々ハ其頭支配^{有之面}

ヨリ心ヲ付可申事^ニ候、家作ノ儀モ火除ニ相成候様仕、

無益ノ儀仕間敷候、平生ノ身持随分質朴ニ仕、何分ニ

モ身上取統、御奉公勤候様相心得候儀、第一ノ事ニ候、

但、徒・若党衣類^服、布木綿類^{ナシ}取交可致着用候、

一家壁ノ用意、諸仕具等、分限ニ応シ輕ク可仕候、^尤前々

被 仰出候趣、是又堅可相守^候事、

右之通、万石以下へ相触候^間、為心得万石以上ノ面々

へ可有一覽候、

西十一月

(九三一の2)

別紙ノ通、從 公義以御廻状被仰渡候旨、江戸ヨリ申

来候、別御家中ノ儉約ヲ用候様ニトノ儀ハ兼テ被仰渡

置候条、猶以別紙写ノ趣拜見可仕置旨、不洩様ニ物通

達可致候、

享保十五年戊正月

(島津久純)
大藏

九三一

一 近年御所帯方難被統候ニ付、重出来^{①米}出銀為被仰付置事

候得共、御領國中至末々差迫候由被 聞召上候、依之、
此節猶又御所帶向嚴蜜ニ御儉約被仰付、旧式^{④之内}ヲモ可
被差欠候条、今年ヨリ右出米出銀ノ儀可被差免候、

右之通被仰出候付、重出米出銀今年ヨリ被返下候間、
与中・支配中・諸外城へ不洩様可被申渡旨、地頭・領
主・与頭・支配頭へ可申渡候、

延享四年卯十二月十八日

(島津久用)
左衛門

(標山久初)
主計

(島津久郷)
右平太

(郷原久雄)
轉

(鎌田政昌)
典膳

九三三

一 御役料銀米・御切米等其外諸職人賃取米、御物ヨリ代
払有之候分、去寅八月ヨリ午七月迄二十部一引方ニテ
相渡候様申渡置候へ共、今度重出米出銀御免ニテ右引
用ノ儀ハ^{④被}取成御免候、只今迄引置候分被返下候儀ハ首
尾方難届候間、此節ヨリ引無ニテ可相渡候、

右之通、御側方・御勝手方へ相達、与中・支配中・諸
外城へ可被申渡旨、地頭・領主・与頭・支配頭へ可被
申渡候、

延享四年卯十二月

左衛門

九三四

写

一 御所帶方難被為続、去ル末年ヨリ七ヶ年御儉約被仰付
置、一涯其詮相見得候様可致出精旨被仰渡置候処、去
年迄年教答合候へトモ、未御不如意ニ付、已後ノ儀モ
当年ノ通被仰付置候旨、旧臘申渡通ニ付、 中略、
就中去年ノ儀御物入相増候付、当寅年ヨリ先キ七ヶ年、
又々稠敷御儉約被仰付候条、年頭其他都テノ儀、是迄
ノ通相心得、其詮相立、御所帶方相直候様、於向々可
致出精候、

右之通、於江戸被 仰出候段、此節申来候、 末略、
天明二年寅正月

(島津久雄)
仲

九三五(の1)

文化六年巳、御儉約ニ付、ケ条ヲ以吟味被仰渡、高奉行吟味ノ内、

一持高応米持合候者ハ当座へ相知居候付、限月被相立御借入御仕登ノ後吟味仕候処、高頭者帳面ニ相知居候へトモ、所帯柄ノ善悪ハ高ノ高下ニモ不相拘、相応ノ高致所持者モ、内々ハ他借利分ノ方抔ニ差向候趣ノ訴訟書等何ソニ付追々相見得、タトへハ過米ハ右高二及ヒ候テモ右体ノ筋合ニモ有之候へハ抑モ難取計、尤過米ノ多少ハ高抱所ノ依遠近、蔵入直取納ノ致支繰候故、貧富ノ差別モ容易ニ難相知、且又直取納多相受取候向モ可有之候へトモ、給地米ハ大形二斗入ノ事候へハ、御仕登相成候儀モ如何可有御座哉、イツレ内々ノ儀迄ハ当座ヨリ難得届御座候、且、春秋両度御蔵米・給地米直成被相究、高料ニ売捌候者ハ科料被仰付筋ノ儀候ニ付テハ、第一商家へ相掛儀ニテ、米直段ノ依振合利潤不相見得節ハ売買差扣候儀モ可有之哉、少高ノ諸士其高所務迄ヲ見当ニテ家内介抱、後先キト繰合候

者モ可有之候間、右体ノ者ハ少々ノ儀進モ差クリニモ相掛可申事ニ御座候、当時諸士一統困窮ノ折柄ニテ、年々ノ出来総サへ大家小家共総日限前以追々稠敷及催促、乍漸相済候仕合ニテ、御借入又ハ直定等ノ儀何様可有御座哉、当座ヨリ取究難申上御座候、

一琉球御注文反物被相減、代米卸カへ御統米御仕登ニ被相向候、御吟味相シラへ申候処、御用反モノ類代米千石程諸人申受、三百石程ニ相及、右ノ分ハ御仕登被差向候ハ、御クリ合ハ可相成候へトモ、御前御用反物ヲ初、御付届其外年々無抛向々御注文ト相見得、勿論先上ノ直成モ下料ニ相付、諸人申受ノ儀モ夫々割増相掛事候故、去夏モ二十貫目、余之御注文ニ御払直成式拾三貫目余ニテ、三貫目△程ハ御益ニ相成、且先達テ直重ヲモ申上置候付テハ猶又相増可申、左候へハ御用反物類モ御費ニハ不相成賦ニ御座候、右反物ノ儀ハ専先嶋ヨリ織出、彼地米無他事場所ノ由御座候付、右ヲ以年貢同様相心得候向々有御座間敷哉、是迄年々仕来ノ事候処、及石高候程ノ御用布被相減、米ヲ以相調候様

被仰渡候ハ、琉球ノクリ合如何可有御座哉、去夏モ冠船ニ付二千石程モ代銀上納願出、当年ヨリハ重出米ヲモ半方大坂上納被仰付、兎角小地ノ事故、現米クリ登ハ余計ニ難相調向ニモ相見得^{①申}候間、前件申上候通、御用布類ノ儀ハ御不益ニモ相見得不申、旁是迄ノ通被召置度、尤、御用反物ノ儀ハ御注文ヲ以被仰渡事候付、当座ヨリ難取究御座候へ共、其内被差欠候テモ可宜品々ハ御吟味次第奉存候、

一 田舎旅御扶持米真赤米半分ツ、被成下儀ニ付吟味仕候処、先年真赤米半分ニテ赤米ノ儀ハ一部半重被成下候ニ御座候へ共、御当地勉ノ面々役料米^{①等}ハ真赤米ヲ以被成下儀ニテ、御国中ノ事故差テ差別モ有之間敷、諸士一統困窮ノ儀ナカラ、分テ御難波ノ折柄ニ御座候間、御年限中都テ真赤米半分ツ、被成下方ニモ可有御座哉、右之御払三ヶ年並三千九百石程ニテ、赤米千九百五十石ニ相及、モヘ方ノ儀ハ夫長ケノ赤米差支ハ無御座候へトモ、御物^{①方}年々赤米及不足、モヘ方ヨリモ精々致

入付事ニ御座候、然トモ夏ニ相成候テハ人足賃飯米迄モ真米ニ被成下儀ニ付、何レ不足合方ニ相見へ、右ノ御払^{①相}重候へハ、猶又クリ合津下等モ可被仰付儀ニ御座候間、御代官へモ吟味被仰渡度、尤、御当地御蔵々赤米払切ノ上ハ、直成替ヲ以真米被成下相当可仕候、末略、

一 琉球へ賀政通宝ト申通錢有之由ニテ、往々鑄錢被仰付儀^{①候}ニ付、当時^{①座}ニテハ出来・諸反物類又ハ返上物方首尾合致^{①取}扱事ニテ、右体ノ儀ハ取シラへ難相届御座候間、御勝手方ヨリ御吟味有御座儀ト奉存候、末略、

外ヶ条略ス、

高奉行
土師孫右衛門

已正月二十八日

外ニ諸向吟味略ス、

(九三五の?)

此節、吟味ノ通真赤米半分ツ、被成下、尤、赤米及払底^{①候}ノ節ハ直成替ヲ以真米相渡、其外モ吟味ノ通被仰付候条、如例可被仰渡旨、御差図ニテ候、以上、

已七月二十六日

①取次
西恰之助

御勝手方

(九三五の3)

右、表書之通如例可申渡候也、

巳七月二十八日

御勝手方印
取次
伊集院平

御儉約掛

御船奉行

高奉行

物奉行

御代官

九三六

一御隠居様當時何篇御下知ニ被為在候間、御所帯方極御^{①付}
難波ノ趣被^{②譯}聞召上、別テ御世話被遊精々御取縮被仰
付、既江戸表御統料ノ内一万兩ハ被相減候、此度猶又
大坂表ノ儀ニテ被聞召通候処、御産物料ニテハ江戸・
京・大坂御統料御利払等右分ノ及御不足、御仕登ノ品
相重候様被尽吟味事ニハ候へ共、深ク御吟味無之候テ

ハ急速詮立候程ノ御取計無之、此涯ノ御取凌方不相見

候、御領國中一統差迫候折柄ニテ、猶可及難儀事旨^{①ト}

御氣ノ毒被^②思召上候へトモ、不被得止事、当辰年ヨ

リ先キ五ヶ年一匁出銀被仰付候、牛馬ハ出銀不被相掛

候、且高一石ニ付五升重出米被仰付置候へトモ、右出

銀被仰付候間、御用捨被為在、二升ハ御免被仰付、当

辰年ヨリ先キ五ヶ年重出米被仰付候、

右之通、御隠居様被^③仰出候旨申来候条、御趣意

ノ程難有奉扱得、於諸向モ一涯儉約相用、少事逆モ費

筋ノ儀トモ無之様、兼テ掛心頭可令省略候、左候テ、

上納方ニ付テハ已前ノ振合通可得相心候、

此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

文化五辰九月

(島津久泰)
將監

(須賀久喬)
信濃

(島津久兼)
登

(鎌田政興)
典膳

御筆 文化五年辰十月

一此節無^①振合ニ付、政事向何篇致下知事候処、所帯向極難^②渋ニテ、江戸・京・大坂借銀増長致シ、利払其外用金は迄ノ産物料ニテハ余程不引足、大坂続金モ相滞、當時勉事モ調兼候程成立候段、細々聞通候、右之趣ニテハ今形召置候ハ、年々困窮、国家難相立成行、其上万一公私ニ付格段ノ入価ニ及候儀トモ致到来候節ハ必至ト差支、可取計手段モ無之儀案中ニテ、誠ニ大事ノ時節ニ候間、一日モ難差置、則ヨリ掛役々ヲモ申付諸向取縮、鎖細ノ事迄モ自身聞届減少申付、且、産物仕送り等ノ儀モ追々取調へ、国元へモ掛合、何篇手ヲ尽事候、右之通、乍隱居引受候儀不容易事ニテ、先年介助致シ候節トハ訳合モ相替、老年ノ儀兼テ其詮不相立成就不致候テハ老後ノ恥辱、何トモ残念ノ至候故、日夜是而已致心勞候、然処、江戸・国元共ニ是迄段々致省略候上ノ事候へハ、此節取縮ノ儀ハ至テセリ詰候事而已、其上賄料諸給金引方并一匄出銀迄モ申付、已前

ニテ引替、諸事不便利相成、諸人モ及迷惑、甚氣ノ毒

ニ候へトモ、一通ノ事ニテハ中々可詮立様無之、年々

衰微ニ及、國中ノ面々飢渴ノ難ヲ難遁相成候^③、必定ニ

テ、其節ニ至候テハ最早相救趣法モ有之間敷、兎角此

涯急ト不取扱候テハ不叶事候条、不得止事、前文通稱

敷取縮申付、年限中ニハ是非其詮相立、諸人へモ安堵

為致度念望ニテ尽精^④事候間、此旨ヲ得ト汲受、一往

ノ不如意ハ致堪忍、専国家ノ為ヲ相考、向々勤場等モ

可成丈差クリ、一統致和熱令精勉、末々迄モ心得違無

之様申渡、一通申渡分ニテハ得心致兼候モノモ可有之

候間、支配頭等ヨリ右之趣意親切ニ可申聞候、

右之趣、江戸国元并京大坂屋敷迄モ不洩様申渡、猶又

家老中ヨリ右ノ趣意ヲ以別^⑤委細ニ申渡、諸事行届候様可取計候、

家老中へ

(九三七の2)

一御所帯向極御難渋ニテ御借入金増長、御利払其外無御
抛御用金は迄ノ御産物料ニテハ余程及御不足、大坂御

統金モ相滞、当時御勉事モ御調兼被遊候程成立候段、

十月

(島津久盛)
將監

御隠居様細々被 聞召通、此上万一格段ノ御入働共被

(頼桂久藤)
信濃

及御到来候節ハ、御差支、御家ノ御危趣ニモ可相

(島津久兼)
登

掛、殊更 御老年様ナカラ何篇御引受ノ上、若其詮不

(鎌田政興)
典膳

相立候テハ御恥辱被 思召上候トノ御趣意、至我々何

トモ奉忍入次第二候、御取縮向^②儀ニ付テハ先達テヨ

御銀割

(島津久盛)
將監

リ追々被仰付、御年限中ニハ是非其詮相見得、諸人モ

安堵仕候様 御心ヲ被為尺候趣、旁御別紙ノ通被 仰

九三八

出、御深慮ノ程難有次第二候間、段々申渡置候通、掛

一当御在府十三ヶ月ニシテ江戸万端ノ諸御払金二万三千

御役々ハ勿論、於諸向モ一統致和熟、朝暮掛心頭、鎖

三百^④、兩余并不時御用金六千六百六十六兩余、兩月分

細ノ儀迄モ細蜜尽吟味、何レ^③モ近年中御所所向立直

ノ割前月中大坂ヨリ江戸へ一所ニ差上、其後ハ一ヶ月

リ、諸人モ身分相心致渡世候様成立 御安慮候様、精々

分ノ配当金無怠月々差上候様被仰付候旨、右ニ付、金

可相励候、此節於江戸表モ猶又御吟味ノ上、御役々等

子支配方等ノ儀トモ段々被仰渡、

迄モ減少被仰付、万端御事被為欠、一涯御作略向セリ

安永五年申三月

詰御取調有之事候間、厚 御趣意ノ程末々迄モ奉汲受、

九三九

毎物省略ヲ加へ、衣服又ハ無益ノ参会等ノ儀迄モ先年

一江戸表方万端御払、

已来申渡置候通、弥以堅可相守候、此旨無格へ申渡、

御在府中二千三百貫目、御在

國中二千貫目ニテ相濟候様、去亥春被 仰出置候処、

右御賦銀ニテハ及御不足ノ由候ヘトモ、是非^被 定置候

銀高ニテクリ合候様、右外段々被仰渡、

安永九子十二月

九四〇

一御参府涯、御老中并芙蓉ノ間御役人方不残西ノ丸御目

附衆迄、御太刀・金馬代被進候間、右利金二千兩余、

右御役方御代替ニテ同断年分右利金二三百兩ニ上リ候

由、

但、右利金一枚ニテ小判二十兩^余ノ段被仰渡、

天明六年六月

九四一

一今度被為蒙 仰候御上納金、員数二十万兩ニ御治定被

為在、当年ヨリ五万兩ツ、四ヶ年御割合ヲ以御上納ノ

筈候、此旨御役人御承知可仕旨被仰渡、

天明八申十月十一日

九四二

一御隠居御高五万石被差分候条、右ヲ以万端相濟候様、

掛御役々遂吟味、御費筋ノ儀トモ無之様可仕旨、被

仰出候段申来候条、此旨可承御役々へ申渡、御勝手方

へモ可相達候、

天明七未正月

(喜入久福)
安房
(宮之原通直)
主膳

九四三

一是迄 御部屋御入用向 御表ヨリ被成進来候分ハ、以

来御隠居御入用モ 御表ヨリ被成進候様可有之旨被

仰出候段被 仰渡、

天明七未正月

九四四

一金子千兩

右ハ、御所帯向御難波ニ付、 御隠居御方ヨリ年々右

ノ通表へ被差出候付、^間以来御統金一万四千兩ノ内ヨリ

千兩ツ、年々引結候趣被 仰出候旨被仰渡、 余文略
ス、

文化二年丑正月

(川田佐賢)
伊織
(高橋權次)
縫殿

差引当分 御隠居御方九千四十兩、

九四五

一雅姫様御統料千三百五十兩被定置候段被仰渡、
(重兼女)

寛政七年卯五月

(川上久致)
久馬

九四六

一当御在府十三ヶ月⑨にして江戸万端諸御払金二万三千三百四

兩余并不時御用金六千六百六十六兩余、兩月分ノ割前

月中大坂ヨリ江戸へ一所ニ差上、其後ハ一ヶ月分ノ配

当金無怠月々差上候様被仰付候、左候へハ、始終一ヶ

月分ハ浮ニ相成筋ニ候、勿論可成程為替金ヲ以御側御

用人宛ニテ差登由、於江戸右兩株ノ御金ハ御側御用人

支配ニテ、模合方并帖佐与方御賦銀ノ儀ハ是迄ノ通物

奉行受込ニ被仰付候、且又江戸ニテ急成御払金ハ其訳
時々向々ヨリ委細御側御用人方へ申出御金申請、不急

成御払ハ月末右同断申出、一ヶ月ツ、御払方屹ト無滞

相仕廻、其首尾細々申出置候ハ、翌月頭ニハ可被 聞

召上候、何レトモ一ヶ月分御配当ノ員数ニテ是非可被

相濟候、先右通当御在府中被仰付、御振合御見合、夫

ヨリ段々御省略可被仰付候、尤、前条金子向々へ配当

ノ員数ハ後達テ可申渡候、

右通、此節ヨリ新規御趣法被相替候条、御勝手方へ相

達、可承向⑨へ可申渡候、

安永五申三月

(山岡久澄)
市正

九四七

一大概ノ算数

一銀七万二千六百貫目⑨余

右、江戸・京・大坂御借入高、

一銀六千七百貫目余

右、江戸御在府・御在国ナラシニシテ一ヶ年分、

一同八百五十貫目余

右、御参勤・御下国ナラシニシテ一度分、

一同六百貫目余

右、大坂・京・江戸御借銀七万二千六百貫目余⑤相掛⑥

候利、七朱ナラシニシテ凡一ヶ年分、

一銀千貫目

右、京・大坂御常式其外万払見合、

合銀一万四千六百五十貫目余、

一同七千貫目余

右、御産物・御米・砂糖・生蠟代銀、

差引不足銀七千六百五十貫目余、

右ハ、御所帯方極々御差迫ニ付テ、格外ノ御省略被仰

付、夫々御役々モ被掛置、折角毎物御取縮被仰付儀候

得トモ、累年ノ屯ニ付、別紙通ノ御所帯振ニ候ヘハ、

今通ニテハ近年中御立直リノ期不相見得候、右ニ付テ

ハ外ニ御出方迎モ容易無之、イツレ極々御取細被仰付、

少々ニテモ諸御払方相減、御産物本⑦重候筋ニテ無之

候ヘハ御当難々被凌御振合候間、猶又掛御役々ハ専右

ノ御時節ニ基キ、⑧及遂吟味、タトヘ古来ヨリノ御規

定ニテモ及御出方候儀ハ依事可被相省候間、追々委曲

取調ヘ可被申出候、此旨掛御役人限可申渡候、

享和元西八月

(川上久致)
久馬

(川田佐實)
伊織

(高橋種次)
縫殿

(山田有徳)
伯耆

九四八

一物奉行所受持ニテ諸人御借付銀年々ノ他利銀夫々ノ御

続料又ハ御修補等ノ御手当外御銀計ハ、以来表方ヘ被

差出候様被仰付候、左候テ、年分夫々御宛行総立候以

後若余時御入料致到来候節ハ、差当ノ儀故、御物方御

取替ニテ相弁置、翌年差引可有之候、右通相成候ニ付

テハ、是迄致拜借居候向年々利銀無滞致上納候ヘハ当

分ノ通召置、且依訳名面替等申出候儀モ是迄ノ通ニ候、

一右通御余計銀表方ヘ被差出候筋相成候テハ、是迄拜借

返上方ニ付持高所務差引願申出候向モ段々有之由ニ付、

帖佐与御代官ヨリ年々所務代銀入付候株ノ混雜無之様、

仕向ノ儀ハ猶又致吟味、右所務代并利銀ノ儀モ壹円ニ

イタシ取扱候儀トモ、猶又無間違様可致候、

此旨物奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

文化六年巳四月

(頭姓久庵) 信濃

九四九

一御隠居御方 御高二万石

右御高ノ所務ニ応シ候金高、高輪御同様可被差上旨、

被 仰出候段申来候条、可承向々へ申渡、御勝手方へ

モ可相達候、

文化六年巳七月二十六日

(島津久兼) 登

九五〇

一去ル寅十二月六日 御部屋御方へ御高三万石御差分被

進、 御家督様御方ト無混雜様可取計旨被 仰出置候

付、右御高所務取計ノ儀左ノ通被仰付候、

一御差分高三万石所務ノ内九千二百石無運賃ニテ申請被

仰付、御礼銀御免年数内三百二十貫目上納被仰付候間、

右 礼銀并無運賃ニテ申受米石高二相掛ル大坂迄ノ運

賃代銀ニ相直御目録銀ニ被相円置候筋、去ル卯年御

納戸奉行申出趣有之、其通被仰付置、御目録銀ノ儀ハ

誠ニ御袖金ニテ訳モ相替、格別成儀追々御内輪御用金

モ無之候テハ不被為叶儀候処、未引結等不相済由候間、

先達テ被仰付置候通、急ト引結イタシ候様被仰付候条、

向々問合ノ上、時々取入金銀致両替、 御部屋御目録

銀ト可被差分置候、尤、卯年以来并後年共浮徳ニ相成分ハ

都テ御納戸へ入付右同断相円置、及金高ノ筋ハ銅御蔵

へ御入付、三万石方御余計銀ト相記、差分置候様被仰

付候、

一三万石御所務総、寅十二月ヨリ辰七月迄ハ別冊ノ通御

代官申出、表方并諸組取替等未御返銀引結無之由候間、

向々問合ノ上貫目ヲ限此涯急度致引結、余銀ハ御納戸

へ入付候様被仰付候、右通ニテ自然此涯御差支ノ儀モ

有之候ハ、掛リ御役々書付取替置、奥兼務ノ御家老

へ申出候上、御勝手方へ取次証文ヲ以相達、御勝手方

ヨリ証文ニテ掛ノ向々へハ被申渡置、至後年引結無混雜慥ニ有之候様被仰付候、已來共御取替銀御返銀無之分ハ右同断ノ取扱ニ被仰付候、

一 三万石御所務、八月ヨリ七月迄ノ諸差引イタシ、総相究、与々取替返銀等引結ノ儀共ハ是迄ノ通、掛御代官受持ニ被仰付、左候テ、江戸・京・大坂・御当地其外諸所ニテノ諸御払方、向々ヨリ書付取揃致差引候ニ付テハ、其年ノ十二月限ニハ諸差引相濟間敷候間、翌年二月限無延引総相究候様被仰付候、尤、八月ヨリ七月迄ノ総ニハ其秋申請御米代銀^㉞者難相込答候間、年々之御米代銀[△]追送、翌年ノ総ニ相立候様被仰付、御米等ノ代銀取替等書記、大坂御留守居ヨリ可成程差急キ、右月限前以御代官へ無間違差越候様被仰付候、勿論江戸・京・大坂・御当地諸向ニテ御部屋御方御払有之候、年々ノ御入用相究、御払方ノ書付不洩様随分差急キ相調、右月限前以無延引御代官へ可被申越候、左候テ、総相濟候上、掛御側御用人・御側役間へ差出、奥兼帯御家老へ遂披露候上、掛御納戸奉行へ可相渡候、尤、

表方其外へ御取替銀右仕切及何程候付、御返銀引結急度可相片付旨、其節ハ掛御役々受持ノ座々へモ可申渡候、

一 当分廻御余計銀ノ内、錢ニテ金蔵へ納居候モ有之由候間、都テ御納戸へ取入、金銀ノ間へ両替申付、銅御藏へ御^㉞付、三万石方御余計銀ト相記差分置候様被仰付候、然共、此涯表方其外御差支モ候ハ、是迄ノ通ニテ御取替ニ相成候分ハ時々掛御役々書付取替置候儀、前条ノ通被仰付候、将又已來ノ儀モ年々ノ御所務代銀本ニイタシ、年分御入料本払総相究、御余計銀ハ格別ニ可被取分置候へトモ、當時至テ御手迫ノ御時節、右御余計銀表方其外へ御取替ニ相成候へハ、夫長上方表^㉞御役人等モ可相減儀候故、先是迄ノ通被仰付置、御取替相成候分ハ時々掛御役々書付取替置、御部屋御方御入用ノ節ハ御不如意無之様、御返銀等御入付有之候様、随分嚴重ニ可取計置候、

一 三万石方へ相掛表方其外御取替等、何篇証文ヲ以申渡有之程ノ儀トモハ、掛御役々へ不洩様可申渡候、

一 三万石方入払ニ付テハ金蔵へ小座相立、先当分ノ通蔵

役人兼相勤候様申付候、^{⑨元}漸々入払等モ相模様候故、

随分無混雜様心掛出精可相勤候、

右ノ通被仰付候、中略、後年 御家督様御方ト混

雜無之様可心掛候、中略、此旨御勝手方へ相達、

掛御役々其外可承面々へ可申渡候、

天明六年午十二月

(島津久金)
伊賀

九五二

一 御目見・元服并御役々御礼、其外何ソニ付進上物料相

滯候付、去ル午年申渡置候通候処、頃日又々不納ノ人

モ有之由不可然儀候、目錄銀ノ儀ハ年々十二月限相円、

御納戸奉行ヨリ江戸へ申上筈候間、^{⑨付}先年申渡候通、進

上ノ目錄ニ夫々料物相添、奏者方ヨリ一列目錄并品料

一紙ニ相認、御納戸蔵役人へ引渡、以来右仕向無間違

様可取計旨向々へ申渡、尤、是迄不納銀此涯急ト上納

相濟候筋取計候様奏者番へ申渡、可承向へモ可申渡候、

天明七未九月

(二階堂行旦)
主計

九五二

一 物奉行受持ニテ諸人御借付銀年々ノ^{⑨元}利銀夫々ノ御統

料又ハ御修補等ノ御手当外御余計ハ、已来表方へ被差

出候様被仰付候、左候テ、年分夫々御宛行総立候以後、

若臨時御入料致到来候節ハ、差当ノ儀故、御物方御取

替ニテ相弁置、翌年差引可有之候、右通相成候付テハ、

是迄拜借イタン居候向年ノ利銀無滯致上納候向ハ当分

ノ通召置、且依訳ニ名面替等申出候儀モ是迄ノ通ニ候、

一 右ノ通、御余計銀表方へ被差出候筋相成候テハ、是迄

拜借返上方ニ付、持高所務差引願申出候向モ段々有之

由ニ付、帖佐与御代官ヨリ年々所務代銀入付ノ株ハ混

雜無之様、仕向ノ儀ハ猶又致吟味、所務并利銀ノ由モ

一円ニイタシ取扱候儀トモ、猶又無間違様可致候、

此旨物奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

文化六巳四月

(額姓久高)
信濃

(九四八号文書に同じ)

九五三

一 公辺御勉向并脇方表立候御送物等 高輪御同様、且又御藏物其外御返金物ノ儀ハヲノツカラ御返金可有之候、
一 御国元御納戸ノ儀ハ不被召立候、御買入物等ノ節ハ、御家督様御方御納戸奉行へ申越、調達ノ上於江戸御返金可有之候、

右之通 御隠居様御方被相究候段申来候条、此旨可承向へ可申渡候、

文化六年己七月

(島津久兼) 登

九五四

一 当时御省略中ニ付、御隠居様御方御高二万石所務代金ノ内、二千両ツ、思召ヲ以御年限中表方へ被差出候、

一 大御前様御方ノ儀モ 御隠居様御方ヨリ御引受ニテ、右同断御年限中 思召ヲ以御渡方二千五百両ツ、都テ表方へ被差出候、

右之通 御隠居様被 仰出、 太守様ヨリモ 思召ニ

被応候段申来候、此旨向々へ可申渡候、

文化六年己七月

(島津久兼) 将監

九五五

文化七年

一金八千六百六十八両

右ハ、御隠居様御方御高二万石ノ所務ニ応シ候金高、高輪御同様可差上旨、先達テ被 仰出置候へトモ、右御高御支分ニ不及、本行ノ通、大御隠居様御方同様ノ仕向ヲ以年々差上候様被 仰出候段申来候条、可承向々へ可申渡候、

文化七年七月

(島津久兼) 将監

御借金

九五六

①政 文化元年上使御意書

一 小判金八万千八百七十五兩程 江戸

一 同二十五万二千三百六十七兩程 京都

一 同五十二万六千三百三十一兩程 大坂

一 同四万六千七百三十一兩程 国中

合小判金九十万七千四百兩程

以上、

九五七

寛永十年上使御意書^(答カ)

一 合借銀一万二千九百十一貫目

但、本銀員数迄、元利ニテハ二万貫目余、

内、四千五十二貫三百四十七匁五分、

右ハ、利銀ノ内^{①ト}ニシテ漸々相払候処ニ、松平勝山様御

肝煎ヲ以、本銀ノ内^{②之} 払ニ相濟候故、本銀ノ内引除相

残銀返弁ニ相究候、

一 返弁銀八千八百五十八貫六百五十二匁五分

内、銀四千三百九十貫四百十二匁四分、丑年ヨリ午

年迄相濟分、

右之銀ヲ以返弁ノ首尾可申候、

一 銀四千四百六十八貫二百四十目一分

右、午年^{①迄}返弁払残懸リ、

九五八

宝永七年上使御意書^{①答}

一金子三十四万五千兩

内、二万七千九百兩 江戸

六万八千五百兩程 国許

十三万六千兩程 京都

十万千兩程 大坂

一万千五百兩程 長崎

九五九

寛延二年

一 御借銀高三万四千貫目

右、重年公御出府ノ節、御儉約ニ付^(平田正輔)鞆負殿ヨリ被仰渡

候間、御書付ノ内相見得候、

九六〇

文化四年分改、三ヶ所御借り入銀

一御借銀高百二十六万八千八百八両、銀ニシテ七万六千二百二十八貫四百八十目、

九六一

文化三年^{①寅年}、江戸御借銀増減総、江戸物奉行ヨリ問合、

一銀一万千八百八十貫目 御利下三部利

一銀千五百五十四貫目 置居三部利^{①四}

一同二百四十貫目 家賃御借入四部半利

一同三百六十貫目 右同四部半

一同十五貫八百九十目 大圓寺御寄附七部利

一同十八貫目 瑞聖寺同断七部利

一同三十貫目 雅姫様御方御払金御預老部利^{①私}

一同百八十貫目 有馬肥前守様御用^{①金}同断右同

一同百八十貫目 戊年御カリ入六部利

一同百八十貫目 右同七部利

一同^{①四}百二十貫目 子年御時借六部利

右一行、定式御続金ノ内統不足有之、大坂任頼御借入相成、大坂ヨリ返金続方有之筈御座候へトモ、今以繰合調不申候、

一同五貫二百八十目 瑞聖寺御寄附丑年御借入七部利
合銀一万五千六十三貫百七十目、金ニシテ二十五万五千二百兩余、

外ニ、

一銀百二十貫目 寅年御時借五部利

一銀二千四百七十二貫目 寅年御時借一割利

一同三貫五百六十二匁五分

大圓寺へ諸人附置候祠堂銀御預六部利
合銀二千五百九十五貫五百六十二匁五分、金ニシテ四万三千二百五十九兩余、

右、寅年新御借入、

元合銀一万七千六百五十八匁七分三厘二毛五、金ニシテ二十九万四千三百十二兩余、

内、六百三十貫目、金ニシテ一万五百兩、三部利、

御本入、

二百七十貫目、金ニシテ四千五百兩、御時借一割利、御本入、

合銀九百貫目、金ニシテ一万五千兩、

差引銀六百九十五貫五百六十二匁五分、金ニシテ二万八千二百五十九兩余、

右一行、寅年御本入、差引新御借入ノ方相重申候、

右ハ、去寅年中新御借入又ハ御本入差引、右ノ通御座候、以上、

卯

江戸物奉行

九六二

一享和二戌年、御側役岩下佐次右衛門・吟味役米良彦之

丞被差登、江戸上方并⑧共二部下へ被仰付候、

但、江戸ハ三朱利、京・大坂ハ二朱、

九六三

宝曆四年戊仰渡候内

一近年御所帯向難被相統、御借銀年々相増、当分四万貫

目余御統方極々御手迫罷成、江戸御統銀又ハ上方表御利払其外ノ御入料サへ不相調、以下略ス、

此度濃州・勢州・尾州川御普請御手伝被仰付候付、御

入用銀何程トハ究而不相知候ヘトモ、大概金子十四五万兩程モ御入用可有之候由、已下略ス、

宝曆四年戊二月

(藝聞久中) 相馬 (鎌田政昌) 典膳

九六四

一御所帯向難被統、此度格外ノ御省略ニ付、江戸・京・

大坂御借入銀利足二朱通相改候様被仰付候、右ニ付テ

ハ御領國中諸島迄モ御借入金銀米錢、来戊正月ヨリ都テ二部⑧利相渡候様被仰付候、且去年已来江戸高部相成、

替方并無抛御入用有之、銀九百七十貫目⑧余御借入申付

置候処、右御借金⑧入ノ儀ハ詔合相替候付、一統ノ利下難

被仰付候付、追々本濟申付候、末略ス、

享和元年酉十一月

(高橋權兵衛) 繪殿

御参勤料

九六五

一 銀九十三貫八百目 物奉行所御物方

但、御供立方万調物并御旅方其外万払、

一 銀七十四貫目

御船手右同

但、御船立万取仕立入用分、

一 銀百六十七貫目

高所モヘ方

但、御供立諸御賦銀、小倉通馬代、且御船手方諸船

ノ内モヘ方取仕立入目、都合銀高二百六十一貫目程

入用ノ内、外ニ九十四貫目程、

但、御在国被遊候テモ芝御留守居詰被差登候御賦、

且又例年御迎船ヨリ^{①被}差立候人数乗船取仕立入用分、

太底如此差引、

一 銀六十五貫目

帖佐与代官所

但、御供立一身ハ賦方并乗船取仕立、都合七十五貫

目程ノ内、外ニ十貫目、

但、江戸御留守詰^(居候之)一身賦方其外船取仕立入目差引、

一 銀二十八貫目

殿役方代官座

合銀四百二十七貫八百目、

右ハ、当年 御参勤御延引ニ付テ、於座々例年御入用

分太底如此ニ候、右ノ銀高別立テ御用候間、御参勤

御延引ニ付テカネクラ差分、銀方ヘ可被入付候、且又

米ノ儀ハ売払代銀可被入付由、四月四日ノ証文ヲ以申

渡置候、右ノ兩条共入付候首尾可被申出候、

一 当年 御参勤ニ付テ差立筈ノ浦水手、不残御定ノ通、

一人ニ付五十五匁ツ、当年九月限ニ如例上納申付、右

同前ニ差分方ヘ入付、其首尾可被申出候、当年ノ分ハ^②

水手明年限ニテ一度ニ可差立由申出、浦有之候テモ其

通ニテハ不申付候条、是又可被得其意候、以上、

右之通、可被申渡候、△

正徳二巳五月二十一日

御勝手方

九六六

享保五子年御参勤ニ付、

一 四宝銀三百四十五貫二百目程、モヘ方

一 錢千三百七十貫文、銀ニシテ五十四貫八百目、右同
一米三百三十石程、右同

内、銀百十三貫七百目程、御国道中并小倉・中国道

中万御賦、御先立西目廻り東海道方御賦

同九十一貫七百目程、東海道・美濃路方御賦

同百六十六貫八百目程、御供立并御先立江戸二

ヶ月地賦

同二十二貫二百目程、久見崎御船手御賦方万入

用

同五貫六百目程、久見崎御舟手雇水手賃銀

真米百五十石程、御国道中并西目船中御扶持米

赤米百八十石程、久見崎御船手万扶持米

外ニ、銀二貫八百五十目程、小倉・中国・東海道輕

尻被付候外ノ^{①下}地銀并東海道兩度賃除^{②兼}

一 四宝銀百一貫四百目程、帖佐与方

一 錢四百六十五貫文、銀ニシテ十八貫六百目、右同

一 真米五十石程、右同

但、御国道中并西目廻り船中御扶持米、

内、銀三十七貫目程、一身者、御国道中并小倉・中
国道中、御先立西目廻り万御賦

同十貫目程、御国道中・小倉・中国道中、西目

廻り御駕籠ノ者、御錢入夫・御雇夫万御賦

同三十一貫目程、一身者并御駕籠ノ者、御錢入

夫・御雇夫東海道万御賦

同四十二貫目程、右同江戸二ヶ月地賦

外ニ、銀一貫百五十目、小倉・中国・東海道輕尻被

下候分則^{①之ヲ}日地銀并東海道兩度賃

一 四宝銀百十八貫七百目程、御物方

一 錢七百七貫文、銀ニシテ二十八貫二百八十目

一新銀七十貫五百目

右ノ内、四宝銀十一貫六百目、錢五百八十一貫文、

右二行、仕着セ代・買物代・諸調物代其外万入用、

四宝銀百七貫百目程

新銀七十貫五百目

錢百二十六貫文、銀ニシテ五貫四十目

右三行、御旅御台所・御納戸・御兵具所・御厩方・御

書院方・川越方其外方入用、

一大判金四枚

一新小判金六百切

一新一部金七百切

右三行、御旅御台所入用、

一新小判金五十兩

一新一部金五百切

右二行、川越方、

一四宝銀二十五貫七百九十目程、賦米方

内、十貫六十目程、小倉・中国道中駕籠^⑧賃

銀十五貫七百三十目程、御雇人足身代銀

右ハ、当年就 御參勤方御賦方其外入用銀、座々書出

ヲ以積リ立、右ノ通ニテ候間、如例入付可被申渡也、

享保五子六月二日

御勝手方印

取次

鎌田六郎太夫

兩御船奉行

高奉行

物奉行

代官へ

九六七

御船手壁書ノ内

一 御勘定奉行 御船奉行へ

余座略ス

一 川越方払

一 宿割人馬案内

一 御関札方払

一 御旅方払

一 三道中御陸尺賃銀并罷帰候節路銀払迄

一 東海道并中国尾ノ道迄、通行人馬賃銀払

一 御供人数へ被下候三道中御賦銀、模合方払

一 右同輕尻賃、模合方払

一 帖佐与方、三道中御賦銀払

一 右同、輕尻賃払

一 東海道并中国尾ノ道迄、繼駕籠賃銀払

一 三道中持夫賃并次馬賃相^⑨払

一 御先馬方方 払

一 御供馬方、御厩方方 払

一 御道中御用、御納戸方方 払

但、御持セ御道具新出来ニテ格別及金高⑧ノ儀ハ除、

一 右同御書院方方 払

但書同断、

一 右同御兵具所所 払

但書同断、

一 御先荷方方 払

一 中国尾ノ道ヨリ九州筋挾箱持并茶箱持⑨賃銀銀 払

一 京都・伏見・大坂御附届方并御買入物代代 払

一 江戸・御国元御発駕ニテ諸出来物其外御買入物代代 払

一 三道中苦勞銀銀 払

一 御供人数伏見・大坂滞在宿賃

右、御道中御用金一万兩兩 払、

外ニ、

一 下ノ関御渡海ニ付御国ヨリ御船取仕立水手飯米其外入

用

一 御国道中送人馬賃

右二行、切捨リ可糺、尤、年号月日迄モ、

用心銀

九六八

御船手御規模ノ内

一 御旅方役人其外江戸上下且又諸方行ノ人へ用心金銀錢

相渡、致格護候役人諸所并中途⑩払残、江戸・御当地并

ニ致到着候テ日数十五日限可相納候、於座々用心銀相

渡候人へ致到着十五日限上納可任旨無失念申達、其上

送り状相付、諸所へハ送状ノフタ紙ニ致到着十五日限

上納可致旨堅固ニ書記可相渡候、右日限相過候ハ、三

割ノ可為利付事、

但、無抛支有之、上納難成候ハ、御勝手方可任証

文、

島津家歴代制度卷之拾七

文化
明和

諸向総
諸御礼銀
取込拝借
負銀
御買物
御払物
金蔵元
金蔵払
余勢銀
諸向総

九六九

一諸座年中本払総相調差出事候得共、右ノ総ハ致無用、
去丑八月ヨリ当七月マテノ本払総相調、来ル十月中可
差出候、当年八月ヨリ来年七月迄ノ総ハ来年九月限ニ
差出、以後共八月ヨリ七月マテヲ一仕切ニシテ総相調、
九月ヲ限可差出候、総ニ可書載品ハ左ニ申渡候間、八
朔有物ヲ本ニ取、夫ヨリ月々ノ儀ハ新寄元マテヲ本ニ
可相立候、諸蔵互ニ出入払本行ニ立候テハ二重ニ成候
間、蔵々互ニ取替銀元払トモニ外ニ可相記候、
但、磯御蔵並諸御渡方・御納戸蔵納殿蔵払・江戸京
大坂御蔵続ハ本行ノ払ニ可相立候、
一座々総、小座共ニ不洩様相調、納元並払方委細ノ記書
記ニ不及、大概相知候様可致候、少事ノ納払ニテ家部々々
ニ難相立分ハ万納並万払ト相記可然候、
一払物代ノ納米雜穀等ハ代銀ニ腰書ニ穀物品々ノ員数並
直成ノ廻マテモ可相記候、返上物ノ品・琉球諸反物類・
紙・蠟燭・平木・樽桶等諸人払用ニ罷成候品、且又払
用ニテハ無之候得共御用之内余計ニ付払ニ成候モ有之

候、又ハ古物御用迦ニテ私ノ品物等品立並員數腰書ニ
相記ニハ不及候間、大概其訳相立候様ニ可致候、

一金銀米錢

但、錢ハ銀目ニ直ニ不及、現錢姿ヲ納払トモニ可相

記候、

一大豆

小麦

⑦

大麦△

琉小麦

粟

胡麻

菜種子

芋芭蕉

荏子

尺莛

琉備後表位段々

玉金

錫

麻苧

右ノ品々、納払共ニ総ニ可相立候、

右ノ通被得其意、諸事如例可被申渡也、

享保十九年寅八月十三日

御勝手方印

取次
鎌田太郎右衛門

九七〇

一諸座八月ヨリ七月マテ本払総ノ儀ニ付テハ、享保十九
寅八月十三日以証文申渡置候処ニ、宝曆七丑七月八日、
亦々総調様ノ次第委敷申渡、当分其通相調差出事候得
共、御時節柄筆紙墨ノ費モ有之、第一座々ニテ別テ手

間取、諸御用筋ノ支ニモ可相成儀^⑧候、御用ニ付見合

ニモ相成儀ハ其節々糺方ヲモ可申渡候間、此已後ハ享

保十九年申渡置候通相心得、総相調可被差出候、為見

合寅年申渡候証文写相添相渡候条、被得其意、諸事如

例可被申渡也、

⑧調

但、総納方前方ノ通相成候ニ付テハ筆者仕業余程相

減管候、寄筆者減方ノ吟味ヲモ可有之事候、

明和八卯三月廿一日

御勝手方印

九七一

文化三年寅二月

一去丑正月ヨリ同十二月マテ、年中金銀米錢・菜種子・

大豆・生蠟・砂糖納リ本並諸払差引急成御見合ニ相成

候間、於諸向品々取シラヘ可被差出候、右ニ付テハ早

出長詰イタシ出精可有之候、仕立様ニ付差支又ハ難心

得儀、其外右御見合ニ付相洩候ト存付ノ儀トモハ、吟

味役ヘ申承、致連続候様可被取立事、

一与々免本米ノ儀ハ、定代ヲ本ニシテ上見旁ニ付引入米

ハ払ノ場ニ可被相記候事、

一 免本粟麦代其外諸役銀等定式之通相立、是又引入等ハ

払ノ場ニ可被相記事、

一 諸向納リ物御払ニ相成候代錢其外諸上納ノ金銀米錢本
ニ可被相立事、

但、老奴出銀ハ内書ニ可相記候、

一 山方運上竹木代等其外向々ヨリ納方申渡、払方ハ物奉
行其外ヨリ申渡候類等ノ儀ハ払方申渡候御役場へ致向
合、其場ノ本ニ相立、納方申渡候御役場ノ帳内ニハ外
書ニ可被相記事、

一 屋久島藏平木諸木代等ハ金藏差統、払方ハ物奉行ヨリ
申渡筈ニ付、屋久島方ハ外書ニ相記、物奉行方本ニ可
相立候、右類ノ儀ハ諸向共ニ可被相準候、

一 諸所藏々ヨリ御当地藏々へ差統候米錢等是又前条同断、
一 出米賦米ハ惣高ノ頭ニ相掛相記、諸引入ハ払ノ場ニ相
記、且重出米ハ内書ニ可被相記事、

但、給地ノ賦米ハ御代官方本ニハ可被相除候、且過

米払ハ外書ニ可被相記事、

一 諸払ノ儀、部分ヲ以可被相記事、

但、部分ノ大意左之通、

一 御納戸方諸払

但、御子様方御入用ハ銘々取分、

一 御作事方払ハ新規又ハ不時等有之分ハ内書ニ可被相記
事、尤、御休息所・大奥是又可被取分候、

一 物奉行所払ノ内、御進物御厩並御庭方御数寄屋奥上リ
等可被取分候、尤、御子様方ハ御銘々内書ニテ可被
相記事、

一 御献上並脇方御付届

一 御数寄方払(屋敷之)

一 御役料米諸切米等ハ打込ニ相記、一身者以下ハ可被取
分候、

一 御役料銀

一 拝借銀

一 道中持夫質

一 御法事方

一 諸藏役人手伝等御心付銀

一御利払

一御兵具方払

一御能方払

一櫛代米払

一運賃払

一夫飯米払

一諸稽古入門其外ニ付御物御計

一御代官所御合力銀

一御膳所御合^(空白、力カ)口銀

一次駕籠料

一御膳所御常式並御臨時ハ可被取分事、

一大奥右同断、御子様ハ御銘々可被取分候、

但、女中給分モ可被取分候、

一諸向共ニ右ニ準シ部分可有之候、

一砂糖会所蔵納リノ内、手形銀ハ取分、内書ニ可被相記

事、

一諸向蔵々互^⑨之取替寄元等申談、一方ハ外書ニ可被相記

事、

但、江戸大坂御仕登セ、長崎屋久島統砂糖代米等ノ
払ハ本行ニ可被相記候、

一御内証様御方御渡方ニ付御不足御取越ノ訳可被相記事、
右之通ニ候条、於向々取調候節、寄元類ノ払於受取先
本ニ相立候儀共、二重ニ不相成様申詰候上、相調可被
差出候、以上、

寅二月十九日

日高次左衛門

御勘定奉行衆

其外諸向略ス

九七二

一此節御取縮ニ付、以来年限中諸^⑩御^御払方致惣総候様被仰

渡趣承知仕、致吟味候処、諸所下代出物蔵入払ノ儀ハ

御勘定相濟候上、御勘定所ヨリ不致総候テハ、高奉行・

御代官方ニテモ時々総立ノ儀相調可申哉、御当地御蔵

迄ノ儀御座候ヘハ大概ノ入払ハ相知申答候間、金蔵ノ

儀ハ当座手形引付留ヲ以テ総立候様可仕候、諸向入払

ノ儀ハ於向々致総、月々御勝手方ヘ差出候上、当座ヘ

被相下候ハ、諸向々総取合差上候様可仕候、尤、金藏ノ儀ハ諸向ヨリ引付本立又ハ手形本立等申渡候首尾合モ有之、入払共当座へ無構向々ヨリ諸上納又ハ手形払申渡事候故、津廻米又ハ向々ヨリ金藏へ御入付等ニ相成候銀錢米ノ分ハ諸向総ノ内総分ケ差出候様、是又被仰渡度奉存候、左候ハ、於当座モ取馴候書役三人程モ差分、去年七月ヨリ当八月マテ一仕切ニシテ月々取仕立候様可仕候、当座入払ノ儀ハ数帳ニ相掛、過分ノ事候間、右人数ニテ仕応候儀モ無心元候得共、可成長致出精、若不相調儀モ候ハ、追々吟味仕可申上候間、右通差分り候付テハ定式ニテハ仕応不申候ニ付、跡書役助三人^⑨被^⑩召入度奉存候、此役申上候、以上、

享和三年亥二月

物奉行連名

九七三

御仕登米並砂糖・生蠟・菜種子類、其外御仕上物又ハ為替銀等御当地御払マテモ総立候様致承知候得共、右品々ノ儀モ專御代官受持ニテ御仕登又ハ御当地御払ニ

モ相成、就中、砂糖御仕登方ニ付テハ自物砂糖御買上旁直廻等段々入組モ有之、御当地申受米払等ノ儀モ過分ノ儀ニテ、御代官・高奉行方へモ相掛リ、与々取替払等別テ入組有之筈候得ハ、於当座右ノ品諸向ノ総取東候儀ハ難相成筈候間、向々ヨリ直ニ総書差上候様有御座度、尤、為替銀等其外金藏払ノ儀ハ別紙ヲ以テ申上候通ニ御座候間、御仕登又ハ申受米払等^⑨何レニモ向々被仰渡度奉存候、以上、

亥二月四日

物奉行

諸御礼銀 諸職屋ノ場可見合

九七四

一何ソノ願事等ニ付其向仕込居、御礼銀不相濟者モ有之候ハ、仕込方ノ儀ハ此涯差留置、上納相濟候上、取計候様可被申渡候、乍此上自然上納難成者モ候ハ、依訳ハ御取揚可被仰付候、左候テ、以後右体上納銀ハ

其事ニ取付候頭ニテ引付等相渡、藏役人受取書見届候
上、取付方可被申渡候、右ニ付難取扱向モ候ハ、時々
可被得御差図候、此旨御差図ニテ候、已上、

寛政五年丑七月二日

堀四郎太夫

九七五

一 諸向御礼銀ノ内、諸職屋其外何ソニ付是マテ定式ノ分、
且又願等ニ付臨時ノ御礼銀別段ニ相記、当年ヨリ年々
一ケ年ツ、致総、若不納ノ者有之候ハ、名書相記、翌
月限無延引其届申出、於金藏モ臨時御礼銀ノ儀ハ小座
相立取分置候様可被申渡候、右ニ付テハ於向々申談、
宥人ツ、掛ニテ取扱、名前申出置、代合ノ節ハ時々可
申出候、此旨御差図ニテ候、以上、

寛政十二年申四月二十三日 川上九戸

九七六

一 何ソニ付諸御礼銀且運上^銀等、是マテ段々及滞納、後
年ニ八年^賦府等ニ相成儀ノミ有之、別テ如何ノ事ニ候、

右ニ付テハ前年又ハ其年正月ニ相掛致先納、藏受取、

座々見届ノ上、頭御免通年々取扱候ハ、右様及滞納
候儀モ無之積^者ニ候、万一右先納不相調^者モ候ハ、依
訳御取揚等ニモ可被仰付候間、於向々右之趣兼テ申渡
置、自然差支候儀トモ候ハ、其趣ヲ以テ可被申出候、
左候ハ、其節々御吟味次第可被仰付候、此旨可申渡
旨御差図ニテ候、以上、

寛政六年寅八月六日

梅田九左衛門

諸座略ス

九七七

覚

一新銀七匁五分

硫黄島・黒島ヨリ年貢ニ相納候織木綿宥反代

一同式分 桶結並檜物細工札焼印賃

一同四拾三匁 諸所水車御礼銀一軒分

一同九匁 焼酎屋宥軒御礼銀

右ハ、阿久根・上下甌島・出水・志布志・種子島へ差

免置^⑧焼酎屋一軒造入米一ヶ年ニ七斗ツ、^⑨定ニテ御
札銀右之通申付候、

一同八十八匁

右ハ、屋久島並口之永良部島へ差免置候焼酎屋一ヶ年
ニ七石三斗ノ造入ニシテ御札銀右之通申付候、

一同四百三十目

右ハ、振壳札三町へ支配申付置候御札銀一ヶ年ニ右之
通申付候、

一同老分

右ハ、琉球仮屋ノ出入ノ札申受候節、札木代トシテ右
之通申付候、

右之通申付候条、硫黄島・竹島・黒島年貢代ハ当年分、
細工人札焼印賃・琉球仮屋出入ノ札木代ハ重テ札取候
節ヨリ、其外ノ御札銀ハ当八月八朔ヨリ月ノ割ヲテ
新銀ニテ上納方如例可申渡也、

享保六年丑閏七月二十三日 御勝手方印

鎌田六郎太夫

御勘定奉行

町奉行

御船奉行

物奉行

屋久島奉行

万不納銀取込拝借

九七八

一 銀米拝借被仰付置、被定置候年限ニ返上難成体ノ者ハ、
年数咎合ノ節、何様ノ訳ニテ返上不致候^⑩、今何年被
差延度由可申出候、若年限相過候テモ右ノ御断不申出、
返上令不埒、又ハ返上延^⑪ノ願於申出ハ、相応ノ御咎目
被仰付、其年延之願ハ可被取揚、
(不カ)

一 取込銀米等ノ儀ハ、御法ノ通返上申渡候節ヨリ六ヶ月
限ニ上納難成者ハ利付可為上納、乍然月限返上難成、
年数延ノ願申出、何年限ニ返上仕候様ニト被仰付置候
已後、其年限ニ上納不致候得ハ、年数咎合候節、何様

ノ訳ニテ返上不相濟候間、今何年被差延度由其御断可申出候、若無之年限相過、右ノ御断モ不申出、上納方致不埒、又々返上延ノ願申出候ハ、右同断相応ノ御咎目被仰付、年数延ノ願ハ可被取揚候、
右之通、得其意置候様、支配中へ可被申渡者也、

正徳三巳三月十二日

御勝手方印

九七九

一山方船方諸運上其外万手形銀、何ソニ付御礼銀等ノ納、上納方相滞、年月相過、年府等ノ訴訟申出者モ有之候、右体ノ上納方ニ付テハ於向々大形之儀ハ無之筈候得共、向後ノ儀ハ引付相渡、上納致延引候者モ有之候ハ、引受ノ於座々相糺シ、其訳可被申出候、吟味ノ上時宜次第可申渡候、自然跡々ヨリ不納ノ者モ候ハ、屹上納申渡、乍其上不納ノ者ハ相シラヘ其訳可被申出候、一米・雜穀入札申渡候節、見当無之米穀ヲモ致入札候哉、落直ノ通不申受、幾度モ取揚ニ相成、科錢申付事候処、科錢上納相滞候向モ有之由相聞ヘ候、右ニ付テハ御私

方相滞、御振廻ノ妨ケニ相成候、向後ノ儀ハ科錢上納申渡、引付相渡候日ヨリ日数二十日限定置上納申付、引付於座々受取見届、自然其内不納ノ者モ候ハ、相糺シ其段可被申出候、吟味ノ上、依訳ハ応錢高家財並其身家内ノ者マテモ取揚、人足等ニモ可召仕候条、御米申請ニ付テハ諸事定ノ日限等無相違申渡、不埒ノ者モ候ハ、無用捨時々可被申出候、尤、跡々不納ニ罷成候者モ有之候ハ、無延引上納申渡、乍其上不納ノ者ハ相シラヘ可申出候、其節ノ様子次第何分可申渡候、
右之通可申渡候、

宝曆五亥十一月

(鎌田政昌) 典膳

九八〇

(9)により補、九七九号行間朱書
一科銀錢被仰付不納有之候ハ、物奉行より吟味を以、諸郷百姓者郡奉行、浦人者御船奉行、其外寺社門前・人内等夫々頭々より稠敷申渡、其外給分有之向々ハ被下方差引之筋申出候処、都而三ヶ月限上納被仰付候段被仰渡、

天明八年申七月

(二階書目)
主計

九八一(の1)

一 拝借取込返上方六ヶ月相過候へハ利付上納ニ被仰付御法ニテ候処、去ル巳年ヨリ利付ニハ不被仰付、返上方延引ニ付テハ御咎目被仰付旨被仰渡置候、然レハ、去申年於当座シラへ方被仰付シラへ仕候処、上納方相滞候人及多人數候付、跡々不納ノ人ハ御咎目ノ無御沙汰ニ被仰付、向後於当座相シラへ候上、返上方被仰付候人、^{⑧及}不納候ハ、以前之通御咎目可被仰付哉ノ旨申上候処ニ、其通去ル申年被仰渡置候、然ハ、申年以來於当座相シラへ返上方被仰付候上及不納候へハ御咎目被仰付御法候へハ、其以前本銀米錢^{⑨取}上納候分ハ利足帳面消除候筋、座々へ被仰渡置度候、尤、最初利付ニテ拝借等被仰付候人ノ儀ハ、返上仕筈之儀ニ候得ハ格別ニ候間、左様成者消除不申筋ニ是又被仰渡置度候、此旨御差図ヲ得申候、以上、

享保三戊七月九日

御勘定奉行

(九八一の2)

御朱書ニテ

此表、申出之通得其意、帳面消除候様ニ可被申渡也、

戌七月十一日

御勝手方印

九八二

一 諸人拝借取込並御取替銀等皆返上難叶、内上納ニテ残銀延之願又ハ年府致上納候人、今マテハ年數五ヶ年ヲ限六ヶ年目首尾申出来候得共、向後年限相縮メ、三ヶ年ヲ限四ヶ年目首尾申出候様ニ申付候条、年限筈候節ハ面々所帯方向相シラへ上納方致吟味可被申出候、

右ニ付テハ如例可被申渡也、

明和七寅二月五日

御勝手方印

九八三(の1)

文化五年辰二月

一 諸郷郡見廻・庄屋・浦役相勉候者ノ内、以前ヨリ狩夫銀・船役銀等及不納、皆納不相調訳ヲ以テ願申出、年

府又ハ内上納ニテ被召延置候儀有之、右様シラヘ方当座へモ毎々被仰渡事御座候処、掛役々取揃置、不束ノ取扱共ニテハ有御座候間敷哉ニ相見得申候、以来ノ儀ハ右様ノ者願申出候テモ御取揚無之、掛役々ヨリ屹ト割合ニテ上納被仰付候様被仰渡置度、左候^{①ハ}テ不締無之筈ト致吟味、此段申出候、

但、御沙汰次第存申候、已上、

文化五年辰五月二十五日 御勘定奉行

(九八三の2)

此表、申出之通申付候条、如例可被申渡也、

辰二月朔日

御勝手方印

島津右平太

九八四(の1)

天明八年申△

一私共此節拜借取込方受持ニ可致旨致承知候付、是マテノ首尾合ノ内不行届首尾合モ御座候間、張紙之通吟味仕候、

一拜借皆返上難成、持高ノ内差上所務差引ノ願申出候人モ有之、高員数究無之候間、願書差出候節吟味有之事御座候、時々及御披露、尤、差上置候高ノ内所帯方差迫、半方モ年限ヲ以テ被返下度願出候節モ時々及御披露申候、

一御使遲着ニテ御賄料銀取込ニ相成候節ハ高奉行方ヨリ上納方申渡有之、返上方難成、年府上納之願申出人ハ、当座拜借方^{①ハ}御法之通上納方可申渡旨、問合申来事ニ御座候、其節根帳ニ書載、拜借方ヨリ上納方申渡来候、尤、御座限ニテ相済筋ニ究居申候、

一御賄料米・役料米・御切米取込ノ儀、差引相究上納方向々ヨリ問合申来候節、拜借方根帳ニ書載、当座ヨリ上納方申渡儀ニ御座候、尤、御座限ニテ相済申候、

一諸船頭洋中ニテ逢難船於諸所拜借銀米申出、或ハ御米積登候節欠米等相立、御当地ニテモ^{①儀}上下返上又ハ年府等ニ願出候節ハ、シラヘ被相下吟味ノ上、^{①儀}上下返上等被仰付、当座拜借方根帳ニ書載置候テ、差引方ハ御代官方ヨリ致来候、年府等ニ被仰付候節ハ当座ヨリ上

納方申渡儀ニ御座候、

一 質屋取建願ニ付テハ支配頭次書ニテ当座へ申出、吟味ノ上御披露ニ相成、唐通事ヨリノ願ハ異国船掛へ願出、差出御用人衆（より）相下リ吟味ノ上御披露ニ相成、尤、年數十ヶ年ツ、相究居申候、右年數ノ内休之願申出候節ハ三ヶ年ツ、ニテ御座限リニテ相済申候、

一 拝借取込有之人ハ高直御免無之御法ニテ候処ニ、売手ノ方へ拝借銀有之、買手ヨリ引受上納可仕候間、高直御免被仰付被下度願出、被成御免候儀有之候、左候テ、売手ノ方拝借名前消除、引受（儀）ノ者ノ名前書載有之候ニ付相糺候処、跡々ヨリ右様ノ儀ニ付テハ名前書改仕来ノ由ニ御座候、

一 拝借取込返上方相済、根帳相消候節、書役前ニテ墨引ニテ是マテ相済来申候、

右張紙之通吟味仕候、御吟味次第被仰付度奉存候、以上、

申正月

上村笑之丞

丸目和吉

（九八四の？）

張紙

本行、持高ノ内差上所務差引ノ願申出、御免被仰付置候処、所帯方差迫候訳ヲ以テ半年モ五ヶ年限申下ケノ願申出、先例等有之訳ニテ応願御免被仰付候儀、段々有之候、度々申下ケノ願ニ付テハ何ケ度マテハ御免ノ儀無之候間、所帯方相応ノ向モ度々申出儀モ可有之候得共、当座ヨリ願書相下候筋ニモ難致、時々御披露ニ相成申事ニ御座候間、此節ヨリ被相改、五十石已上人三ヶ度マテハ差迫候訳モ有之候ハ、御取訳ヲ以テ御免被仰付、以後ハ容易ニ御取揚無之段被仰渡置候テハ如何可有御座哉、何ケ度モ御免被仰付候テハ数十年ニ相掛申儀ニテ、全本銀目成候程相見得不申、右通被仰渡置候ハ、少々ニテモ本銀返上相重方ニテ、且ハ締ニモ可相成ト吟味仕候、

一本行、御座限ニテ相済候筋ニ相究居申候得共、御使遲着ノ儀ハ多々有之事ニテ、御座限ニテハ誰モ大形ニテ、

和田新吾

可致皆返上長ケノ人モ年府等ニ申出儀モ可有之、取シ
ラヘイタシ候モノモ涯々不致取扱、自然ト延々相成候
テハ不締ノ方ニ御座候^{⑧備}、以来百目已下ハ御座限ニテ、
百目已上ハ時々及御披露候テハ如何可有御座哉、

一本行、多年御役等相勉候御取訳ヲ以テ被下切ニ被仰付
候儀モ有之候間、左様ノ向ハ時々及御披露候筋ニ取シ
ラヘ可仕候間、被聞召置度候、

一本行、逢難船、本船破船ニテ拝借銀米於諸所申出、返
上方年府又ハ年延ノ願ニ付テハ、左モ可有之候得共、

御米積船被仰付、過分ノ欠米相立、皆返上難成、少々
致内上納、残り年府或幾上下^{⑨返上}、忤ト願出候者段々有之

候、欠米上納方ニ付テハ以来皆返上被仰付、何レノ筋
皆返上難成者ハ半方上納、無左候得ハ、容易ニ御取揚
無之段被仰渡置候テハ如何可有御座哉、過分ノ欠米相
立、少々内上納ニテ年府又ハ幾上下返上ト被仰付置候
得ハ、上納不相濟内災殃等有之、色々訴訟申出、兎角
上納方相滞可申候、尤、当座並御船手ヨリ重上納致催
促候テモ纒二三石相重申者ノミ有之候ニ付、跡々見合

候処ニ同様ノ筋ニ相見得申候、仮令其内上納二十石ハ
可致ト存候者モ先其内相減シ可致上納ト申出ル振合ニ
成立、定式ノ様相心得申候テハ別テ如何敷、不締ノ方
ニ御座候、尤、本船持留居候得ハ夫長ケノ働モ可有之
儀ニ御座候間、右通被仰渡候テモ差テ迷惑ニモ相成申
間敷、尤、幾上下ト被仰付候諸船頭、已後御用船被仰
付候テモ当座へ相知不申候間、以来向々ノ御用船被仰
付候段、時々御船奉行方ヨリ当座へ問合有之候様被仰
渡置度、当座ヨリモ時々掛合可仕候、

右ニ付張紙
一五枚荒田濱

三枚老軒

四枚伊集院

二枚老軒

本行、質屋当分ノ首尾合ニテ御免年数ノ内休ノ願申出
候節ハ御座限ニテ御免被仰付候、然処ニ御当地並諸郷
質屋御礼銀少々ノ増減ハ有之候得共、右ニケ所鹿児島
最寄ニテ御礼銀甲乙有之、相並不申候間、重御礼銀被

仰付度候、殊ニ軒数モ一軒ツ、有之、夫長ケ借方モ相増可申候間、此節ヨリ朱書之通、重御礼銀被仰付候テモ差テ迷惑ニ相成申間敷ト吟味仕候、

右同

一諸郷へ御免質屋ノ内一往休並年限ヲ以テ休御免被仰付置候質屋数軒有之、最寄及数度候質屋モ有之候ニ付、

此節糺方申渡候処、段々申分ケ不相揃、甚疑敷相見得申候、然レハ、表向休之願申出、取違、内々ハ質屋職仕筋共ニテ候、別テ不締ノ儀御座候間、諸郷へ被遣候締方横目へ糺方被仰付、若左様ノ質屋モ有之候ハ、此節屹ト御礼銀上納被仰付度ト吟味仕候、末略、

一 本行、本拜借又ハ名前相消、引受候者ノ名前書載候節ハ、本人ニヲノツカラ拜借無之筋相成申候、然レハ已後右ノ人残り高モ有之、相払候カ又ハ屋鋪直等願申出候テモ差支無之被成御免筈ニ候、右之通ノ取扱ニテハ首尾宜敷有御座間敷ト吟味仕候、此節根帳等ニモ書改方被仰付候付テハ、以来本拜借人ノ名前ハ相立置、引付相渡候節ハ引受ノ者ノ名前ヲ以テ申渡候ハ、差支

ハ無之筈候間、拜借方根帳ハ一切名前直方不相成筋被仰付度候、

右同

一本行、皆返上相済、根帳相消候節ハ、墨引ニテ消除来候得共、以来ハ小頭何某承届候訳置、小頭名前印形ヲ以テ消除候筋可仕候間、被聞召置度候、尤、新規ニ名前書載候節モ同断可仕候、

(九八四の3)

別紙ニテ、当座拜借方段々不相届首尾合有之、掛小頭へ吟味申渡候処、別紙之通申出候付、猶又申談候処、吟味之通被仰付置候ハ、以来首尾合モ宜、締ニモ相成申候間、此段申出候、何分御吟味次第存申候、

申正月七日

御勘定奉行

(九八四の4)

此表、都テ張紙吟味之通申付候条、休質屋名書ノ儀モ可被差出候、右ニ付テハ如例可被申渡也、

天明八年申正月十一日

御勝手方印
取次
大野隼人

九八五(の1)

一文化四年卯九月、御勘定奉行ヨリ諸取込拝借子孫無之
株ニ取束^①払捨、左之通申出候、

一合米千五百三拾六石三斗六升六合三勺七才

一合銀貳百十三貫八百二十目四分九毛

一合錢七千二十貫九百六十七文

一合小判金百七十九兩七切

一合平木五十束

一合種子油二千九十二盃三合

一合生蠟七百二十壺斤

卯九月

御勘定奉行

(九八五の2)

右、申出之通申付候条、如例可被申渡也、

文化五年辰正月二十九日

御勝手方印

島津右平太

九八六

御船手御規模

一不依何色、御物取込有之人モ候ハ、早速其旨御勘定

所へ相達、取込ノ員數ハ取込帳^②記置、追テ上納相濟

候段、御勘定奉行ヨリ申来候任証文、本帳可消除候事、

一定船頭並定水手、勉居候内相果候ハ、御切米御扶持

方取込返上有間敷候、其役ヲ離相果候ハ、取込返上

可申付候事、

九八七(の1)

享和元酉

一宗門方・御兵具方、金銀錢溜リ無之節モ御物方其外ヨ

リ借入ニテ拝借ニ出候モ有之候得共、以来ハ一切不相

成、只今マテカリ入ニ相成候分ハ入来候節ニ向々ハ少々

ツ、ニテモ返銀可致候、尤、右返銀不相濟内ハ屯銀等

有之候テモ拝借等一切不相成候、

但、諸向へ返銀相濟候節々並皆同相濟候上届可申出

候、且已後屯銀等有之節モ猥ニ世上拝借不差出、御

役相勉候人旅行其外依勉向実々無拗節ハ、願之上被

仰付置候、

一 御鷹方ノ儀、此節ヨリ御差分高二千石相定候付、以後

拝借等ハ一切不相成候、且是マテ御物方等ヨリ御取越

ニ相成候分ハ都テ払切被仰付候、

但、御鷹方御銀之内拝借等被仰付置候分ハ、此節ヨ

リ御物方ニ被相直候間、無間違様可致引結候、

一 寺社方ヨリ御物方へ返銀入付等段々有之由ニ付、猶又

寺社方入用ノ儀極々致減少、少々ツ、ニテモ返銀引結

可致候、尤、時々入付相成候節ハ届可申出候、

一 前文通、諸向拝借被相止候ニ付テハ、以来身分ニ不応

勉方ニテ旅行其外株立候勤方有之節ハ表向可願出、尤、

御役場持前ノ旅行其外ノ勤方ニ付テハ何程差支候テモ

拝借被仰付間敷候、

一 右家之面々ヨリ御取替等ノ儀一切不相成、高禄ノ儀故

兼テ其手当可被致置儀候、尤、是マテ御取替等モ有之

候ハ、追々上納可有之候、

但、何程拝借有之段、向々ヨリ被申出、此節返上

手当ノ儀モ可被申出候、

右之通被仰付候条、向々へ可申渡候、

享和元酉十一月

(麥刈実祐)
下総

(高橋權次)
縫殿

(山田有儀)
伯耆

取次
相良兎毛

(九八七の?)

(⑦により補、行間朱書)

一 物奉行所拝借者、高壱石ニ付拾七貫文ツ、ニテ七部利、

一 宗門方者、無質物七部五部三部貳部利、段々有之、

一 寺社方祠堂銀方、七部利、高壱石ニ付拾五貫文当ツ、

取揚、

九八八

一 商家ノ者共、滞納銀ノ儀ニ付、此節糺方申渡候処、太

分ハ及金高、多年夫成召置、其上御帳留等不分明ニテ、

不納利掛等ノ儀取違居候向モ有之、御難渋ノ折柄、受

持ノ御役場甚大形ノ至候、右ニ付テハ屹ト可及沙汰事

候得共、此節マテハ無其儀候条、向後頭人ハ勿論、下

役迄モ聊無怠慢万事厳密ニ取シラへ候様可有之候、畢

竟所帯方手薄者共分限不相応者願出、見込及相違候所

ヨリ右次第別テ如何ノ儀ニ候間、以来何篇訴訟等申出候節ハ於向々鎖細逐吟味可申出候、尤、当分不納ノ株ニハ受持ノ御役場ヨリ無油断稠敷催促申渡、猶吟味ノ成行追々可申出候、

右、可承向々へ可申渡候、

寛政六年寅十一月二日

(二階堂行智)
河内

迫水善左衛門

九八九

一於諸座年鑑久敷相成候諸上納方等ノ定例、 中略、

当節ニ相成候テハ不相当ノ儀、間ニハ可有之モ難計事

候処ニ、其仕向ニ氣ヲ付、何篇吟味可然事ニ候、何ソ

急々取シラへ候様トノ儀ニテハ無之候条、差当ノ節、

時々可被申出、此旨可申渡旨御差図ニテ候、以上、

寛政四年子正月七日

松崎次左衛門

御勘定奉行

御船奉行

御作事奉行

九九〇(の1)

一当座不納銀シラへ方被仰渡、去ル子年ヨリ蔵方目付ヲ

モ被相掛、折角催促申渡、追々相片付申儀ニ御座候処、

多年ニ相成候株ニ引付、受取人不相記モ有之、糺方申

渡候上、引付相渡候寛無之段申出候モ有之、又ハ当人

死失ニテ何様ノ訳モ不相知段申出候モ有之候得共、引

付差出候上ハ御法ノ利掛上納可申渡儀ニ御座候処、数

十年ニ相成候元利過分ノ銀高二及候得ハ、難決者共手

ニ及カタク、涯々相片付不申、分テ極難ノ者共、差扣

申出候上、利銀払捨リ被仰付候儀ノミ御座候、右様引

付申受方慥ニ不相知者ハ、乍御法、利掛申渡候テハ其

身迷惑ハ勿論、片付方モ埒明不申、依之申上候、物

奉行所ノ儀モ先年右之趣吟味申上候趣御座候処、申出

之通、引付受取人不相知株々ハ利掛ノ沙汰ニ不及、本

銀マテ上納申渡候様、亥九月二十日高田猛太夫取次御

証文ヲ以テ被仰渡候由、不納ノ儀ハ何方マテモ同様ノ

儀ニ御座候間、当座ノ儀モ右御証文当日ヨリ前ノ株ニ

ハ、物奉行所同様引付受取人不相知株ニハ利掛ニ不及

筋被仰付度儀ト吟味仕、不納掛藏方目付申談、此段奉
得御差図候、以上、

文化五年辰十一月十六日 御船奉行

(九九〇の二)

此表、申出之通申付候条、如例可申渡也、

辰十一月二十六日

御勝手方印

伊集院平

九九一

一当座先年以来ハ不納銀シラへ方被仰渡、去ル子年ヨリ
藏方目付ヲモ被相掛、是マテ折角催促申渡、段々相片
付候処、諸郷ノ内不相片付株々有之、是マテ及数度片
付方申渡候得共延引相成、当座不納銀手広事ニテ右マ
テヲ取扱不仕候ニ付、外々催促取掛候テ不致沙汰候得
ハ其成ニテ、届又ハ片付等不申出モ有之、今通ニテハ
遠方書付ノ往返マテニテ、イツ相果候儀モ相見得不申、
筆紙墨ノ費ニモ罷成候、所役トモニモ等閑ノ取扱ハ不
仕管候得共、前文ノ通、書付マテニテハ何ケ度申渡候

テモ埒明不申候間、右様ノ株ニハ時々受持ノ所役人・
浦役人ノ間招呼、屹ト相片付候様為仕可申候間、此段

被聞召置可被下候、以上、

文化六年辰四月十八日

御船奉行

九九二(の一)

文化五辰△

一諸人拝借取込・御取替・滞納米錢等皆納不相調、依願
御取訳ヲ以テ年府上納被仰付候人ノ内、御役人・書役・
小役人相勤定扶持被下置、又ハ与力・足輕等御切米被
下置候者ノ内、被究置候年府上納方、銀ニテ及延引候
儀段々有之、中略、以来ノ儀ハ、右様定扶持被下
置候人、被究置候年府上納其年中上納無之、為差訳合
モ不相知及延引、幾度モ面働ニ相成候人ハ、手形座へ
問合ノ上、其身被下方ヨリ差引上納被仰付候テハ如何
可有御座哉、年府上納ノ儀ハ、頭御取訳ヲ以テ、夫々
被下方等ノ定例ヲ以テ、軽目ノ上納被仰付儀ニ御座候
処、定扶持申受、右通延引ニ相成候儀ハ不都合ニ御座

候、已来右通問合之上、差引有之候様被仰付置候ハ、

第一上納方締ニモ相成、格別納リ方相増可申候、中

略、弥申出通被仰付儀ニ御座候^①ハ、物奉行其外支配

下有之候御役場へモ被仰渡置度、末略、

辰二月十二日

御勘定奉行

(九九二の2)

此表、申出之通申付候条、如例可被申渡也、

辰二月二十三日

御勝手方印

島津右平太

御勘定奉行

御納戸奉行

物頭

御船奉行

御広敷御用人

高奉行

御馬預

御代官

御教寄屋頭

負銀

九九三

一御領内之者共為商買方大坂表へ差越、町人共へ引負銀

有之、及公訴内訴等、御難題ニモ可成立筋合ニテ、此

節大坂御留主居ヨリ申越趣有之、畢竟商人共被定置候

問屋へ不相付、致脇宿候所ヨリ引負銀ヲ以テ出来故及

公訴等、甚不都合ノ至候、右ニ付テハ其当人ハ勿論、

諸所役々並親類縁者^①与中マテモ面働筋ニ相成候付、以

来ハ商人共定問屋・小問屋ノ外一切脇宿不致様、向々

ヨリ稠敷被申渡置候様被仰付候、

一右通、定問屋又ハ小問屋へ致宿、万一無抛依訳及引負

等候ハ、其段大坂御屋鋪へ問屋共ヨリ申出候様被仰

付候、為何沙汰モ無之及公訴等候ハ、大坂御国問屋召

放候様、御留主居へ被仰渡置候、

右之通被仰付候条、以来商買等ニテ他国出申出候者有

之候ハ、諸所於手形所右之趣申聞、定問屋^①小問屋

△其外一切脇宿不致、引負不仕出様ノ書物為致置候様

被仰付候、

此旨支配下並地頭所へ可被申渡旨、御差図ニテ候、以上、

安永四未年十二月二十五日 菱刈孫兵衛

九九四

一御領内ノ者共大坂表引負銀、公訴内訴共首尾方、大坂御留主居ヨリ申越候節、支配頭へ申渡、左候テ、当分ハ向々ヨリ御留主居へ直ニ返答申遣事候得トモ、向後ハ已前之通取次ノ御用人へ支配頭ヨリ何分申出、御用人ヨリ御留守居へ返答申越候筋被仰付候間、其通可被相心得候、此旨御差図ニテ候、以上、

安永四未二月二十二日 穎娃波江

九九五

一大坂表へ引負銀有之、及 公訴為内濟方罷登候者有之節ハ、以来親類与中又ハ其所ノ者ノ間相付差越候様可致候、此旨可承向々へ可申渡候、

安永五申五月四日

(喜入久福)
主馬

九九六

一諸船持共大坂町人へ借銀有之、船売払候儀、御留主居方へ願申出候節ハ、吟味之上売船差免、右代銀ニテ致返濟候様申渡儀モ有之由候、 中略、 其通ニテハ御船奉行方へ不相知候付、御用船ノ支相成、其上船頭共心得違候テハ如何候間、向後引負銀有之、不致売船候テ不叶節ハ、前以御船手へ願申出候様申付候、 末略、
明和六丑十月四日 御勝手方印

九九七

一 大坂御留主居へ

右ハ、向田町ノ源兵衛、同所ノ嘉右衛門ト申者、大坂へ引負銀子ノ為返濟、嘉右衛門事ハ少々銀子持上リ、源兵衛事ハ追テ跡ヨリ銀子差越答ノ由ニテ候得共、兩人共ニ負銀員數不持登由候、右次第ニ候得ハ大坂問屋^⑧中別テ厄害相成難致儀候間、向後右通返濟銀持上候者

有之節ハ、年寄・五人与又ハ組中・庄屋ノ内相添罷上

候様ニ有之、自然滞在中本人病氣等差起候カ又ハ諸私

イタシ不足候節、相談ノ便ニモ仕度候、乍此上銀子差

支候節ハ於大坂御蔵銀ヲ以致払方、追テ於御当地致返

上候様ニ有之、尤、問屋屯人ニテ不引受、七軒ノ問屋

相中ニ引請候様ニト大坂御国問屋ヨリ段々申出趣有之

候、右体金銀負人共為返濟方罷上候儀ハ相對ノ事ニ候

処ニ、年寄・五人与又ハ与中・庄屋付添差越候儀、又

ハ諸私不足ノ節御蔵銀ヲ以テ致首尾候様ニ申付候儀ハ

難成訳有之候間、右兩条ノ願ハ不相達候、自今右体金

銀負人共為返濟方罷登候節ハ七軒ノ問屋共相中ニ引受

候儀ハ、弥申出之通七軒ニテ引受致世話候様ニ可申聞

候、

右之通可申渡候、尤、已後共負人共金銀持上候節ハ引

負銀ハ員數無相違持上候様ニ可申渡候間、此段御留主

居承置候様ニ是又可申渡候、已上、

享保十二年未八月

(島津久實)
中務

九九八

一御領国浦人共大坂其外へ引負銀有之、為首尾方罷上候

節、金子為才覺可罷上旨申出候ニ付テ其通被仰付候処、

返濟銀不持上、於彼方無首尾ニ相成候、已後共右之訳

返濟方ニ付金子持上リ可致首尾旨申出候ハ、何程金

子持上候段、御船奉行慥ニ承届、弥無相違金子持上候

ハ、可差上候旨、相良善助殿御取次ヲ以テ被仰渡、

享保十二年未八月三日

九九九

(御触書天明集成 三〇八一号)

写

一借金銀返金相滞、金主及公訴、奉行所ヨリ裁許申渡候

上ハ、右裁許之通可相守筈ノ処、近来切金員數甚不足

ニ差出、又ハ武士方掛合候家来並寺社町在町方借方ノ

者へ奉行ヨリ差紙遣候テモ、其節々評定所へ家来不差

出儀モ有之由、不埒ノ趣相聞候、只今マテ切金員數等

ノ儀、甚寛カ成申付方ニ候ノ処、右裁許之通不相用、

猶不埒ノ取計有之間敷事ニ候ノ処、旁不埒ノ事候得共、

先ハ只今マテノ儀ハ不被及 御沙汰候、向後ハ奉行所
ニテ敵敷取扱、其上ニモ不埒ノ輩有之候ハ、武士方
ハ奉行ヨリ老中へ申達筈ニ候間、其節可遂吟味候条、
已来急度可相心得候、尤、寺社町在町方ハ奉行所ニテ
急度咎可申付候、

右之通、宝曆九卯年相触候処、又々近比切金員数甚不
足ニ差出候モ有之由、不埒ノ事候、弥先達テ相触候趣
急度可相心得候、猶此已後不埒ノ儀モ有之候ハ、奉
行所ニテ敵敷取扱候筈ニ候間、已来取計候家来共心得
違無之様、主人々々ヨリ急度可申付候、尤、寺社並在
町共同様ノ事候、

右之通可被相触候、

右之通、從 公義被仰渡候条、此旨与中・支配中・諸

外城へ不洩様可被申渡也、

天明元年丑六月十四日

御家老座印

諸御買物

一〇〇〇

- 一 諸御買物有之節ハ、於向々遂吟味、座横目見分ノ上買
入申渡事ノ由候処、入札等申渡候テモ兼テ座方・藏方
不相馴者ハ代錢申受等ニ隙取ニ相成候所ヨリ、自兼テ
座々へ致立入候受人共ノ外致入札等者無之、内々名前
ヲ出候マテノ事ニテ為限人揃故、セリ立候儀モ無之、
差テ入札ノ詮モ無之由候、依之、此節ヨリ座横目老人・
表横目老人買物方請込、藏々定詰同前三十日代リ申付
候付、足輕兩人入用ノ節計相勤候様ニ申付候間、時々
横目任問合勤方可申渡候、平日使夫トシテ^御春屋人足
兩人ツ、可相渡候、左候テ、定直成モノ、儀ハ有来通
諸藏方定詰座横目見分ノ上買入、^定直成モノ外ノ品向
後御買入ノ節ハ、不依多少向々ヨリ買物受込横目へ可
相達候、
- 一 御買入物ノ節、差当リ急ニ横目方へ申達候テハ直段^位
等ノ吟味モ委敷不相届筈候間、於向々專氣ヲ付、其考
ヲ以テ前広ニ申達候様ニ可致候、
- 一 諸御買物ノ儀、受込横目ヨリ年行司へ可申渡候間、町

方不洩様ニ申渡、横目差図ノ通、入札又ハ諸色無滯差
出候様、町奉行ヨリ可申渡置候、

一御買物落札又ハ売上書等、横目証印ヲ以テ座々へ差出
候ハ、早速手形相渡、於蔵方モ無遲滯代銀可相渡旨、
向々ヨリ支配下へ可申渡置候、

一御買入物諸色見分等モ有之管候故、諸所何様可申付哉
申談、追テ致吟味可申出候、
右之通申付候条、如例可被申渡也、

安永三年午七月十三日 御勝手方印

比志島要人

本文御買物所、御春屋内へ被召建候段致承知候事、

一〇〇一

一御当地御蔵々諸色御買入ニ付テハ、売上書相添品物相
納候節、詰合ノ横目・蔵方目付ヨリ見届致証印、相渡
来候得共、以来横折帳調置、品物見分ノ上、有来通致
証印、其品員数並何月何日売上人何某ト書留置、手形
ニ相成候節、又々見聞役々^⑧為差出、右ノ帳面ニ引合、

於無相違ハ売上書裏へ見届証印イタシ可相渡候、左候
テ、右証印無之手形代払ハ勿論御勘定被差通間敷候、
右之趣御徒目付・横目・蔵方目付へ被仰渡候条、被得
其意、支配ノ御蔵々へモ可被申渡候、此旨御差図ニテ
候、以上、

寛政七年卯七月十三日 迫水善左衛門

宛書

御勘定奉行

御納戸奉行

物頭

御船奉行

御作事奉行

高奉行

物奉行

余座略ス

一〇〇二(の1)

天明八年申十一月△

一 諸御藏々諸物御買入ノ節、売上書向々御座へ差出候砌、早速差紙並弘手形差出申管候処、御座々々ヨリ間ニハ別テ相滞候儀モ有之由、左候得ハ、売上人及迷惑処ヨリ諸物高直ニ書出候ユへ、随分セリ詰致吟味候得共、諸物相当ニ難買入御座候、右ニ付テハ承趣モ御座候、依之申上候、諸物売上ノ節、定詰藏方目付方へ横折帳ニ相調置、三拾目已上ノ銀高二及候節ハ売上ヨリ諸品物並商人名前書留置、売上書ニ致割印、当人へ相渡、弘手形相受取候節、時々定詰藏方目付方へ其届申出候節、其分ケ右横折帳ニ相記置、若及延引候手形モ有之候ハ、奉行頭人又ハ売上人方へ致沙汰候様被仰渡置候ハ、締モ宜、諸物下直ノ方ニ売上申管候へハ、御勝手ノ方ト吟味仕、同役中へモ申談申上候間、何分御沙汰次第奉存候、已上、

申六月二十八日

御春屋藏取締藏方目付

御細工所右同

進物藏右同

(一〇〇二の二)

張紙

向々御藏へ商人ヨリ売上候諸品代料申受方ノ節、及延引儀モ有之候旨、承趣モ御座候間、右式ノ砌ハ無滞可成長早ク相渡候様、藏役人並手伝へ向々奉行頭人ヨリ申渡置様被仰渡候儀ト奉存候、已上、

申六月二十八日

右役々

(一〇〇二の三)

此表、申出之通申付候条、如例可申渡也、

申十一月八日

御勝手方印

松崎次左衛門

一〇〇三

口達之覚

一 諸御役場御用ノ諸品、御規模物外、依願売上人被定置候場所モ有之候処、市中ノ相場時々相替候儀モ有之事候間、不依何品、御買入ノ節ハ被定置候売上人マテニ不拘手広承合、下直ノ品ハ外向ヨリモ御買入申渡、尤、

不差掛内可成長遂吟味、乍少事モ不及御損失候様可致
取扱事、

十一月

右之通、丑十一月二十二日伊集院平御取次ヲ以被仰渡、

一〇〇四

一御当地蔵々買入物等ノ儀申出候節ハ、払底無相違段、

見聞役致見分、証印ヲ以テ申出、吟味ノ上買入申渡事
候間、不用ノ品不差屯管候処、進物蔵へ位劣木綿數百

端片付方ノ儀申出、甚以テ如何ノ至^①候、末略、

委細蔵方取締ノ場ニ有之、可見合、

文化二丑十一月

(川田佐實)
伊織

一〇〇五

写

一諸御買物ノ儀ハ、売上書出シ、横目証印見届、御勘定

相遂候様ニト先年申渡置候得共、定直成ノ品ハ其節何

分ニモ不相見得候ニ付、横目ノ証印有無ノ沙汰不及由

相聞へ候、右ニ付テハ不締ニ有之候条、向後ハ定直成

ノ品ニテモ御買入ノ惣員數付イタシ、一ツニ付何程ト

為書出、其座々ノ檢者・横目見届ノ致証印、御勘定相

遂候様可被申渡候、惣員數付無之、一ツニ付何程ト相

記候マテノ証印ニテ代銀払不申付様、於御勘定所モ其

札可被申付候、右ニ付テハ未十一月二十七日ノ証文ヲ

以テ入札物御買入有之節首尾方ノ致様委細申渡置候間、

定直成物御買入ノ儀モ右同断^②申付候条、得其意、諸

事如例可被申渡也、

丑七月十八日

御勝手方印

鎌田太郎右衛門

一〇〇六(の1)

一座々御用ノ品大坂御買下向々ヨリ申来候節ハ、無^③後

船便等ヲ以テ時々差下申事候処、間ニハ遙月延ノ方ニ

申来候モ難計、左候へハ手都合ハ宜、御用モ無滞相弁

申管ニハ御座候得共、爰元御買物ノ儀ハ高部御借入銀

ヲ以テ買入差下申事候へハ、御入用ノミ前以月延ニ申

来候儀トモ御座候テハ、何様詰横目致出精、直安ノ方

ニ買入候テモ、利廻ヲ以ハ至テ高直ニ相当リ、御不益

ノ方御座候間、自今御用品物御買下申越候節ハ、其入

用時節ヲ堅申越候様御座候ハ、船便等考合御入用ノ

時節無^⑦後差下候様可仕候、爰元ノ儀ハ節季ニ諸物代

銀払致事候得ハ、其節季ニ差掛不勘弁ニ買入候間、節

季ヲ過シ買入候ハ、利廻ニ付テハ大ニ御損失ニ相成^⑧ノ

事ニ候間、右之趣向々へ被仰渡置、正數御入用時節不

差掛様、前広申越候様有御座度^⑨、末略、

寛政元西九月

山口佐平次

伊集院弥平左衛門

御勝手方御用人衆

(二〇〇六の二)

本文之通申越候間、諸向入用ノ品々買下申越候節ハ、

時節考合、御不益筋不相成様可被取計候、此旨御差函

ニテ候、以上、

酉十一月十三日

松崎次左衛門

御納戸奉行

御船奉行

御広敷御用人

物奉行

御細工奉行

諸御払物

一〇〇七

一諸御払物ノ内、古物疵物ハ勿論、新物ニテモ定直成ニ

難相払品ハ、直付ノ上大^⑩ニ割増ニ相払事候、直付ノ儀

ハ其品ノ位次第相当ニ相究事候処ニ、割増相掛候テハ

見込ノ直成ヨリ其分引下ケ直付相極由候、右通ニ候得

ハ、割増有無付テ直段ノ高下差別ハ無之筈候、依之、

向後直付払^⑪ニ品者割増ニ不及、付直ノ儘ニテ払方可申

付候条、品々ノ見分相応憲法ニ致直付候様可申渡候、

尤、上方・長崎ヨリ買寄候品、其外座々ニテノ調物、

諸人申受ニ出候節ハ、以前ヨリ割増ノ例法有之事候、

此儀ハ有来通可相心得候、且又以前ノ儀、直付高直ニ有之、望手無之品ハ、致直付候者へ申受ニ申付来候へトモ、先年申渡置候通、高直ノ品ハ直下リニ申渡、致直付候者申受候筋ニハ有之間敷候条、可被得其意也、但、欠所揚リ物直付払ノ儀モ右同断割増ニ不及、付直ノ通可相払候、

享保十二年未閏正月晦日 御勝手方印

一〇〇八

一諸座御用迦ノ古物御払ニ相成候節、半分ハ直付ノ上御法様ノ割相掛諸人申受、半分ハ入札払物ニ申付候間、諸事如例可被申渡候、

享保三年戊七月十六日 御勝手方印

一〇〇九

一御米其外ノ品ニモ入札払ニ申渡、落札ノ節御法様ノ敷銀早速上納申渡由候得共、今マテハ日限ノ定無之ニ付、上納方及延引儀モ有之由候、向後ハ落札ノ儀座々ヨリ

当人へ申渡候日ヨリ七日限ニ敷銀^{①上納}致シ候様ニ可被申付候、若右日限ニ不致上納候ハ、御払ノ品取揚、科錢可申付候間、如有来時々可得差戻候、
享保二十一年辰正月十七日 御勝手方印

一〇一〇

一御米其外入札御払物、今マテハ銀目ヲ以テ致入札、上納ノ節ハ銀錢勝手次第相納事候得共、向後、古銀・文銀・錢ヲ以、三段ニ入札ノ面直段書分ケ差出候様ニ可申渡候、尤、銀錢ニ付テハ直段高下モ可有之事候間、其段面々見込次第致入札候様ニ可申渡候、 中略^{①下迄}

享保元年酉十一月

一〇一一

一足輕・御小者・御中間・定水手類ニ相渡候兵次紋付又ハ目印有之ノ品、古物御用迦ニテ入札払ニ相成候節ハ、紋所・見印墨^(目カ)ニテ消候テ払方可申渡候、江戸・京・大坂杯ヨリ差下候右体ノ古物御払ニ相成候節モ同前ニ可

相心得候、

申正月十一日

宝曆二年歟

取次

迫水善左衛門

一〇二二

一 諸御藏々米・砂糖其外品々入札御払ニ相成候節、向々ヨリ町方其外へモ申渡有之事情得共、入札御払物手広不相知儀モ有之候、以来ハ入札看板江戸橋辺・金藏・御長屋門へ掛方被仰付、右看板ノ儀ハ金藏格護ニテ金藏手伝受持ニ被仰付置候旨、御証文ヲ以テ被仰渡、掛物並看板調方モ相濟、金藏へ格護申渡置候間、諸向ヨリ御払物入札被申渡候節ハ、右之趣金藏役人へ可申渡、看板被取入、御払ノ品被書載候上、金藏役人へ被引渡候ハ、掛方手伝へ申付積ニ候、此旨申達置候、以上、

天明九年酉閏六月十一日 物奉行

諸向宛書略ス

一〇二三

①御 船手御用迦品々入札御払罷成候節ハ、座横目見分ノ

上御払相成候、是ヨリ以後ノ儀ハ、御船手檢者・横目致見分、御払物被仰付候旨、亥九月十四日肥後平左衛

門御取次ヲ以被仰渡、

年号可札、

一〇二四

一米・砂糖其外、大坂直廻ヲ以テ御当地上納令免許置候株々、三町相場等ニテ差引申付置候得共、銀目ノ依相場ハ御損失ニ可及候間、都テ大坂金銀錢相場ヲ以テ差引申付候条、於向々無間違可致取扱候、右ニ付テハ如例可被申渡也、

享和二戌十一月二日 御勝手方印

川上九戸

一〇二五

一 諸御払物代頭免許^{①御}ニテ時々引結方等申渡管候得共、長々

其成ニテ召置候テハ御振合ニモ差構事候間、猶又無滞
弘替等申渡、早速其届申出候様被仰付候、右ニ付テハ
御藏々壁書イタシ置、藏方目付・横目ヨリモ氣ヲ付、
大形無之様可取計候、此旨可申渡旨御差図ニテ候、以
上、

寛政五年丑十二月六日

迫水善左衛門

⑦モトノマ、
⑧蔵有之、△諸役場略ス

一〇一六(の1)

一不依何色於諸向代銀上納申受被仰付候節ハ、代銀相調
候上諸品相渡申答候処、間ニハ代銀上納無之内諸品相
渡及滞納居候人有之事候ニ付、以来ハ代銀上納相濟候
上諸品相渡候筋、向々へ屹ト被仰渡置度、且御薬園方
薬種ノ儀、代銀^⑨上納ニテ医師中^⑩ニテ申受被仰付候儀
有之由候処、及滞納纔ノ内上納ニテ年府又ハ月延等申
出候人多々有之、当座へ調被仰渡候儀多々御座候、当
御時^⑪柄御不益筋、殊ニ邂逅被召立候御薬園ノ儀、其
詮薄方ニモ可有御座哉、依之、已来薬種ノ儀モ代銀上

納ノ上申受被仰付候御吟味筋ハ有御座間敷哉、当分通
ニテハ往々滞納ノ人相屯、御取扱難被成向成立可申哉
ト吟味仕候、末略、

文化六年巳三月二十四日

物奉行

(一〇一六の2)

可為吟味通候、

五月

(願姓久保
信濃)

一〇一七(の1)

一宝曆五年亥四月、野田之太郎右衛門御取場ノ他国米拾
三俵入札落直ニテ候処、代錢才覚不相調御断申出趣有
之、所役々次書ニテ申出、御船奉行吟味、
右ノ通申出候間、御見合ノ上科錢被仰付、願之通御免
被仰付度奉存候、二番札出水籠ノ弥右衛門ト申者壹俵
ニ付錢五百七拾四文ニ札入置申候、太郎右衛門於御免
ハ右弥右衛門へ落札被仰付ニテモ可有御座哉、末略、
亥四月晦日 御船奉行

(一〇一七の2)

此表、科錢錢五百文申付、米取揚、手広又々入札申渡、
於御船手札不相開、取揃封ノ儘可差出候、
右ニ付テハ諸事如例可被申渡也、

亥五月三日

御勝手方印

取次

島津權左衛門

御勘定奉行

御船奉行

(一〇一八の2)

本文ニ付、

一古鍋地金類一斤ニ付代錢二十四文

一古釘類地金一斤ニ付代錢拾六文

右之通御座候間、^{此旨}御返答申達候、以上、

閏十一月二十五日

御作事方

御船手

金藏納元

一〇一八(の1)

文化十年酉

一地金用古鍋半釜類

右ハ、御方へ相屯候節、地金用トシテ申受等相成候儀

ハ有之間敷哉、於其儀ハ直段壹斤ニ付何程ツ、ニテ候

哉、於御船手モ先年申受相成候儀有之候得共、時々直

段高下ノ振合モ可有之、為念此旨御尋申進候、以上、

酉閏十一月二十五日

御船手

御作事方

一〇一九

文化二丑八月ヨリ同三年寅七月迄

一錢五千九百壹貫文余

諸札銀

一錢三十五貫文余

諸島年貢代

一錢九百拾八貫文余

御藏有物御払代

一錢三千二百四拾七貫文余

狩夫銀

一小判金拾九兩

一 卷部金二十七切

一 銀卷貫百二十五匁二分五厘

一 錢六十二貫文余

右四行、用心銀返銀、

一 大判金六枚

一 一部金三切

一 銀一貫百四拾四匁六分

一 錢三百五十四貫文余

右四行、万上納、

一 錢千九百三十六貫文余

一 小判金拾四兩

一 一部金五十二切

一 銀八十三匁

一 錢千四百九十二貫文余

右四行、別銀上納、^⑧

一 小判金五十五兩

一 錢二千百三十七貫文余

一 真米二十二石余

津口運上銀

一 赤米二石二斗余

右四行、万御取替並取込返上銀米上納、^⑨

一 銀二百九十八貫五百三十七匁余 渡唐銀

一 錢三百七十三貫文余 木葉代返錢^⑩

一 錢八千四百四十一貫文余

一 錢七千貫文 御厩上納 帖佐与方藏ヨリ入付

一 錢三万八千七百四十一貫文余 人別牛馬一匁出銀

一 銀百七十二匁

一 錢千二百五十四貫文余

右二行、進納銀並屯銀、

一 小判金百七兩

一 一部金七十六切

一 銀三百九十二匁

一 錢二万六千九百四十四貫文余

右四行、種子油並油粕代、

一 錢二万四千四百八貫文

一 小判金千五十兩

一 卷部金四百三切

一 小玉銀三貫目

右四行、当所出物蔵ヨリ御入付、

以上、物奉行方取シラへ、

一〇二〇

文化三寅八月ヨリ卯七月迄

一 錢十六万五千五百八十五貫文余

一 小判金四千三百三十二兩

一 壹部金二千百八十七切

一 銀六百二十九貫四十九匁余

内、三百二貫目、慶長銀、

一 真米千四百三十四石

右五行、物奉行方総ノ内、

金蔵御払

一〇二一

明和元年申八月ヨリ同二年酉七月迄

一 小判金五百兩

一 壹部金百六十九切

一 銀千五百三十四貫[㊦]百貳拾貳匁五分九リ貳毛[△]

[㊦]内、千八拾貫五拾[△]目余、大坂為替払、

差引四百五十三貫五百目、

一 錢三万四千四百九貫三百七文

一〇二二

明和二年酉八月ヨリ同三年戌七月迄

一 小判金二千兩

一 壹部金千百九切

一 銀九百七十九貫七百四十七匁七分四厘七毛

内、七百二十六貫七十七匁五分八厘、大坂為替払、

差引二百五十二貫九百七十目一分六厘七毛、

一 錢七万四千四百二十九貫六百十九文

内、二万八千七十七貫七百六十五文、大坂為替払、

差引四万三千四百十一貫八百五十文、

一〇三三

明和三年戊八月ヨリ同四年亥七月迄

一小判金五百兩

一老部金千六百七切

一銀四百三十一貫百九十八匁九分二厘六毛

内、百三十貫目、大坂為替払、

差引三百一貫百九十八匁九分二厘六毛、

一錢十三万四千二百拾八貫四百十四文

内、八万二千二百八十四貫二百八十七文、大坂為替払、

差引五万二千九百三十四貫百二十三文、

以上、物奉行方取調、

一〇二四

正月中

一真米五百石 同 赤米五百石

二月中 一真米千五百石 同 赤米千五百石

三月中 一真米八百石 同 赤米八百石

四月中 一真米千三百石 同 赤米千六百石

五月中 一真米千石 同 赤米千五百石

六月中 一真米七百石 同 赤米九百石

七月中 一真米五百石 同 赤米四百石

八月中 一真米六百石 同 赤米五百石

九月中 一真米六百石 同 赤米五百石

十月中 一真米五百石 同 赤米五百石

十一月中 一真米八百石 同 赤米八百石

十二月中 一真米千石 同 赤米千石

外二、真米二千二百五十六石、
但、二盃入、

合二万二千五百五十六石、

物奉行^{①方}調、

一〇二五

文化三寅八月ヨリ卯七月迄物奉行方調^{①總之内}

一 錢千八百八十貫文余

一 真米二百五十石余

一 赤米五斗一升八合

右三行、諸職人賃払、

一 錢六百七十貫文余

右一行、御藏日用賃、

一 真米七千五百七十七石余

一 赤米四千八百九十石

一 疏米三千百五十四石余

右三行、御役料米・役料米・御切米、

一 真米九百二十石

一 赤米三百四十八石

右二行、年中御扶持米、

一 真米九十石

一 赤米六十石

一 錢二千九十貫文余

右三行、御小姓其外御心付銀並御扶持米、

一 真米千九百八十石

一 赤米五百九十石

一 疏米百九十九石

右三行、助役々料米・御扶持米・御切米、

一 真米百石

一 赤米十一石

一 疏米七石

一 錢千三百十二貫文

右四行、御仏餉払、

一 錢二万二千三百三十九貫文

右一行、諸御買入物代、

一 真米二百七十石

一 赤米二百石

一 疏米二十一石

一 錢千七百三十七貫文

- 右四行、島渡海ノ人御扶持銀米、
- 一錢六百四十二貫文
- 右一行、御祈禱払、
- 一錢六千三百十三貫文
- 一真米二百六石
- 一琉米二十二石
- 一銀七百五十目
- 右四行、万払、
- 一錢八百十七貫文
- 右一行、万受負賃、
- 一錢千三百十五貫文
- 右一行、人足身代銀、
- 一錢一万七百八十六貫文余
- 一真米二十一石余
- 右二行、樟腦仕込銀並払、
- 一真米九石
- 一錢二千四十九文
- 右二行、別銀^⑧払、
- 一錢千五百二十九貫文
- 右一行、女中衣裳代並給分、
- 一銀一万千十八貫文
- 右一行、取下方払、
- 一真米五十九石
- 一琉米六石
- 一赤米三十石
- 一錢八十九貫文
- 右四行、造土館払、
- 一錢四千八百八十九貫文
- 右彦行、三島方御買物代、
- 一錢五百二十二貫文
- 右彦行、御救銀、
- 一真米二十七石
- 一錢二百四貫文
- 右二行、頭屋方、
- 一真米二百五十二石
- 一琉米三十五石

一 銀百八十目

一 錢六千三百八十七貫文

右四行、御廩弘、

一 錢五千九百五十八貫文

右老行、明礬代、

一 真米四十六石

一 疏米四石

一 赤米二十三石

一 錢八百七十一貫文

右四行、御藥園弘、

一〇二六

▽^④ 文化五辰二月、御取縮ニ付物奉行吟味書之内△

一米一万八千五百六十六石三斗九升四合

但、真赤米、

右一行、宝曆六子年一ヶ年分、金藏御弘高、

一米二万四千二百二十四石二斗四升九合

但、真赤米、

右一行、文化三寅八月ヨリ同四年卯七月マテ一ヶ年分、
同断、

差引重ミ五千九百六十七石八斗五升五合、

一 銀五百四十三貫三百七十九匁

但、金込、

右一行、宝曆六子年一ヶ年分、同断、

一同千三百三十二貫三百七十五匁

但、金込、

右一行、文化三寅八月ヨリ同四年卯七月マテ、同断、

差引重ミ五百八十八貫九百九十六匁、

一 錢六万八千八百二十貫六百四十七文

右一行、宝曆六子年一ヶ年分、同断、

一同十三万三千三百四十八貫二百七十四文

右一行、文化三寅八月ヨリ同四年卯七月マテ一ヶ年分、

同断、

差引重ミ七万五千五百四十五貫六百二十七文、

一米二万五千九百三十七石五斗九升

右一行、明和元申八月ヨリ同二年酉七月マテ、金藏御

弘高、

一同一万七千百十五石六升

右一行、明和二年酉八月ヨリ同三年戊七月マテ、金藏

御弘高、

一米三十石二斗二升五合

一錢十一貫文

外ニ、銀百六匁六分五厘、御買下筆墨⑦ナシ紙代・朱墨代、

右、大番頭座、

一米二百七石八斗八升

一銀二貫五十七匁八分七厘

一錢百五十八貫七百三十四文

外ニ、銀一貫七十一匁一分、御買下筆墨・唐朱墨・

小文筆代、

右、造土館、

一米百二十八石五斗九升三合

一錢十一貫九百七十六文

右、道奉行所、

一米五十六石五斗六升六合

一錢十五貫九百七拾二文

右、明時館⑧方、

一米百五十七石壹斗四升

一錢二十二貫文

右、御藥園方、

一米二十八石六斗

一銀二百八十八匁

右、織屋方、

一米四十一石六斗

右、医学院方、

一米二百十五石八斗八升四合

一錢二百三十九貫三百三十文

右、御庭方、

一米百十八石三斗六升四合

一錢百三十九貫七百六十文

右、御銅鳥方、

合米九百八十四石七斗九升、

合銀二貫三百四十五匁八分七厘、

合錢五百九十八貫七百八十文、

右三行、大番頭座ヨリ御飼鳥方マテ新御役場九ヶ所勤
人数御役料米・夫飯米其外諸品代、

余勢銀

一〇二七(の1)

一三島ヨリ黒砂糖積登候当分ノ御船運賃砂糖代錢、右余
勢銀ノ儀ハ、最初金藏へ入付有之候処、砂糖藏二階へ
差分置候様、寛政七卯二月八日松崎次左衛門取次御証
文ヲ以テ被仰渡、入払ノ儀ハ御船奉行受持ニテ御座候、
一砂糖藏へ相納候砂糖代錢ニ相掛候口錢ノ内、八部一小
牟田周藏へ被下置候処、寛政五丑八月朔日御物へ差上
候付、是又余勢銀方へ入付置候様、同六年寅四月右同
人取次御証文ヲ以テ被仰渡、首尾合等ノ儀ハ前条同断
御船奉行受持ニテ御座候、
右ハ、先年一往荷方御船二十三反帆余勢銀ノ儀モ砂糖

藏二階へ差分置候処、寛政十二年申閏四月二十三日、

御船二十三反帆御引取被仰渡候付、右二行ノ錢高マテ
御船奉行首尾合ニテ御座候、然処、右砂糖入札申渡、
落直ノ者ヨリ上納ノ節ハ、当座ヨリ出入上納申渡、都

テ代銀上納相済、藏役人預書見届候上、御船奉行へ致
掛合、御船奉行ヨリ入払申渡儀ニ御座候間、互ニ面働

ノ筋合御座候間、^{①付}当座掛申渡候テハ差支有之間敷ノ旨、
御船奉行方へ致相談候処、何ソ差支ノ儀モ無之候ニ付、

当座ヨリ奉得御差図候様返答承申候間、以来当座ヨリ
砂糖藏余勢銀方へ入払申渡候様被仰渡、定詰見聞役
へモ申談、此段申上候、以上、

文化五年辰三月二十一日^{①上} 砂糖方御代官

田中諸右衛門

倉野善助

一〇二七(の2)

此表、申出ノ通申付候条、如例可申渡也、

辰四月三日

御勝手方印

伊集院平

御船奉行

砂糖方御代官

巳四月五日

御勝手方印

相良此右衛門

一〇二八(の1)

一先年御造立ノ御船二十三反帆運賃砂糖代錢砂糖蔵へ余勢銀方小座被召建置候処、其已後二十三反帆御引取ニ相成候得共、当分御船運賃砂糖代錢右ノ余勢銀方へ本立ニテ都テ御物方へ御入付相成候間、余勢銀方小座被相除、御物方へ入払被仰付度奉存候、右通運賃砂糖代銀見合ニ付テモ御物方引付元ニ相知居、右小座ノ儀ハ名目マテニテ二重^①之取扱ニ候故、御船奉行へモ右ノ趣ヲ以テ懸合仕候処、差支無之旨承、定詰見聞役へモ申談、此段申上候、以上、

文化六年巳四月四日

砂糖方御代官

森岡万左衛門

伊集院甚右衛門

(一〇二八の2)

此表、申出ノ通申付候条、如例可申渡也、

島津家歴代制度卷之拾八 享保

一部五合 内場・穎娃・根占・高須

一部六合五勺 加世田・伊作

但、小松原六七勺下り、

一部五合八勺 伊集院

江戸

二部六合 山崎・向田・根占

二部六合 日州

二部四合五勺 肝付・出水

二部六合五勺 加世田

但、小松原一合四勺下り、

二部五合 山川・内場

右、正徳三年巳七月六日被仰渡、

一〇二九

大坂

一部五合 日州

一部四合五勺 肝付・出水

但、阿久根・長島ノ儀ハ五勺下り、

一部四合 川内・向田・山崎

一〇三〇

大坂

一部二合 外ニ一合重ミ 日州

一部三合五勺 外ニ一合重ミ 肝付・出水

一部三合 外ニ一合重ミ 山川

一 一部四合 外ニ一合重ミ 根占・向田・山崎・

内場

ノ内ニ有之、

一 一部五合五勺 外ニ一合重ミ

加世田

一 生蠟二百八拾一斤二合五勺同

一 平木三拾二束同

但、小松原七勺下リ、

一 菜種子一石一斗七升同

江戸

一 尺莖七拾枚同

一 二部四合

山崎・山川・向田・

一 芭蕉二百七拾斤同

根占

一 生蠟四拾五貫目同

一 二部三合

日州

一 鉄二百五拾斤同

一 二部五合

内場

一 樟腦二百五拾斤同

一 二部四合五勺

肝付・出水

一 二部五合五勺

加世田

一〇三三

但、小松原五勺下リ、

宝曆十四年申

右、当時御代官所規格、

一 穆佐高岡紙他国出運上銀二貫九百五拾目高岡与下代方

一〇三二

へ上納被仰付、右銀ヲ以中紙半切御買入大坂へ被差登、

一 砂糖二百五拾斤米一石当

運賃米ノ儀ハ紙荷二九ニ米一石ノ当リヲ以、御法ノ通

(行間朱書)
一 一起炭五俵同

可相渡旨被仰渡、
申十一月十日

但、文化二丑閏八月慶田朱右衛門炭積船ニ付願書

委細海上万手形銀ノ場ニ有之、

一〇三三(の1)

一寛政四子年、阿久根ノ源兵衛船・大根占ノ佐次右衛門船、大島ヨリ返上物積船被仰付、琉球人我物運賃一件ニ付、右兩人ヨリ申出趣有之、左之通被仰渡候、

一 琉球館聞役へ

一何ソニ付、琉球人共諸船頭相對ニ我物積入、究通ノ運賃等涯々不相払、及迷惑ノ由聞得之趣有之候、右ニ付テハ船頭トモヨリ訴出候趣モ有之、甚御面働筋ニモ相成事候間、此節ニ不限、向後右様之儀無之様屹ト可相片付旨、琉球人トモへ聞役ヨリ申渡置候様致承知候間、此段申達候、以上、

子十一月十九日

堀四郎太夫

(一〇三三(の2))

一右同断、琉球館ヨリ一番方二番方運賃沙汰ノ儀願出候付、右へ御張紙ヲ以、左之通被仰渡、

一本文、一番方二番方積方運賃ノ儀ハ追テ何分可被仰渡候間、我物ニ相掛運賃ノ儀ハ、頭究通無遲滞相払候様可被申渡候、此旨御差函ニテ候、以上、

但、御用相済次第可被差出候、其節御証文ヲ以可被仰渡候、

子十一月廿七日

松崎次左衛門

琉球館聞役

(一〇三三(の3))

一右同断ニ付、丑正月左ノ通被仰渡、

一琉人トモ自物運賃一件ニ付、入組相成申出趣有之、被相糺候ヘトモ、慥成証拠モ無之、乍然船頭トモ於大島三貫六百文ツ、ニ相究候上、役々へ申出置候儀トモ有之、其上松嶋・金城・宮城・義トモ直究ノ所へ致証印置候付テハ、船頭申分慥成事ニ相見ヘ候ニ付、究通相払、其外ハ証印消又ハ証印無之候ニ付、此涯難被相決候間、先琉人申分之通、二貫文ツ、可相払置、追テ大島役へ上国ノ上相糺、船頭申分於無相違ハ残錢一貫六百文ハ可相払候、右者トモ追々琉球へ罷下管候間、聞役並在番親方引受居、払方等ノ儀ハ無滞様可取計候、

丑正月廿日

取次
堀四郎太夫

(一〇三三) 4)

(行間朱書)
一文化四年卯八月、琉球運賃御勝手方ヨリ御糺ニ付左之

通、

一館内蔵方届砂糖、百斤ニ付運賃砂糖廿三斤五合七勺、

運賃米一斗一升三合二勺、

一琉人自物砂糖

但、米一石間ニ付運賃錢一貫八百文、

一砂糖蔵届諸人自物砂糖

但、米一石間ニ付運賃錢一貫四百四十八文、

右ハ琉球登砂糖運賃ノ儀、船問屋トモヘ糺方申渡候処、

右之通申出候間、此段申上候、以上、

卯八月三日

御船奉行

一〇三四

正徳三年巳七月運賃定、左之通、

一大坂

一一部二合

日州

一一部三合^{⑤五勺}

肝付・出水

一一部三合

山川

一一部四合

内場

一一部五合五勺

加世田

但、小松原七勺下リ、

一江戸

一二部四合

山崎・向田・山川・根占

⑤貳
一三部三合

日州

一二部五合

内場

一二部四合五勺

肝付・出水

一二部六合五勺

加世田

但、小松原一合四勺下リ、

巳七月六日

取次
堀甚左衛門

一〇三五(の1)

一琉球 三部八合

内、八合部下リ被仰付、御物へ入、部下リ米是ナリ、

(行間朱書)
一一宝曆九年卯、廿三反帆沖船頭硫黄島ノ弥吉、琉球上

リニテ去出物米賦米並八部部下リ米運賃米積入、卯

閏七月十三日難船ニテ下甌島手打村へ入津、

右ヲ以考候へハ、此時分最早部下リ米有之、

一 沖永良部島

一 延享二年道之島運賃左之通被相定候、

一 大島

米・春粟、二部

尺筵百枚・ハセ(芭蕉)ヲ百斤ニ付運賃一部五勺

外ニ、一合此節下リ、

小麦、運賃二部五合

黒砂糖百斤ニ付運賃十斤二合

外ニ、一斤此節下リ、

一 喜界島

米・春粟、運賃二部七勺

尺筵百枚・苧芭蕉百斤ニ付運賃一部一合

外ニ、一合此節下リ、

小麦、運賃二部六合

黒砂糖百斤ニ付運賃拾一斤半

一 徳之島

米・春粟、運賃四部五合二勺

内、一部此節重ミ、

小麦・春大麦、運賃五部

内、四合此節重ミ、

尺筵百枚ニ付運賃十九枚

内、一枚此節重ミ、

黒砂糖百斤ニ付運賃十七斤半

内、三斤此節重ミ、

苧芭蕉百斤ニ付運賃⑨十一斤

(行間朱書)
「一徳之島運賃米二部九合七勺先

右、享保三年戌六月徳之島詰役々ヨリ乗間一人ニ付

廿石ツ、被成下度願書之内、

一 與論島

米・春粟、運賃五部七合二勺

内、一部六合此節重ミ、

小麦・春大麦、運賃五部九合五勺

内、五合五勺此節重ミ、

尺筵百枚ノ運賃二十五枚二合

内、二枚此節重ミ、

芋芭蕉百斤ニ付運賃二十三斤二合

屋久島御米積登候船ハ定ノ運賃ニ二合五勺重ミ、

右之通、差支ノ訳無御座候ハ、^④法^⑤リ被仰付候ハ、平

等仕、船持トモニモ迷惑仕儀有御座間敷哉ト吟味仕候、

其外略ス、

御船奉行

(一〇三五の2)

此節^④表、吟味之通当秋下船ヨリ運賃上ケ下ケ申付候、若

先様差支ノ儀モ有之候ハ、其節ノ時宜次第何分可申渡

候、屋久島御米積船運賃ノ儀ハ、享保十四年酉十一月

廿九日証文ヲ以運賃増減申渡候節委細申渡置候通可相

心得候、以下略^④ス、

延享二年丑二月八日

御勝手方印

取次

肥後平左衛門

砂糖百斤ニ付運賃砂糖二拾三斤五合七勺

一御用船難船ノ節、運賃依里数差引被仰渡、

寛政元酉二月廿四日

一〇三七

一日州御仕登御米、他国カリ船ヲ以、御法ノ運賃米三部

下リヲ以、借リ入方被仰付、去ル^④来^⑤年ヨリ春マテ八ヶ

年、池田庄左衛門・横山喜助へ被仰付候、

明和八卯二月

一〇三八

一返上物船運賃余勢無之、及迷惑候付、帆一反廿六石六

斗ノ賦ニシテ、外運賃附ニテ、砂糖ノ方平秋下一艘、

返上物積船二艘、都テ三艘ニテ割合、其外ハ米相渡候

様御船奉行吟味申出、其通被仰付候、

寛政四年子正月

一〇三六

一琉球

一〇三九

一 江戸・大坂行御用船、難船等ニテ積替ニ相成候節、運賃米里数ノ割ヲ以差引被仰付候旨被仰渡、

寛政元酉二月

一〇四〇

一 平野屋借船江戸材木積船被仰付、運賃片廻ニ割引ナシニテ、御法ノ運賃被成候事、

寛政二年戊五月

一〇四一

一 内之浦ノ鉄之助ヨリ内場材木積船他国致借船差出、片廻八掛ナシニテ、右へ相掛候運賃五割引ナシニテ、赤米ヲ外場真米ト内場渡リ被仰付、

寛政二年戊十二月

一〇四二(の1)

一 大坂仕上セ船運賃ノ儀ニ付相シラへ可申上旨被仰渡候、

去年ハ高役方錢過分ニ相納、右式被仰付候、当時ハ御

藏錢モ少ク罷成、其上錢運賃ニ付琉球トモニ米高直ニ

有之不勝手ノ由、船持ニモ現米申受儀少々運賃部下リ

ニ被下候テモ勝手存候様ニ承及申候、然ハ米高直ニ有

之内、一節運賃米一合被相下、現米ニ被仰付ニテモ可

有御座哉、左候へハ届百石ニ付一石ノ部下リニテ御座

候、江戸行運賃ノ儀モ右ニ応シ可被仰付儀ニ候、尤、

米下直ニ罷成候刻ハ本部ニ可被仰付儀ト私トモ申談候、

以上、

宝永六丑八月

物奉行所

代官所

高所

御船手

(一〇四二の2)

御朱書

此表、申出之通可被申渡也、

丑八月十七日

御勝手方印

一〇四三(の1)

寛政元酉二月運賃里數ノ割被仰付候ニ付諸向吟味左之通、

一日州赤江川ヨリ東目筋、江戸マテ

一赤江川ヨリ備後ノ内田島マテ九十六里

一田島ヨリ紀州ノ内大島マテ九十八里

一大島ヨリ遠州ノ内御前崎マテ九十六里半

但、港ニテハ無之候ヘトモ里數ノ割ニテ御座候、

一御前崎ヨリ江戸マテ九十六里半

一日州東江川ヨリ東目筋、大坂マテ

一赤江川ヨリ豊後ノ内保戸島マテ四十一里

一保戸嶋ヨリ安藝ノ内宮齋島マテ四十一里

但、港ニテ無之候ヘトモ里數ノ割ニテ候、

一宮齋島ヨリ播州ノ内太婦マテ四十一里

一太婦ヨリ大坂川ロマテ三十五里

一山川ヨリ東目筋、大坂^①

一山川ヨリ日州飢肥領折生迫マテ五十三里

但、港ニテハ無之候ヘトモ里數ノ割ニテモ、^①

一折生迫ヨリ豊後佐賀関マテ五十五里

但、港ニテ御座候、

一佐賀関ヨリ讃岐ノ内箱崎マテ五十二里

但、港ニテハ無之候ヘトモ里數ノ割ニテ候、

一箱崎ヨリ大坂川ロマテ五十二里

一山川ヨリ東目筋、江戸マテ

一山川ヨリ伊予ノ内ヲハナ崎マテ百十五里

但、港ニテハ無之候ヘトモ里數ノ割ニテ候、

一ヲハナ崎ヨリ紀州ノ内歌田マテ百十五里

但書同断、

一歌田ヨリ志州ノ内安乘リマテ百十四里

但、港ニテ候、

一安乘リヨリ江戸マテ百十八里

一山川ヨリ西目筋、大坂川ロマテ

一山川ヨリ肥前ノ内野母崎マテ七十五里

但、港ニテ無之候ヘトモ里數ノ割ニテ候、

一野母崎ヨリ藍之島マテ七十四里

但、港ニテ候、

一藍之嶋ヨリ安キノ内御手洗マテ七十四里

但、港ニテ候、

一御手洗ヨリ大坂川口マテ七十五里

▽^④一山川より西目筋、江戸迄△

一山川ヨリ筑前ノ内玄界島マテ百三十五里

但、港ニテハ無之候へトモ里数ノ割ニテ候、

一玄界ヨリ播磨ノ内宝^(室)マテ百三十五里

但、港ニテ候、

一宝^(室)ヨリ紀州ノ内古和マテ百三十六里半

但書同断、

一古和ヨリ江戸マテ百四十里

右ハ江戸・大坂行、西目・東目海上里数、四ツ割ニシ

テ右之通御座候間、此段申上候、以上、

天明八申十二月八日

諸船頭

(一〇四三の2)

本文ニ付、江戸並大坂海上里数、港分ヲ以、運賃四ツ

割ニシテ一港ツ、賦付、左之通、

一江戸行、一之港ヨリ東目佐賀関、西目下ノ関マテ運賃

割四部一、

一右両所ノ間ヨリ大坂マテノ間、右同四部二、

一大坂ヨリ勢州安乘・志州鳥羽マテノ間、右同四部二、

一右両所ノ間ヨリ江戸マテノ間、都テ被下切、

一大坂行、一ノ港ヨリ東目筋細島マテ、初目長崎口マテ

之間、右同四部一、

一右両所ヨリ東目佐賀関、西目下之関マテノ間、右同四

部二、

一右両所之間ヨリ備後鞆マテノ間、右同四部三、

一鞆ヨリ大坂マテノ間、都テ被下切、

右之通場所被究置、御領國中ノ儀ハ前ノ濱又ハ日州表・

出水表不限、何方ニテモ積入候港ヨリ右通被仰付度吟

味仕候、

申十月

御儉約掛

(一〇四三の3)

御裁許掛

本文吟味被仰渡吟味仕候処、御借船ニテ積入方被仰付

候節、港内又ハ出帆ノ上致破船、又ハ水船ニ相成、其

外打荷等致候節、運賃差引方ノ儀夫々御規有之、其段

外打荷等致候節、運賃差引方ノ儀夫々御規有之、其段

ハ御船奉行・高奉行ヨリ本文之通申出候間、都テ御規

通可有御座奉存候、其外逢難船難乗届、積替等被仰付

候節、運賃差引方ノ御規無之、都テ被下切為被仰付先

例有之由、御代官シラヘ書ノ内ニ委^①相見ヘ申候、左

候ヘトモ難船ニテ難乗届、積替被仰付候節、都テ運賃

無差引、破船同様可被仰付儀無御座、其外勉向ニ付右

様ノ節ハ不依何篇差引方被仰付儀ニ御座候処、右ニ限

リ無差引被下切被仰付候儀相見ヘ不申候、其上積替ノ

船ヘモ運賃被成下、二重ノ御払ニモ相成、旁以相弁不

申候間、以来江戸並大坂トモニ、運賃米四ツ割ニシテ、

張紙之通難船ノ応場所差引方被仰付度奉存候、併海上

里数・港ノ程合並運賃方ノ儀、御船奉行・高奉行・御

代官夫々受持御座候間、猶又吟味被仰付度奉存候、弥

右通被仰付儀候ハ、琉球・道之島其外ノ場所ノ儀モ

右ニ準、其節々ノ御吟味次第差引方被仰付度御吟味仕、

此段申上候、以上、

寛政元酉十月十四日

御儉約掛

御裁許掛

一〇四四(の1)

一御借船ニテ江戸・大坂ヘ被差廻候節、於中途破船又ハ

水船等相成候節ハ、運賃米及返上方ニ候哉、被下切ニ

モ可相成哉、何分可申出旨致承知候、江戸・大坂御仕

登物積仕廻、送状通手形マテ請取、一ノ港出帆已後致

破船候節ハ、運賃米捨リ可被仰付、積仕廻ニテ一ノ港

不致出帆破船ノ時ハ半運賃ハ上納可申付旨、御規模^②模

ヲ以被仰付置、勿論他国御借船ニテモ御国法ノ旨申聞、

同断ノ御取計ニテ御座候、尤、水船等ニ相成候節、本

船痛所等モ無之、直ニ其船積付ニテ乗届方被仰付候節

ハ、運賃モ本形ニテ被差越、勿論本船不用立候ヘハ破

船同断^③ノ御仕向ノ筋ニ御座候ヘトモ、運賃差引ノ儀ハ

高奉行・御代官方受持ノ事候間、水船等相成候節ハ御

仕来ノ儀、尚又右両役ヘ御糺方被仰渡度奉存候、此段

申上候、以上、

天明八申十月廿六日

御儉約掛

御船奉行

(一〇四の2)

申八月四日

表方御代官

一本文調被仰渡相糺申候処、先年三百石積船主志布志ノ

(一〇四の3)

庄七、高岡与御米積登候処、日向灘ニテ及難船、運賃

本文シラへ被仰渡相糺候処、近例等見当リ不申、琉球

米等打捨リ、正米ハ種子島ノ市兵衛船へ積カへ被差登

道之島上リ船一之港致出帆候テ致破船候者模合方可為

濡米ハ入札①相成、運賃ノ儀ハ払捨リ被仰付候旨、辰

損、且難船ニテ致打荷候節ハ船頭水手着替①産、船道具ノ

三月十三日喜入主馬取次御証文ヲ以被仰渡候、当年江

外御物目成マテハ可為取揚由、御規模帳相見得申候、

戸御用材木積船日州御借船船頭清太郎於洋中兩度及難

然ハ破船依程合、時々御吟味ノ上運賃米返上可被仰付

船、乍漸兵庫へ乗届、アカ入ニテ船修甫無之候テハ江

事候、難船ニテ船頭水主飯料等持合無之節ハ、御物ヨ

戸へ難乗届、積登候材木大坂卸申渡候テハ、右積船江

リ一人ニ五合ツ、在所へ罷帰マテノ間可被成下旨相

戸運賃為被相渡置①寄候付、江戸交代ノ人余多有之、御

見へ候へハ、他国御借船ノ儀モ右ノ振合可被準哉、究

国船マテニテ足合不申候間、乗船申渡、運賃差引可被

テ難申上御座候間、何分御吟味次第奉存、此段申上候、

仰付哉ノ旨、大坂御留主居申出趣有之、調被仰渡、前

以上、

文志布志ノ庄七難船ノ例ヲ以、江戸運賃被下切被仰付

申八月

高奉行

方ニモ可有御座哉ノ旨申上候処、渡切等ノ儀シラへ

(一〇四の4)

ノ通被仰付旨、申六月九日小笠原郷左衛門取次御証文

此表、都テ御裁許掛吟味之通ニテ、場所割合ノ儀ハ諸

ヲ以被仰渡候、難船災殃ニ付テハ水船其外段々訳モ相

船頭書付通申付候条、如例可被申渡候也、

替管候へトモ、右両例ノ外見当リ不申候、此段申上候、

寛政元酉二月廿四日

御勝手方印

以上、

取次

小笠原郷左衛門

以上、

小笠原郷左衛門

一〇四五

一宝曆十四年申年、船持中相勞、依願翌酉年ヨリ先キ三ヶ年運賃一合部上リ被仰付候、

明和五 御船手調留

一〇四六

一出水御藏ヨリ内場へ繰リ入、島御統等ノ節、津畑マテ八百姓届、夫ヨリ台ノ上マテ百姓届ニテ、勞百姓致迷惑候付、依願津畑ヨリ台ノ上マテハ小廻①船ニテ浦夫計ニ被仰付、左候テ浦夫へハ届米一俵ニ付米一合ツ、御物ヨリ被成下候、

寛政十年午正月

一〇四七

一明和九辰十一月、西目船持トモ大坂・江戸行運賃部重ニ願出候付、御張紙ヲ以、左之通被仰渡候、
本文、去ル子年部重被仰付候節ハ、西目・東目船、琉球・道之島へ罷下リ、大坂へ間漕①回ノ節ハ部重不被下、

其外江戸・大坂へ運漕ノ船々マテ一合重被下候、以

下略、

明和九辰十一月廿八日 迫水善左衛門

一〇四八

一右同断ニ付、代官吟味ノ内、

明和二酉年、西東日州船持トモ部重願出趣有之、船持トモ一同ニ致困窮候方ニハ無之積ニ候ユへ、部重願難取揚事候、然トモ近年米直成下直有之ニ付テハ、酉年ヨリ先三ヶ年一合重被仰付候、日州①表ノ儀ハ当分ノ通被仰付置候旨、西七月廿日御証文ヲ以被仰渡候、末略ス、

辰十月廿八日

代官

一〇四九

一文化元年子二月、増田直治ヨリ長崎へ樟腦積船自立造立①力ニテ積届可申候間、大坂運賃三部一被成下度願出、御船奉行ヨリ半運賃ニテ被仰付度吟味申出趣有之、

此表、申出ノ通申付候条、如例可申渡也、

子三月六日

御勝手方印

相良兎毛

一〇五一

一文化元年子十二月、船主増田貞右衛門、川内表ヨリ内

場繰リ入米積届、大坂半運賃被成下候、

子十二月

取次
相良兎毛

一〇五〇

一文化元年子四月、屋久島御用平木過分有之、屋久島奉

行ヨリ積船申出候処、御船奉行ヨリ浦五枚帆御借り船
ノ儀申出候吟味書ノ内、

本文、御規ニテ被下方大概一往来日数四十五日ニシテ

五割引方ノ上、二百六十日六分三リ四毛被成下、諸入

目料ノ儀ハ八百目余ノ雜用相掛リ、別テ致迷惑候間、

御規ノ被下方被差置、大坂半運賃被下度奉存候、尤、

五枚帆一艘^⑨凡平木九千束積入、高ニシテ半運賃二十

一石九斗ニ相廻申候、末略ス、

此表、申出ノ通申付候条、如例可申渡也、

子四月廿日

御勝手方

相良兎毛

一〇五二

一延享三年寅正月、算用役有馬源五右衛門へ御船奉行ヨ

リ申越之内、

一屋久島へ御船並商船十五六反帆御材木積船ニ被差下候

付、於彼方積入、屋久島ヨリ山川前之濱へ積届候儀ニ

付、入目可申出旨承候付、左ニ申上候、

一御船荷方十六反帆一艘ノ積荷、廻角ニシテ八百本程積

入申候由、御船手諸船頭トモ申出候、

一右ニ付、山川ヨリ屋久島往来日数三十五日、且又山川

ヨリ屋久嶋へ罷渡、彼島ヨリ前ノ濱へ往来日数四十日、

船頭一日一人ニ真米一升ツ、無故実銀、其水手一日

一人ニ赤米一升ツ、雇水手一人往来文銀二十四匁、

梶取四部一重、一日一人ニ赤米七合五勺ツ、

一諸木平木ニシテ三万束程、運賃文銀三貫六百目余、

但、平木十束ニ付文銀一匁二分ツ、地方十六反帆

積荷、

但、宮之浦・長田・安房積出シ、栗生村ハ運賃三分

重、

右、地方船屋久島へ罷渡候往来日数ノ儀ニ付、内ノ浦

ノ清左衛門・志布志ノ弥三次船一年屋久島へ平木積船

ニテ罷渡候付、相糺候処、右清左衛門船ハ去年五月廿

日内之浦出帆、同廿一日屋久島へ着、同八月朔日屋久

島出帆、同三日山川へ着、同九日出帆、前之濱へ同十

一日上着仕候由申出候、且又弥三次船ハ屋久島宮ノ浦

丑八月三日出帆、同四日山川へ入津、左候テ、同九日

出帆、前之濱へ同十二日着仕候由申出候、在所ヨリ屋

久島へ出帆日数ノ儀不申出候、

一諸木平木ニシテ一万六千束余、屋久島船十六反帆積荷、

但、屋久島船ノ積荷不同故、帆一反ニ付千束余モ積

ニシテ、

一文銀四百目

右、諸木船得銀、

但、百束ニ付文銀二匁五分三厘五毛ツ、

一同三百九十六匁

船頭水手十六人、一人ニ付二十四匁ツ、船頭一人

二十二匁重、

一琉米七石二斗先

日数六十日程ニシテ船頭水手十六人飯米、一日一人ニ

七合五勺ツ、

右、屋久島船ニテ御用木積登候御規模、往来日数ハ大

体ノ考ノ由、

一屋久島船ニテ平木樽樽^(突カ)定料等積登候往来日数、二月ヨ

リ七月マテ廿日、又ハ八月ヨリ正月マテ三十日ノ御規

ノ由候へトモ、其通致往来候儀ハ夏冬相少キ事ニ候、

夏向日和合ニヨリ五六十日程モ相過考^⑧ノ由候、冬向ハ

別テ相滞、前年九月比積入候船、翌春ニ過リ致往来

事多々有之候、究テノ日数難考ノ由、屋久島方ヨリ問

合承候、末略ス、

寅正月六日

御船奉行

算用役へ

一〇五三

一延享三年寅正月、御船奉行ヨリ算用役へ書出、

一丑春江戸詰代合

一表方人数乗船十艘

但、十六反帆一艘取仕立入目文銀三貫七百三十目余、

船頭水手賃飯米船得^{①銀}、

一右同諸座人数乗船九艘

但、十六反帆一艘取仕立入目、右同断、

右ハ、江戸詰人数毎年春代諸座立ノ外、表方立人数乗

船取仕立、又ハ一年半ツ、ノ代合ニ候へトモ出方何程

可有之候哉可申出旨承候付、一艘分算用前致シ差遣候、

且又一年半ツ、ノ代合ニ候へハ、三年ニ一ヶ年右之通

出方ノ筋ニ相見へ申候、以上、

寅二月晦日

御船奉行

有馬源五右衛門^{①殿}

一〇五四

一真米五百二十石程

右ハ、享保十五戌年小倉筋 御下国ノ節、御船中御用

心米トシテ大坂御仕登米ノ内、右ノ石高御中途マテ被

遣置候由、帳内ニ相見へ申候、此節西目御乗廻ノ事候

へトモ、右米高大坂御仕登米ノ内、御中途上之関又ハ

下之関ノ間へ被遣置、自然御船中御用モ無御座候ハ、

大坂へ積登候様被仰付度、高奉行ヨリ申出趣有之、御

船奉行吟味ノ内、

本文、下之関へ被遣置可然旨、船頭トモ申出候、御船

中ニテ御用有之候テモ運賃ノ儀ハ大坂一上下被下先例

御座候、乍然御中途へ長々相掛事ニテ御座候ハ、大

坂一上下被下候テモ船頭トモ別テ迷惑仕事ニテ御座候

間、其節ノ時宜次第致吟味可申上候、以上、

延享四年卯二月十二日

御船奉行

一〇五五(の1)

一胡麻大坂御仕登ニ付、運賃米ハ米同前ノ由候へトモ、

胡麻ハ米ヨリ輕目ニ候間、菜種子運賃ニ準シ、積米ヲ

以運賃被下方可被仰付候、然ハ何程ノ積米被仰付可然

哉致吟味可申上旨被仰渡、承知仕候、依之申上候、胡

麻ハ大底菜種子ノ斤目^{①ニ}相並申候間、御仕登ノ節ハ菜

種子同前ニ一石ニ付一斗七升ノ積重被仰付、届胡麻一

石一斗七升ニテ米一石ノ当リヲ以、運賃米被仰付可然

哉ト申談候、乍然御吟味次第奉存候、以上、

享保二十年卯十一月八日 表方代官

御船奉行

(一〇五五の?)

此表、申出ノ通申付候間、如例可被申渡也、

卯十一月十日

御勝手方印

一〇五六

享保十二未九月運賃御定

一 船持トモ相勞候ニ付運賃一合重ミ、

一 銀百六十二匁五分

内、三十二匁此節重ミ、

百石積足船得銀、

一同四十三匁七分五リ

内、八匁七分五リ此節重ミ、

水手一人九十日分、

一同五十四匁六分八リ

内、十匁九分三リ此節重ミ、

梶取水手一人九十日分、

但、水手一人ノ四部一重、

一同六拾五匁六分二リ

内、拾三匁一分二リ此節重ミ、

船頭一人、

但、水手一人ノ半分重ミ、

上下略、

未九月廿三日

御勝手方印

鎌田太郎右衛門

一〇五七

一日州御仕登セ御米、他国借り船ヲ以、御法ノ運賃米三

部下リヲ以、借リ入方被仰付、去ル亥年ヨリ来ル午年
マテハケ年、池田庄左衛門・横山喜助へ被仰付候、

明和八年卯二月

(一〇三七号文書に同じ)

一〇五八

一屋久島船彼島御統米無運賃ニテ積届、過分ノ欠米相立、
船持トモ致迷惑候ニ付、運賃被成下度、島在島岡元千
右衛門ヨリ安永八年亥四月申出趣有之、御船奉行調へ
ノ内、

上略、道之嶋砂糖代米年々過分無運賃ニテ被差下、
屋久島ノ儀モ前々ヨリ御統米無運賃ニテ被差下事御座
候へハ、屋久島ニ限り運賃被成下候テハ前文砂糖代米
積船ノ儀モ訴訟ケ間敷可申出儀モ難計候間、只今之通
ニテ被召置、向後猶又御米受取渡例方等ニ付テハ龜末
無之様被仰渡置度、末略、

亥四月十五日

御船奉行

一〇五九

天明三年卯正月、館内ヨリ申出候内、

一上略、砂糖運賃ノ儀ハ、蔵方ノ砂糖出来高ノ内届
砂糖ニ限り砂糖運賃相渡申事候、乗間見次間砂糖モ仮
屋届ニテ候ヘトモ、右届砂糖ノ外ニテ訳相替候付、
以前ヨリ米運賃相渡候先例ニ御座候、

一使者役々自物砂糖ハ運賃銭ニテ相渡候先例ニ御座候、
右之通、三段ニ運賃相替居申候、尤、砂糖外ノ品物鬱
金等モ都テ米運賃相渡候先例ニ御座候間、砂糖積入候
トテ必砂糖運賃相渡候儀ニテハ無御座候、末略、

天明三年卯正月四日

仮屋守

在番親方

一〇六〇(の1)

文化四年卯

一此節加世田浦ニテ材木積入船運賃渡方ニ付、表方・帖
佐与方運賃部合不相並、奉得御差函趣御座候処、御勝
手方へモ基ヒ不相知、当分通ニテハ何ノ差支ニモ相成

候間、相当ノ所致吟味申出候様承知仕候、右ニ付テハ
専積場ノ依善悪、運賃高下可有御座候ヘトモ、御船奉
行吟味ノ上、運賃部合御治定被仰付事候ヘトモ、於当
座見当候所ヲ以遂吟味候処、加世田表ニテ積場不宜御
藏ノ儀ハ、伊作与両御藏ハ勿論、小松原両御藏ノ筋ニ
相見得居候、然ハ右御藏々ノ儀ハ有来通、大坂一部六
合五勺、江戸二部六合五勺運賃被成下、其外大坂七勺
下リ、江戸ハ一合四勺下リ被仰付候方相当可仕哉、併
張紙通、小松原積出由緒何方ヘモ委敷不相知儀ニ付テ
ハ、何レ積場甲乙細々被相糺候上、運賃定被仰渡度奉
存、此段申上候、以上、

卯七月廿一日

表方御代官

伊集院甚右衛門

(一〇六〇の二)

張紙

一 本文、加世田与大坂運賃、一部六合五勺、加世田与・

伊作与、

但、小松原御藏ヨリ積出候節ハ七勺ツ、可有差引、

一 右同、江戸運賃、二部六合五勺、加世田与・伊作与、
但、小松原御藏ノ儀ハ積入ノ節一合四勺ツ、可有差
引、

右之通運賃定、正徳三年丑七月十六日堀甚左衛門取次
御証文ヲ以被仰渡置候段、表方御代官所書留御座候間、
為御見合張紙ヲ以申上候、

卯七月廿一日

表方御代官

一〇六一(の一)

一 加世田表ヨリ御仕上ニ付、積場善悪ノ場所吟味仕申上
候様承知仕候、依之申上候、加世田小松原与御藏並伊
作与御藏々ヨリ積入方ニ付テハ、本船ノ儀ハヲノツカ
ラ片浦ヘ召置、小廻船ヲ以積入申場所ニテ、外ニ本船
掛場所等無御座候、此已前小松原与御藏ヨリ積入方ニ
付テハ、本船ノ儀ハ小松原川ヘ乗入積入為仕儀ニテ、
別テ最安ク御座候ヘトモ、近年ハ右川浅ク罷成、本船
乗入申儀相叶不申、無是非本船ヲ片浦ヘ繫置、小廻船
ヲ以積入申外無御座候間、此段申上候、以上、

卯七月廿六日

諸船頭

(一〇六一の二)

本文、加世田表ヨリ江戸・大坂行運賃、小松原積出外ハ七勺下リト御勝手方御張紙ノ内ニ有之、段々被相糺候ヘトモ基ヒ不相知候付、右御張紙通ニテハ小松原ノ方ハ積場不宜、夫故不及引方、外場所ハ引方有之候筋相見ヘ、当分通ニテハ向々致両様、差支ニモ相成候間、相当ノ所致吟味申出候様承知仕候、右運賃ノ儀ニ付テハ当座ヘモ基ヒ相知不申候ヘトモ、加世田表運賃ノ儀ハ、正徳三年丑七月十六日堀甚左衛門取次御証文ヲ以爲被仰渡置趣、御代官張紙ニモ相見ヘ、其外別段七勺下リ被仰渡置候趣ハ御代官方ニモ相知不申候由、乍然帖佐与方御代官所ニハ、大坂行ノ節ハ運賃表方同様ニテ、江戸運賃ハ小松原・大浦・小浦御藏御藏米積入方ニ付テハ一合四勺下リト書留有之候由、御代官書面ニモ相見ヘ申候ニ付、加世田表ヨリ江戸行ニ付テハ小松原・大浦・小浦御藏米積入候節ハ書留通ノ運賃爲被成下事哉ト掛合仕候処、近年加世田表ヨリ江戸行無之、

運賃相渡候儀無之故、不相知旨返答相達申候、左候ヘハ、是マテハ正徳年間御定通ニテ運賃爲被成下筈御座候間、加世田表積場差別善悪ノ程合諸船頭トモヘ吟味爲仕候処、本船ヲ片浦ヘ召置、加世田与・伊作与御藏々ヨリ本船ヘ御米積入候場所ノ由申出候、尤、以前ハ小松原御藏御米積入方ニ付テハ本船小松原川へ乗入積入方爲致場所ノ由ニ付、御米積入方ニ付テハ^①最安ク爲有之筈ニテ、同方限ノ内ナカラ小松原マテ運賃引方爲被仰渡置筈候ヘトモ、当分ハ右川筋ヘモ難乗入、本船片浦ヘ召置積入方仕由候間、運賃引方ニ不及被成下方ニモ可有御座候哉、尤、小松原外御藏々ノ儀ハ御米積入方ニ付テモ場所柄平等ノ所ヲ以運賃引方無之筋、正徳年間御証文ヲ以被仰渡置、是マテ右定通ニテ運賃爲被相渡筈ニテ、帖佐与^②御代官所書留通ノ運賃相渡候儀相知不申候ニ付テハ、是迄ノ通御定通ニテ被召置方ニモ可有御座哉、併高奉行ヘモ吟味被仰渡、何分御沙汰次第奉存候、以上、

卯八月八日

御船奉行

一〇六二

宝曆十二年午

一御仕上船御法ノ積石外積重ノ分運賃五部一引方被仰渡、

午十月朔日 御証文

一〇六三

一西元仁兵衛ヨリ他国船借入、一部運賃ヲ以日州ヨリ内

場繰入米被仰付、

天明七年未三月三日 御証文

一〇六四

一阿久根ノ源兵衛船、大島ヨリ琉球へ唐人送届、大坂一

運漕運賃被成下候、

天明六年午十一月三日 御証文

一〇六五

一大根占ノ庄次郎船、沖永良部島下リニテ致越年、島方

凶年ニ付、琉球へ飢米積船トシテ差越、大坂積石ニ相

掛二部運賃被下候、

天明七年未八月廿日 御証文

一〇六六

一口之島ノ助右衛門船、江戸御用材木積船ニテ伊豆ノ内

外浦ニテ致破船、右ノ材木阿久根ノ七左衛門船江戸マ

テ積廻リ、大坂一上下ノ運賃被成下、拜借米差引返上

ニテ琉球秋下リ明合次第、一被仰付、

天明七年未九月廿三日 御証文

一〇六七

一阿久根ノ龜助・白和町ノ庄助、クリ入米積入、六部一

運賃被成下候、

天明六年卯八月九日

一〇六八

一内之浦ノ惣右衛門船、喜界島下リニテ米大豆其外品物

積入、横目乗船相勉、登ノ節又々横目乗船ニテ、砂糖

ノ儀ハ外船ヨリ積登、惣右衛門ニハ尺莖三十束余積入候御取訳ヲ以、大坂運賃被成下候、

天明六年午十月朔日 御証文

一〇六九

一折田傳次郎船、徳之島ヨリ琉球へ唐人差送候付、大坂運賃被成下候、江戸行候モ御心付被仰付、

天明六年午十二月十七日 御証文

一〇七〇

一返上物積船へ砂糖運賃不相渡、平古米船へ相渡置候運賃砂糖割合ニテ返上物船へ相渡、引替返米ハ現米ヲ以平古米船へ相渡候様被仰渡、

天明六年午十二月八日 御証文

一〇七一

一肝付表ヨリ内場クリ入米、柏原ノ武兵衛四枚帆ニ積入、御米百八拾石積廻、大坂運賃三部一被成下候、

天明三年卯四月十三日

一〇七二

一阿久根ノ亀助船、江戸御作事方材木積船ニテ御用ノ鉢植入、外足ハ輕メニ候ヘトモ内足セキ候ニ付、船持前ノ運賃被成下候、

安永九年子五月十一日 御証文

一〇七三

一返上物積船御定ノ焼印限積入、砂糖運賃外ハ粟ヲ以相渡候様被仰渡、

安永九年子十月廿五日 御証文

一〇七四

一京泊ノ庄八船、前之濱ヨリ江戸御統材木積船ニテ相廻シ候付、川内表ヨリクリ入米積廻候処、江戸御用船ノ方被差留、クリ入米ニ付テハ大坂行三ヶ一ノ運賃被成下、内場川内ヨリ江戸行ニ付テハ御心付被仰付、一上

下積重本運賃被仰付候旨被仰渡、

安永八年亥七月廿五日 御証文

一〇七五

一 沖永良部島ヨリ大島卸カヘニテ砂糖積登候節、御物ハ半運賃ニテ候ヘトモ、諸人自物ハ相對運賃ニ被仰渡、

享和三年亥二月十三日

但、御代官ヨリ自物砂糖モ半運賃ノ筋申上、酉十月十八日御証文ヲ以其通被仰付置候ヘトモ、此表御船奉行吟味ノ趣申上、本行之通相成候、

一〇七六

一 喜界島御統米柏原ノ市兵衛船積下リ江戸運賃被成下候、

安永三年午四月七日

一〇七七

一 内之浦須田儀兵衛船、江戸御統米積船被仰付置候處、

被召留候付、運賃半方被下、残り取込運賃三上下返上

被仰付候、

天明七年未四月十四日 御証文

一〇七八

一 京泊川口へ中乗船致乗船居候處、江戸御屋敷御類焼ニ付浦船御用有之、出帆被差留、中乗罷帰候様被仰渡、

其節、船得銀・船頭水手海上飯米賃銀ノ儀ハ半分ツ、返上申付、余銀ハ船三上下皆返上可申付、水手賃飯米ノ儀ハ応勤日数割ヲ以相渡、差引余銀ハ早速返上被仰付候旨被仰渡、

宝曆十二年午十月五日

一〇七九

一 大坂御仕上御米船、御船浦船トモ帆一反ニ付米一石五斗ツ、積米被仰付、浦船へハ御法ノ運賃被下、右重石積入候テモ猶輕足ノ船ハ、応船ノ積石相重可被仰付旨、去亥八月廿三日御証文ヲ以被仰渡置候、当年ノ儀諸所トモ田畠出来方相成聞得御座候へハ、御仕上米ノ例

年ヨリ被相重方ニモ可有御座哉、日州表ノ儀地船相減候故、依石高不足可仕哉、依之任上代官吟味仕、重石トモ可積入船ハ船足限ニ積入、倉岡川口番所詰横目役々見分仕候様被仰渡候テハ如何可有御座哉、尤、積重ハ罷下候砌吟味仕、積石相究可申上ト申談、此段得御差図申候、以上、

宝曆十年辰八月廿五日 御船奉行

一〇八〇

一増新造作立積重願出候者、御定一石五斗ノ外、依願ノ積重石高ニ相掛運賃米、此節ヨリ五部一減少申付候間、先達テ積重差免置候船々モ右之通運賃重可相減候、左候テ、已後積重願出候者ハ御船奉行・代官承届之、御定之焼印限積重差免、右之通運賃重相減候様申付候条、如例可被申渡也、

宝曆十二年午十月朔日 御勝手方印

小林中太兵衛

一〇八一

一江戸大坂何方御用船ニテモ、於中途破船又ハ水船ニ相成、其外打荷等致シ候節、運賃差引方夫々御規有之、逢難船難乗届、積替等相成候節モ、都テ被下切被仰付来候ニ付、去酉二月御吟味ノ上、里敷ノ割ヲ以可被下旨被仰渡置候処、其後森尾町ノ万吉川内表ヨリ江戸船続米積登、牛深沖ニテ及難船、運賃差引方ノ儀願出、都テ払捨被仰付候、左候テ、已来ノ儀ハ其節ノ成行ヲ以致吟味申出候様被仰渡置候へ共、難船故ヲ以難乗届、積替ニ相成候節ハ、去ル酉年仰渡通相心得候様被仰付候、此旨御差図ニテ候、以上、

寛政五年丑十二月廿五日 迫水善右衛門

御勘定奉行衆

御船奉行

高奉行

代官

一〇八二(の1)

一寛政三年亥三月、町田監物家来山元伊兵衛ヨリ江戸行旅船御借船差出候付、運賃五割引御免被仰付度願出趣有之、御船奉行吟味ノ内、

右之通願申出候付、先例見合申候処、去冬内ノ浦ノ鉄之助ヨリ他領船借入、御作事方ヨリ江戸御統品積登候ニ付、運賃五割引御免被仰付度願申出、戌十二月二日ノ御証文ヲ以申出之通被仰付候間、右伊兵衛ヨリ借入差出候旅船ノ儀モ五割引ナシニテ運賃被相渡[㊦]候様被仰渡△奉存候、末略、

亥三月十八日

御船奉行連名

(一〇八二の2)

此表、御船奉行申出ノ通申付候、末略、

亥三月廿三日

御勝手方印

取次
松崎次左衛門

一〇八三(の1)

一寛政元酉秋、森尾町ノ萬吉山崎出物蔵並祢答院与模合

方取納米ノ内、江戸御統トシテ積方[㊦]被仰付候間、酉十

二月三日川口致出帆候処、牛深沖ニテ及難船、都テ濡米相成、入札払相成、右届石ニ相掛運賃米四部一被成下、四部三上納被仰付候旨、戌六月四日御証文ヲ以被仰渡候処、勞船持領主ノ災殃ニ付右上納米年府返上被仰付度、戌八月万吉ヨリ願申出趣有之、御船奉行吟味ノ内、

上略、右体ノ難船ハ破船同様ニ船主[㊦]可及迷惑事

候間、災殃故ノ御取分ヲ以、以来ハ前方ヨリノ御規通り無差引方被仰付度吟味仕候、勿論破船難船ノ内ニモ何ソ訳合相替候節ハ、其節々ノ成行ヲ以テ猶又御吟味モ可被仰渡儀ニ奉存候、右通於被仰付ハ万吉船運賃米無差引方ニ被仰付度奉存候、末略、

戌九月十九日

御船奉行

(一〇八三の2)

此表、御借船江戸・大坂へ差廻リ候砌、於中途難船等ノ節、運賃米ノ儀ニ付テハ去酉年申渡置趣有之、万吉船ノ儀モ運賃ノ内四部三上納ノ筋申渡置候へトモ、右

船ノ儀ハ帆柱切折水船ニ相成、破船同前ニテ一通ノ難
船トハ訳モ相替候旨、役々致吟味申出趣無廻筋ニ候間、
取分ヲ以御船奉行吟味ノ通、運賃米払捨リ申付候、尤、
已後右体ノ儀ニ付運賃上納方ノ儀ハ去年申渡置通ニテ、
其節々ノ成行ヲ以、致吟味可申出候、右ニ付テハ如例
可被申渡也、

戊十一月十八日

御勝手方印

小笠原郷左衛門

御勘定奉行

御船奉行

高奉行

御代官

一〇八四(の1)

文化元子十二月船持中ヨリ願書ノ内

一徳之島諸人自物届砂糖百斤ニ付運賃拾四斤ツ、相請取
申候、

一喜界島右同ニ付拾斤ニ合ツ、相受取申候、

一大坂仕登砂糖運賃樽一挺ニ付銀四匁五分ツ、相定居申
候、

一本琉球自物荷運賃ノ儀、近年届二百五十斤一石間ニテ
錢一貫文ツ、ニ相成申候、左候得ハ一挺ニ付四百文ニ
ハ当リ不申、中略、館内届砂糖モ百斤ニ付二十三
斤五合七勺ニ御定被置候付、於琉球御法ノ通相受取申
儀ニ御座候、然ハ自物運賃モ右ニ準筈ニ御座候、乍然
前方ハ琉人自物砂糖二百五十斤一石間ニ付銀八匁、其
外諸物右ニ準シ相定、諸人自物ノ儀モ同断相請取来タ
ル由御座候処、近年右通無其儀、迷惑仕罷居申候ニ付、
何卒先達テモ奉願候通、砂糖二百五十斤一石間ノ運賃
錢一貫八百文ツ、相受取候様、御免許被仰付被下度奉
願候、末略、

子十二月

琉球下リ船持中

(一〇八四の2)

上略、前方モ一石間ノ運賃錢一貫八百文ツ、相受
取来候由ニ付、右之通相渡候様願出候付テハ其通り相
渡候筋被仰付度、末略、

子十二月十二日

御船奉行

(一〇八四の3)

本文、諸人自物運賃ノ儀、館内届運賃ヨリ三四百文程
引入、荷主船持双方トモ迷惑不相成様可被取計候、左
候テ、琉球在番奉行へ右之趣御船奉行ヨリ可申越候、
此旨御差函ニテ候、以上、

丑五月廿九日

高田権太夫

右ニ付、何程⑧位引下ケノ処、吟味役大場市左衛門へ相
尋候処、三百五十文ニテ可然段承候事、

一〇八五

物奉行⑧

下町池田庄左衛門

横山喜助

右ハ、日州表仕登米積船差支、此跡登セ方段々相滞候
処、⑧法ル午年ヨリ右両人請合ニテ年々積出方無遅滞相調
候、然処ニ、来亥年ヨリ運賃米三部下リヲ以可積登旨、
船頭トモ受合証文取付、此節願申出、願之通申付候、
右ニ付テハ往々過分ノ御為筋相成候、先キニ受合通、

慥成方ニ相見へ候ハ、到其節心付申付筋合モ可有之

候条、何ソ見立ヲ以願出候ハ、不差障儀ハ吟味ノ上
可申付候、此旨可申聞候、

右、如例申渡、町奉行・御船奉行へモ可申渡候、

安永七年戊十二月廿日

(赤松則正)
造酒
(宮之原通直)
主膳
取次

小笠原郷左衛門

一〇八六(の1)

明和八年⑧卯

一此節就 御下国御船中御用心米トシテ、三百三十石積
船主船間島⑧津ノ喜助船、御蔵入方並模合方取納米ノ内積
登筭ニ付、上之関辺マテ参居、御船へ相付長崎へ相
廻リ、長崎ヨリ又々御船へ相付久ミ崎へ 御着船已後、
直ニ大坂へ積登筭候故、京泊ヨリ上之関マテ、上之関
ヨリ長崎、長崎ヨリ久ミ崎マテ、海上道法相糺候処、
三百廿五里程ノ里数ニ相見得候間、川内表ヨリ大坂マ
テノ運賃、一部五合ノ割ヲ以、応里数相賦候へハ、大

坂運賃ヨリ相重申候へトモ、夫長ケハ方々へ相廻り日
数モ相重申積ニ御座候間、割合之通被下方ニモ可有御
座哉、又ハ久ミ崎御着船マテノ間、大坂マテノ定式運
賃被下筋ニモ可被仰付哉、御船へ相付諸所へ相廻、長
崎御滞船中モ滞船仕罷在筈ニ御座候へハ、水手雇入ニ
付テモ賃銀相重、船中飯中等モ入増賦候間、何レ相当
ノ重運賃不被仰付候テハ迷惑仕積ニ存申候、右通船中
日数相重積御座候へハ、上乘ニモ飯料差支申筈御座候
間、是又重御賦被仰付度存申候、 末略、

卯五月三日

帖佐与御代官

(一〇八六の2)

本文調へ被仰付相糺候得トモ、類例見当不申候間、吟
味仕候処、本文御用心米積船ノ儀、御通船前以、上之
関辺へ被差越置ノ由候へハ、大坂里数ヨリ相重申候、
左候へハ日数モ相込申筈候間、川口出帆ヨリ上之関又
ハ長崎滞船、久見崎^②マテ上乘御賦方、往来日数御旅
御船奉行方証文ヲ以、一日銀九分・真赤米五合ツ、被
下方ニ^①モ可有御座哉、石員教大坂上乘御賦、上り九

十日銀八十一匁・真赤米四斗五升ツ、被下割方ニテ御
座候、 中略、 運賃米ノ儀ハ代官吟味書相見得候通、
大坂御仕登運賃米ノ割ヲ以、船中応里数、重運賃米被
下度候、 末略、

卯五月十四日

高奉行

(一〇八六の3)

此表、高奉行シラへノ通申付候条、如例可申渡也、
卯五月廿日

御勝手方印

取次
小林中太兵衛

御船奉行

高奉行

代官

一〇八七(の1)

享和二戌二月

一指宿ノ濱崎太平次船二十三反帆一艘、享和元年酉四月
十七日御証文ヲ以、琉球永々下リ被仰付置候処、於琉
球運賃米砂糖差交セ相渡候付、太平次ヨリ御証文通砂

糖運賃相渡候様願出趣有之、御船奉行吟味、

一 上略、然ハ、当年ヨリ已来砂糖ニテ相渡候御免ノ

船ハ、右船ニ不限、米不差交、砂糖運賃相渡候様被仰

付度、

戊六月廿三日

御船奉行

(二〇八七の?)

此表、申出之通申付候条、如例可申渡也、

但、琉球在番ヘハ御船奉行ヨリ可申越候、

戊六月

御勝手方印

高田猛太夫

御船奉行

一〇八八

享保十二年未十一月御定

一 写

大島 鬼界島

一米並春粟運賃二部二合七勺

外ニ五合、此節下リ、

一尺筵・芭蕉百斤①運賃一部二合五勺

外ニ三合、右同、

一小麦運賃二部八合

外ニ七合、右同、

一黒砂糖百斤運賃十二斤

外ニ一斤、右同、

徳之島

一米並春粟運賃三部二合七勺

内、三合、此節重、

一春大麦小麦運賃四部三合

内、四合五勺、右同、

一尺筵百枚ニ付運賃拾七枚

内、一枚、右同、

沖永良部島

一米並春粟運賃三部五合七勺

内、四合、此節重、

一春大麦小麦運賃四部六合

内、六合、右同、

一尺筵百枚ニ付運賃十九枚

内、二枚、右同、

與論島

一米並春粟運賃三部七合七勺

内、五合、此節重、

一大麦小麦運賃五部

内、七合、右同、

一尺筵百枚ニ付運賃二拾一枚

内、二枚七合、右同、

沖永良部島

一苧芭蕉百斤ニ付運賃拾九斤

徳之島

一苧芭蕉百斤ニ付運賃拾七斤

與論島

一苧芭蕉百斤ニ付運賃二拾斤七合

右三島ヨリ積登候芭蕉、差荷ヲ以差上ル事候ヘトモ、

向後運賃右之通申付候、

右ハ、道之島下リ船、大島・喜界島ヘハ望ノ船モ多候

ヘトモ、徳之島・沖永良部島ノ儀ハ船賦申付候テモ断

等申出、平等ニ無之由候、依之、此節ヨリ右之通運賃

上ケ下ケ申付候条、得其意、諸事如例可被申渡也、

但、道之島代官ヘハ爰元代官ヨリ可申越候、

未十一月十五日

▽御勝手方印
取次△(㊦)ニヨリ
宮之原甚太夫

御勘定奉行

御船奉行

代官

物奉行

一〇八九

享保十四年^{④西}

一写

喜界島

一米・春粟運賃二部七勺

外ニ二合、此節下リ、

一尺筵百枚・苧芭蕉百斤ニ付運賃一部二合

外ニ五勺、右同、

一小麦運賃二部六合

外ニ二合、右同、

一黒砂糖百斤ニ付運賃十一斤半

外ニ半斤、右同、

一屋久島卸米積上リ候船者、右島々運賃ノ外二合五勺重、

外ニ大島・徳之島・沖⑨之永良部島、定略ス、

右ハ、常々島下リ船ノ儀、大島・喜界島へハ望ノ者多

候へトモ、徳之島・沖⑩之永良部島ノ儀ハ船賦申付候テ

モ断申出由候故、去々末年、右島々運賃上ケ下ケ申付

候へトモ、大島下リヲ第一願出、次ニ者喜界島ヲ志、

徳之島・沖之永良部島者下リ兼、取分ケ沖之永良部島

下、色々断申出由候、右通ニテハ船持トモ平等無之候、

依之、右之通運賃上ケ下ケ申付候、且又、徳之島ヨリ

屋久島卸米申付置候処ニ、屋久島へ乗届候儀不勝手有

之由ニテ、先年段々訴訟申出、卸米高ノ内半分程ハ山

川届ニ申付、屋久島船御用米積上リ、帰帆便ヨリ積下

リ候様ニ申付、残り半分程ハ徳之島ヨリ直ニ屋久島へ

積上セ候様申渡置候処ニ、此卸米船申付候船頭トモ致

迷惑ノ由候間、卸米屋久島へ積届候船定式運賃ノ外、

為心付重運賃右之通申付候、卸米ノ内、山川届申付候

分ハ重運賃ニ不及、定式ノ運賃申渡、右米如有来屋久

島船帰帆便ヨリ可差下候、徳之島へ御米差下候節ハ余

島ヨリ卸米積上セ候由候間、是又同前ニ心付ノ重運賃

可申付候、頭ニテ卸米積不申付船、依日和合屋久島へ

致漂着、卸米ニ申付候カ、又ハ屋久島へ直ニ卸米船山

川へ致漂着、自然依沢山川上納申付候儀モ有之候ハ、

重運賃ニ不及、定式ノ通運賃可申渡候、尤、右段々ノ

通、運賃上ケ下ケ並卸米船重運賃ノ儀、先今程申付置

事候、若先様差支訳モ有之候ハ、其節何分ニモ時宜

次第⑭可申付候間△得其意諸事如例可被申渡也、

但、道之島代官へハ可申渡候、

西十一月廿九日

御勝手方印

伊集院十藏

御勘定奉行

御船奉行

物奉行

代官

本三匁五分

右同三匁二分

一鬱金一俵

皆凡百六斤

本四匁

右同三匁五分

一鯉節一俵

皆凡十貫目

本通

右同五匁

一硫黄一俵

皆凡七十斤

本通

右同二匁

一菜種子一俵

六斗入

本通

右同四匁五分

一海人草一俵

皆凡百五十斤

本通

右同四匁

右之通申合申候間、此段御届申上候、以上、

戊二月

水間次郎左衛門

一黑砂糖一挺

池田十右衛門

本四匁五分

濱田休左衛門

一生蠟一俵

森山寛二

本三匁五分

右同三匁二分

一煙草一俵

皆凡七拾斤

御役所

文化十一年戊

口上覚

一市中大坂商荷仕送運賃銀高料ニ有之候故、御仕送方御

借船ノ御御差支ノ訳モ有之候間、引下ケ候様取計、其

届可申出旨被仰渡、依之、大坂仕登人数打奇運賃銀下

方仕、左ニ奉申上候、

一黒砂糖一挺 皆凡百四拾斤

本四匁五分 運賃銀四匁

一生蠟一俵 皆凡九拾斤

本三匁五分 右同三匁二分

一煙草一俵 皆凡七拾斤

一〇九一(の1)

口上覚

一 黒砂糖一挺

皆凡百四拾斤

本四匁五分

運賃銀四匁

一 生蠟一俵

皆凡掛九拾斤

本三匁五分

右同三匁

一 煙草一俵

皆凡掛七拾斤^①

本三匁五分

右同三匁三分^②

一 鬱金一俵

皆掛百六斤

本四匁

右同三匁五分

一 經節一俵

皆掛十貫目

本通

右同二匁

一 硫黃一俵

皆掛七十斤

本通

右同二匁

一 海人草一俵

皆掛百五十斤

本通

右同四匁

一 菜種子一俵

六斗入

本通

右同四匁五分

右ハ、市中ヨリ大坂仕送仕候商荷運賃銀高料ニ有之、

御仕送方御借船ノ節御差支ノ訳モ有之候間、引下方取

計候様、上下町御仕送方掛人数へ被仰渡趣有之、運賃

銀右之通引下方申談申上候間、市中差支有無吟味仕、

何分可申上旨、被仰渡候趣承知仕、依之吟味仕候処、

先年ハ上方仕送荷利潤有之、運賃銀相当爲仕由御座候

へトモ、近年商人トモ仕送荷、上方表不景氣ニテ利潤

薄ク、当時ノ振合ニテハ運賃銀高料ニ相見得候由承及

申候間、右之通引下方被仰付候ハ、商人トモ、難有

奉存筈ニ御座候、右ニ付テハ市中何ソ差支ノ廉相見得

不申筋ト吟味仕、此段申上候、以上、

戊二月

下町年行司

桑原次太郎

右同年寄

酒匂次郎兵衛

上町年行司

和田孝太郎

右同年寄^③助

和志武伊助

三町惣年寄

池田庄左衛門

町奉行所^④

(一〇九一の2)

本文吟味被仰渡致承知、町役トモへ吟味申渡候処、別紙之通、市中何ソ差支ノ廉モ相見得不申候旨承届申候間、此段申上候、以上、

戌二月廿三日

町奉行

(一〇九一の3)

此表、申出ノ通申付候条、如例可申渡也、

戌三月七日

御勝手方印

取次
伊東仙太夫

町奉行

御船奉行

御仕送掛

川米

一〇九二

取納米拾石ニ付

一真米一斗一升七合二勺起

右、宮之城穴川並虎井御蔵ヨリ東郷白濱マテ道法四里^⑧船賃、

但、享保十一年午十一月十六日御証文、

一〇九三

右同拾石ニ付

一真米九升起

右、山崎ヨリ東郷白濱マテ道法三里川船賃、

享保十一年午十月十二日 御証文

一〇九四

右同拾五石四升積一艘分、石ニ付一升七勺二才宛、

一真米一斗六升一合三勺起

右、赤谷ヨリ他領中村マテ道法六里^⑧船賃米、

享保八年卯十月廿三日 御証文

一〇九五

御物米川①船 賃銀定

米拾五石四升積ニシテ川船一艘賃

一銀五匁九分 文銀ニシテ八匁八分五リ

右、高岡組・高城組御蔵米、赤谷ヨリ他領中村マテ、

但、浦ノ名出物蔵同断、

米拾石八斗八升積ニシテ右同断

一銀四匁八分二リ五毛 文銀ニシテ七匁二分三リ七毛

右、宮之城穴川並虎井御蔵米、東郷白濱マテ、

米拾石八斗積ニシテ右同断

一銀三匁六分 文銀ニシテ五匁四分

右、山崎御蔵米、東郷白濱マテ、

一真①米一升五合起 川米

但、虎井並虎井取納米一石ニ付百姓出米、

一真米一升一合起

山崎右同、

一真米一升七合五勺先 起ニシテ一升六合六勺六才六

但、高城山下御蔵ヨリ赤谷マテ道法一里半、右同、

一真米四合四勺起

右、深年ヨリ綾マテ右同川米、

一〇九六

文化六年巳六月、久見崎御船手ヨリ糺方ニ付、

覚

一爰元出物御蔵ヨリ江戸・大坂・島方御統、又ハ内場繰

入米等ノ節、御船台ノ上マテ御米届方運賃、川米何方

ヨリ差出事候哉、御物払又ハ百姓届ノ訳可申出旨被仰

渡趣承知仕候、百姓トモヨリ爰元出物御蔵へ上納仕候

節、東郷白濱マテ三里一石ニ付一升ツ、上納仕候処、

東郷白濱ヨリ本船マテ江戸・大坂・島方御統米等ノ節、

重川米トシテ其節応積高、水引船間島本船マテ一里一

石ニ付三合三勺三才ツ、ノ割ヲ以、百姓トモヨリ上納

仕申候間、此段御届申上候、以上、

巳六月十九日

山崎横目

帖佐市助

右同郷士左寄

帖佐平右衛門

久見崎御船手

一〇九七

覚

一 届米一石ニ付川米一升

但、山崎ヨリ東郷白濱マテ道法三里、

右ハ、御藏附郷百姓トモ毎秋上納仕候節、上納米ノ応石高ニ、届御米一石ニ付一升ツ、其割ヲ以上納仕置申候、

一 届米一石ニ付重川米三合三勺三オツ、

但、道法一里分、山崎ヨリ東郷白濱マテ三里一升ノ

割、

右ハ、江戸・大坂御仕登セ米並島方御統米、内場繰入等ノ節ハ、東郷白濱ヨリ本船マテ道法並津下米積石ニ相掛ケ、右ノ割ヲ以、重川米御藏付郷高割ニテ、下代並出物藏役人衆ヨリ取納有之、川船へ被相渡候、

一 久見崎御統米ノ儀モ山崎ヨリ東郷白濱マテ届米一石ニ付川米一升ツ、且又白濱ヨリ久見崎マテ道法四里、

右ノ割ヲ以、重川米下代並出物藏役人衆ヨリ同断被相渡候、

右ハ、山崎出物藏ヨリ江戸・大坂・島方御統、内場繰入等ノ節、御船台ノ上届、中略、爰元両御藏ノ儀、御米津口^下ノ節、右申上候通ニテ、一ヶ年両三度ツ、藏付郷割方ノ上、取納有之候、未略、

文化六年巳六月廿四日

山崎横目

肝付定左衛門

郷士年寄

帖佐平右衛門

久見崎御船手

一〇九八

覚

一 限之城

爰元御藏並出物藏ヨリ江戸・大坂、内場繰入米等有之節、御船台ノ上マテ届方ノ儀、御藏付郷百姓夫立ニテ相届候段、出物藏役人衆ヨリ被申出候由、然ハ樋脇・百次・山田等マテハ御藏付郷ノ管候故、郷々ノ儀ハ現

夫差立候哉、又ハ諸人等有之、諸方ニテ届方引受候者

モ有之候哉、於其儀ハ百姓ヨリ受錢何程位ニテ引受候

哉、右等ノ儀細々相糺可申上旨被仰渡、左ニ申上候、

一向御藏付郷、百次・山田・樋脇ノ内、市比野村・限

之城、

右之通御座候、久見崎御藏へ御統米ノ儀、百姓届ニテ

御座候、尤、夫一人ニ付十俵負ニテ、川船運漕賃一俵

ニ付十四文ツ、差出、川船ノ儀ハ百姓へ持合ノ者無御

座故、船水手トモニ町家ヨリ雇方仕来申候、尤、右付

郷ノ内、樋脇市比野村ノ儀ハ遠郷故、受負ニテ夫一人

ニ付二百文ニテ引受候者有之由、運漕賃ノ儀ハ先例ノ

通、応俵数二百文外ニ請取来申候由、

一出物藏付郷、串木野・百次・山田・樋脇市比野村・中

郷・高城・水引・高江・限之城、

右之通御座候、右ノ内、樋脇市比野村ノ儀ハ受負ニテ

先条同断ノ由、

右ハ、御用見合ニ付相糺可申上旨被仰渡、相糺申候処、

右通御座候間、此段申上候、以上、

文化六年巳六月廿五日

横目

川原助左衛門

郷土年寄

木原六郎左衛門

久見崎御船手

一〇九九

一江戸・大坂・島方御統米、御船ニテ被差遣候節ハ百姓

届、売船ノ節ハ船頭請込ニテ御座候、

一内場繰入米百姓届、

一久見崎御統米右同、

右之通、是マテノ仕向ニ御座候、末略、

文化六年巳六月廿二日

⑩比

川内与西方下代
貴島新左衛門

久見崎御船手

一一〇〇

覚

山崎

一山崎御藏ヨリ江戸・大坂・島方御統又ハ内場繰入、久

見崎御統ノ節、百姓届ニテ候哉、又ハ御物ヨリ届賃被成下候哉可申出旨被仰渡、御船積入ノ節ハ本船マテ百姓届、浦船積入ノ節東郷白濱マテ百姓台ノ上届ニテ御座候、且又久見崎御統ノ節ハ御蔵元ヨリ百姓届ニテ御座候間、此段申上候、以上、

文化六年巳六月廿七日

郷士年寄

帖佐平右衛門

久見崎御船手

一一〇一

覚

高城郡高城

一 江戸・大坂御統米御船ニテ被差遣候節、台ノ上ニテ百姓届、売船ノ節ハ船頭請込ニ御座候、

一 内場繰入米並久見崎御統米ノ節、右同断台ノ上ニテ百姓届ニテ御座候、

右之通御座候、已上、

文化六年巳六月廿六日

郷士年寄

上床周兵衛

久見崎御船手

一一〇二(の1)

一 菱刈組・祇答院与御蔵取納米其外万上納米、一石ニ付川下米一升三合ツ、山崎与取納米一石ニ付一升ツ、納人ヨリ致上納置、江戸・大坂御仕上届運賃、島方並久見崎御統、其外諸方川米相付払方有之事御座候、依之申上候、国分与・福山与取納米一石ニ付錢六十四文、諸物代一貫文ニ付十文ツ、其外村々ニ依テ多少有之、渡錢相納置、御米津廻船賃払方有之、尤、諸物代ノ内金山統等ニ相成候節ハ百姓ヨリ直ニ付越申事候故、其外ハ渡錢被通下事御座候ヘトモ、其蔵ヨリ直払ニ相成候分ハ渡錢御物へ相残申事候間、菱刈組・山崎組・祇答院組川米ノ儀、江戸・大坂御仕上米、内場繰入、島方並久見崎御統、其外入札御払米大坂直廻等ヲ以申受相成候節、届石マテニ川米被召付、運賃其外ノ御払方川米ニ不及筋ニ被仰付、如何可有御座哉、左候へハ、相納置候川米相揃筋ニテ乍纔モ御出方ニ相見へ申候、尤、日州表御蔵々ノ儀、夫々川米相付申事御座候間、是又同様ニ被仰付度、且又、外場下代ニ差越候

人一組ニ三俵ツ、宿差続トシテ寄替米願申出、御藏元
へ致上納、受取見届候上返米御当地御藏ヨリ相渡申事
御座候処ニ、内場御米差支候砌ニハ運賃付ヲ以繰入被
仰付候御米返米ニ被仰渡筋ニ御座候間、御藏元へ上納
節ハ大坂半運賃付ヲ以致上納候様ニモ可被仰付哉、
末略、

天明六年十二月十日

御代官

(110162)

本文吟味仕候処ニ、不依何篇少事ノ儀ニテモ御益ノ筋
ニ相成儀トモ申出候様被仰渡置、御代官吟味之通、菱
刈与・祁答院与・山崎与下代出物藏川米ノ儀、江戸・
大坂御仕上米、内場繰入其外ノ御払米、届石マテ川米
被召付、運賃米払等ニハ川米ニ不及筋ニ被仰付候テモ
差テ船頭トモ迷惑仕程ノ儀ハ有之間敷故、乍然先年御
勘定奉行吟味ニ、菱刈与・祁答院与取納米東郷白濱村
マテ川下賃米一升三合、山崎出物下代藏ハ一升ツ、
川米相付百姓ヨリ致上納置、御仕上米船運賃込石高百
姓ヨリ川下米相納置候付、余米御得用ニ罷成筋ニテハ

如何ニ候間、向後ハ船頭運賃米ニ不限、地払米トテモ
白濱マテ相届候米ノ分ハ都テ川船賃米被成下候様被仰
付、且又、高岡与ノ内赤谷御藏米内場郷ヨリ相納候米
津下シノ節ハ中村マテ御物届、御番所外ノ諸郷ヨリ相
納候米ハ百姓ヨリ中村届御規ニテ、川米百姓ヨリ不相
納置候付、高岡与御藏米ノ儀ハ船頭運賃米払、川米ニ
付下ニ不及筋被仰付度旨被得御差図、申出之通被仰付、
御規模帳ニモ張紙ヲ以記置候様、寛保元年酉三月被仰
渡置候付、祁答院与・山崎与出物藏ヨリ御仕上米船運
賃米払・諸人過米払等ハ百姓ヨリ川米相納置候付、東
郷白濱マテノ川下賃米御法之通相渡申事御座候、高岡
浦ノ名出物藏取納米ハ百姓ヨリ川米不致上納、二付、
御仕上届米ハ中村マテ御物届、運賃米其外過米払等都
テ川米相渡不申事御座候間、何分御吟味次第被仰付度
奉存候、且、外場下代一組ニ三俵ツ、出物藏役人ニ
モ三俵、宿元統寄替ノ願、中略、此儀ハ有来通被
仰付候テハ如何可有御座哉、末略、

未四月廿八日

高奉行

本文調被仰渡、菱刈与・祁答院与・山崎与御蔵ノ儀、
 江戸・大坂御仕登届米運賃、島方並久見崎御統、其外
 諸弘方川米相付事候へトモ、江戸・大坂御仕登米、内
 場繰入、島方並久見崎御統ノ届石高マテニ川米被付下、
 運賃其外ノ御弘方ニハ川米不相付筋ニ被仰付候ハ、御
 出方ニ相成候段、御代官ヨリ申出候へトモ、右与々御
 蔵ノ儀ハ川下米トシテ取納米ノ応石高百姓ヨリ致上納
 置候付、届米外運賃米ニ不限、東郷ノ内白濱マテ相届
 候御弘米ノ儀ハ都テ川米被付下候段、去ル酉三月御証
 文ヲ以被仰渡候間、白濱村マテノ届米ニハ都テ川米被
 付下筋ニモ可有御座哉、高城与並関外御蔵々川米ノ儀
 モ有来通ニテ可被召置哉、

一 外場下代ニ差越候人、一組ニ三俵ツ、宿元統トシテ寄
 替米ノ願申出、御蔵元へ致上納候請取見届、返米御当
 地御蔵ヨリ相渡事候ニ付、内場へ御米差支候砌ハ外場
 ヨリ運賃米外ニテ繰入被仰付事ニ候、御物運賃付ニテ
 繰入相成候御米返米被相渡候筋ニテハ纔計ノ儀ニハ候

へトモ御損失ノ方ニ候間、向後ハ内場御米差支、外場
 ヨリ繰入有之候節マテ寄替米ニモ運賃相付、御蔵元へ
 致上納候筋ニモ可被仰付哉、 未略、

未五月七日

御勘定奉行

(110164)

此表、菱刈与・祁答院与・山崎与御蔵取納米ニ①相掛候川米
 並外場下代・出物蔵役人宿元統寄替米等ノ儀ニ付テハ、
 都テ御勘定奉行調ノ通申付候、左候テ、赤谷ト御蔵米
 津下シ川米ノ儀ハ有来通申付候条、如例可被申渡也、

天明七未七月三日

御勝手方印

(鹿島カ)
 鹿兒島邊

御勘定奉行

御船奉行

高奉行

御代官